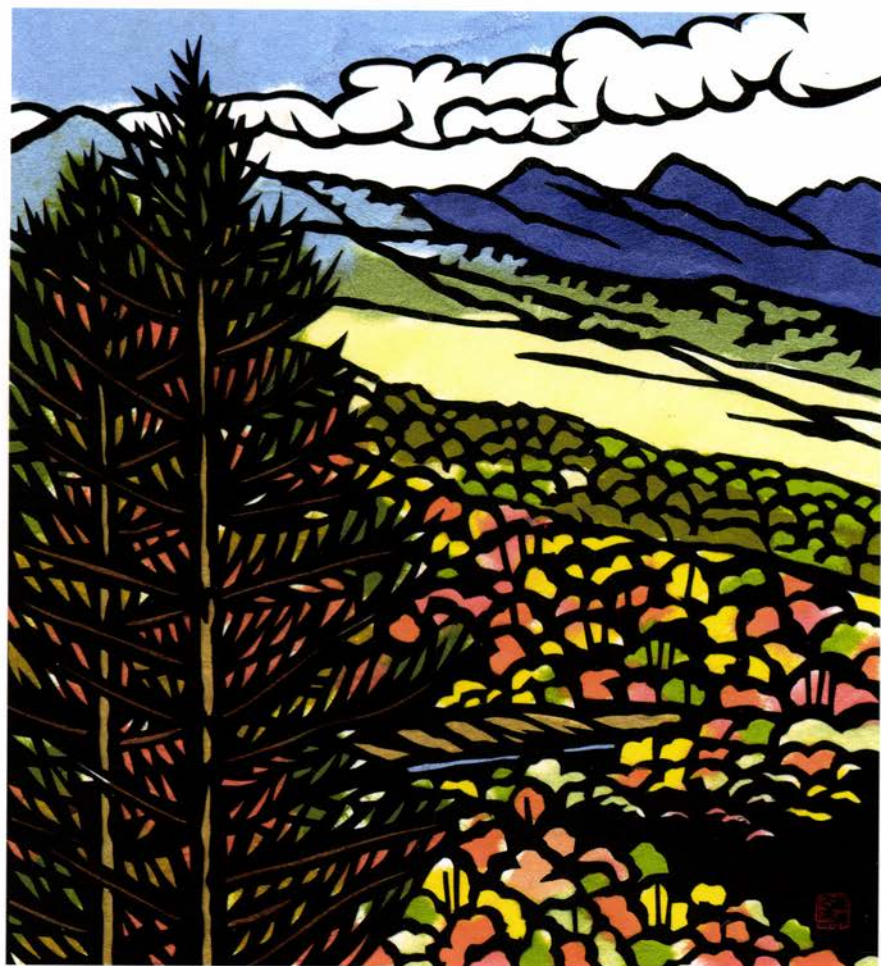


川柳塔

平成二十八年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇七四号



日川協加盟

第22回 川柳塔まつり特集

No.1074

十一月号

お知らせ

第5回 春の川柳塔まつり誌上大会案内

課題と選者（各題二句 共選）

「友」 長 島 敏 子（ふあうすと川柳社）
高 瀬 霜 石（川 柳 塔 社）

「書」 平 田 朝 子（川柳噴煙吟社）
新 家 完 司（川 柳 塔 社）

「雑詠」 植 野 美津江（番傘川柳本社）
小 島 蘭 幸（川 柳 塔 社）

投句料 一〇〇〇円（切手は不可）

締 切 平成29年2月20日（月）消印有効

※詳細は12月号

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■ 今年中に発表された句に限りです。
■ 締切 11月20日（本社事務所宛）

★事務所受付け時間変更のお知らせ
土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時
までお願いいたします。

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。
同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び
誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い
申し上げます。

★個人 一口 1／9頁 二、〇〇〇円
1／6頁 三、〇〇〇円

（巻末の台紙に原稿を貼付または記入して
お申込み下さい。）

★団体 次の四種といたします。

- ① 1／3頁 六、〇〇〇円
- ② 1／2頁 九、〇〇〇円
- ③ 2／3頁 一二、〇〇〇円
- ④ 1 頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 十二月二十日

川 柳 塔 社

紅葉の中の句碑

小 島 蘭 幸

紅葉の季節になると私は一つの句碑を思い出します。八島白龍句碑建立除幕式は、平成6年11月13日、広島県三原市の臨済宗大本山佛通寺境内で開催されました。八島白龍句碑除幕式に参列してと題して川柳塔社同人で故沖浜正宏氏は次のように書いておられます。…紅葉を頭にかぶり除幕式。厳かに臨済宗佛通寺大本山管長貌下の般若心経が谷にこだまする。読経流れる中、大きい思いの句碑が本堂に向いて輝く。

人生へ空の一字を彫りつつけ

白 龍

の文字が紅葉に照り映える。

説明によれば白龍氏の好きな句の中より、管長がこの句を選ばれた由。大勢の紅葉見物の旅人が句碑と私達を取り囲む、句碑の前に参列者一五〇名が温かく和んだ。シャッターがあちこちで切られる。参

列出来なかった協賛者三五〇名に御礼の謝辞を聞き、祝賀会場の三原グランドパレスにバスで引き返す。会場では嬉し涙の白龍氏が印象的だった。八島白龍先生は、三原万松川柳会の会長として活躍され、毎年二月に開催される三原神明川柳大会は、第60回まで続きました。

白龍先生は、麻生路郎師のふるさと尾道への文学碑建立にも尽力されています。文学碑の裏面に、協力者の一人として八島白龍と刻まれてあります。文学碑建立除幕式後の記念大会では、課題「海」の選をされました。

握り拳に鳴っているのは父の海

千 代

海が盛り上ってサーフボードが現れる

天 笑

街よりも面白そうな海の底

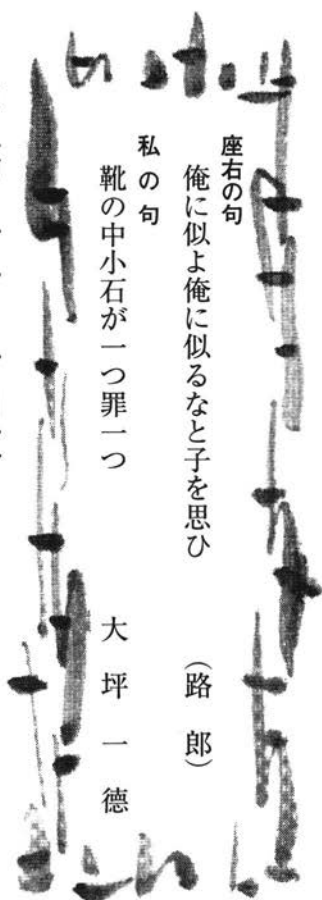
完 司

日本のドラマを海が組み立てる

白 龍

路郎師の句碑建立の御札が言いたいと、橘高薫風先生は体調の優れない中、三原神明祭川柳大会に出席されたことも懐かしく思い出します。

佛通寺は紅葉の名所でもあります。久し振りに紅葉の中の白龍先生の句碑を訪ねて、川柳界の現況をお伝えしたいと思います。



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

靴の中小石が一つ罪一つ

大坪一徳

川柳塔 十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「蓼科の秋」

■巻頭言 紅葉の中の句碑

川柳にもダイエツトを

小島 蘭 幸 …… (1)
川 上 大 輪 …… (2)

川柳塔(同人吟)

小島 蘭 幸 選 …… (4)

川柳塔の川柳讃歌

木 津 川 計 …… (44)

新川柳鑑賞

麻 生 路 郎 …… (45)

自選集

主幹・理事長の選任について …… (46)

温故知新

西 出 楓 楽 選 …… (49)

水煙抄

橘高薫風句抄 …… (50)

誹風柳多留一二篇研究

吉村侑久代 …… (72)

英語 de Senryu

新 家 完 司 …… (74)

せんにゅう飛行船

新 家 完 司 …… (75)

川柳にもダイエツトを

川 上 大 輪

「意志の伝達を言語に頼らない最たる国が日本である」とよくいわれる。言語にあまり頼らず以心伝心を重んずる日本の文化は、一を聞いて十を知る感性と知性の両方が求められる。余計なものを省いて、削って最小に純化されたものから無限を見るのである。」これは立野恵美子さんの『日本初、風立ちぬ』の一文であるが、川柳もまた、たった十七音の詩の中に人間の様々なドラマが繰り広げられている。川柳だけでなく俳句や短歌、絵画や生け花・茶道等においても無駄と思われるものが省かれ、壮大な空間や奥行きをもたせ「美」を構成している。

川柳を始めた頃は、言葉省略してしまふと句意が相手に伝わらないような気がして、あれもこれもと、やたら言葉を詰め込んでしまふ傾向がある。すべてを説明してしまつたり、報告だけの句になつてしまふと、句に余韻がなくなり、共感する楽しみがなくなつてしまふ面白味

第22回 川柳塔まつり

同人総会・おはなし・各賞発表・記念句会・懇親宴

愛染帖

新家完司選

(76)

檸檬抄「塩」

北野哲男・安土理恵共選

(92)

竹原川柳会創立六十周年 記念川柳大会に参加して

緒方美津子

(99)

一路集「乾く」

藤井則彦選

(100)

初歩教室「スリル」

大久保眞澄選

(101)

川柳塔鑑賞

山口光久

(102)

水煙抄鑑賞

江見見清

(104)

追悼 嗚呼 高島啓子さん

栃尾奏子

(106)

インスピレーション・ナビ 印象吟

木本朱夏

(107)

句会燦燦

大西泰世

(108)

各地柳壇(佳句地十選/川端一步・古今堂蕉子)

岩崎眞里子

(110)

十一月各地句会案内

柳界展望

(111)

■編集後記(ひとこと/柳田白沙)

朱夏・まつお

(128)

座右の句

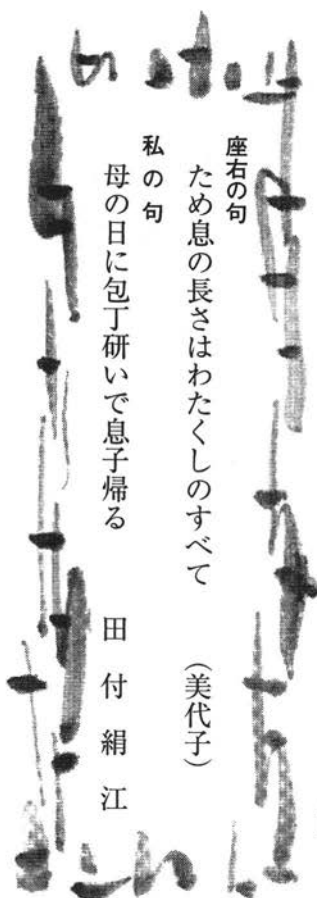
ため息の長さはわたくしのすべて

(美代子)

私の句

母の日に包丁研いで息子帰る

田付絹江



がなくなる。

よく言われることであるが、「ああそうですか」と言われる句ではなく「なるほど」と膝をボンと叩くような句でないのだめなのである。

「句に余韻を残す」ということは、読者がその句に対していろいろと思いを馳せ巡らせることの出来る句、それが余韻なのである。

余韻は省略によって生まれる。省略のない句からは何も生まれない。

私も私の川柳も最近余分三兄弟と仲良しになってきている。せめて川柳だけでもしっかりとダイエツトをさせなければいけないと思っている。

川柳にもダイエツトが必要だ。余分な言葉を削ぎ落とす、その削ぎ落とした部分を存分に楽しめる句を詠みたいと思っているがそう簡単にはいかない。しかし過剰なダイエツトは独りよがりや言葉遊びに陥ったりする。どこまでダイエツトをするのか、というのは作者の感性によるところであるが、「省略」をする勇氣をもって、推敲していかなければならないと思っている。川柳は難しい。

(平成20年11月号より)



小島蘭幸選

松原市 森松 まつお

半分の胃で肥えられる訳がない

わがままも包んでくれる誕生日

五分程並び豚マンふたつ買う

赤信号歩きスマホが渡り切る

どうしよう旅の記念の箸袋

彬の碑寄り添うように百日紅

河内長野市 山岡 富美子

モンタンの秋がそろりと来て座る

篝火のむこうシルエットは亡母か

おもいでを仕舞い忘れた掛け時計

山車の担い手フリーターらしい

パラリンピック私をチャージしてくれる

ドアロックわたくしはもう繭の中

弘前市 富士慕情

おや皆どうかしたのとデスマスク

塔パッチ胸で微笑む師の遺影

哀しみのお通夜見ている笑い顔

炎天下黄泉もきつと暑からう

百日紅ホロホロホロと師の旅路

楽の字に浮いてくるのは師の笑顔

弘前市 高瀬 霜石

のほんとと生きているのに傷だらけ

断捨離は続く衝動買い続く

コンペイトー傷の数だけ食べました

監視カメラ設置と書いて貼っておく

嘘見抜く力おんなに敵わない

安全な中国産はありますか

樺原市 居谷 真理子

ああ美しい義足も顔も輝いて

珈琲の味も静かな町だった

それぞれの鬼灯挿して六地藏

泣けるなら泣けと空には雲もなく

嫌ってはいません関心ありません

イカロスの翼を持ったまま老いた

倉吉市 牧野芳光

傷だらけのなすび夫からの愛
秋冷の候です酒が旨いです

夜が涼しいそつと徘徊に出よう

大阪市 谷口 義

血管が細くて知恵が回らない
秋の渚はショパンの曲を知っている
一時間働いて二時間眠る
煮くずれる男と焦げていく女
女房をじっくり見たら叱られる
いつまでも子供 おやつを待っている

笠岡市 藤井智史

山は去り烈火の如く恋をする

一飲みで終わらす美しき地獄

テケテケテケ青春はまっしぐら

失恋の深手で五体石になる

手料理の宇宙丸飲みできる愛

ハム摘まみ独り世界の車窓から

和歌山市 木本朱夏

終活の前に手紙を焼きすてる

体内にみどりを枯らしてはならぬ

季語のない街でばんやり生きている

秋夜長イヴ・モンタンのモノローグ

コンサートの余韻を月と揺れながら

生きた愛した笑った泣いた花手桶

桜井市 安土理恵

妻でした子の母でした確かです

何の因果か同じ病いでまたひとり

ほおずきの魂神棚にまつる

雲の峰ご主人に会えたでしょうか（高島啓子さんを偲んで）

電話掛けそうになる午後八時

ありがとうをさようならの時に言う

秋彼岸雲は流れて行くばかり

ちよつと横向いたらあの世かも知れぬ

お姉さんと呼んで下さる方がいた

吹田市 山本 希久子

天高く生きとし生けるものといとし

衰えてゆく思考力記憶力

連弾のピアノに冬が始まりぬ

次世代の税も荷物も重たそう

映画でしかみたことのないローマ

小さな火燃やして老いを支え合う

松山市 宮尾 みのり

堂々と女五輪旗持ち帰る

一見に如かず少年ひとり旅

花枯れてしまえば花の名も忘れ

通販で今日は神戸のハンバーグ

介護保険払い利用で又払い

腹くくる私に愚痴は似合わない

羽曳野市 三好 專平

戦争をしない日本が愛される

永六輔しゃべりつづけておられるか

美男美女あははと笑うワイドショウ

中国にも韓国にもないパチンコ屋

すみませんでしたと言えばすむ政治

戦争は人を殺してほめられる

藤井寺市 鈴木 いさお

川柳の師は豆秋と鶴彬

五年前ふいに鶴彬と出会う

惚れて惚れて惚れ抜いて恋まだ未完

親ひとり子一人ほかに猫二匹

難しい課題だ「美しく生きる」

不健康そうな主治医を案じてる

奈良市 米田 恭昌

リストラのずっと休めと言う辞令

離島栈橋カラフルになる盆休み

孫が去に蟬殻ひとつ置き土産

赤紙の来る夢を見た熱帯夜

天皇のお言葉溜息はカット

野球の話になれば無口の虎ファン

川西市 山口 不動

弟に歳を聞かれる墓参り

内村をモデルにします我が着地

悪ガキはどうも長生きしてないぞ

あこがれはミルク金時幼き日

贅沢は散歩帰りのシャワーです

錦織が勝った録画の安心さ

宇部市 平田 実男

火の車なのにバラ撒きする総理

四海波とつても高い小池知事

きついこと言ってる妻が浮き袋

人生の傘寿米寿は通過駅

僕の舌妻の料理は星三つ

年輪と思えば皺も勲章だ

八幡市 今井 万紗子

本当の事は問うまい墓場まで

二人して生き抜くつもり歯を磨く

追伸に書けばよかった好きでした

小児病棟いつも見ていた青い空

どの子にも愛の深さに底はない

目の前にもう居ないんだ茜雲

神戸市 能勢 利子

贅沢はバターたつぷり塗ったパン

11月号手にシドニーへお花見に

難しい話はスルーして平和

苦も楽もあつて家族という絆

仏壇の前に座るとほっとする

オレオレの電話を受ける暇はない

輪へ入りたいほどなつかしい盆踊り
鳥取県 石谷 美恵子

人形が人見知りして愛されぬ
やさしさへ甘える脳が焦れつたい
痛み止めのように友から届く文
盆の客帰った後が淋しくて

鳥取県 岩崎 和子

エンジン音一本道を駆けて行く
病室に一人静かな夫見舞う
熱も無く静かな笑顔ほっとさせ
後髪引かれるままにまたあした
今日も会い明日も笑顔で会いに行く

鳥取県 斉尾 くにこ

やさしくて面白いのに敗北者
コスモスは海 飛魚になれそうな
押してみた思わぬところが動いてた
無防備になつていく夕暮れのなか
水しぶき上げて万年筆走る

鳥取県 竹信 照彦

戦争を止めて国境無い未来
災害時頼りにされる自衛隊
海外へ行けばソルジャー自衛官
森林浴ちよつと山道ウォーキング
大違い若さの明日と老いの明日

仏壇へ今日一日の礼を言う

鳥取県 西谷 悦子

今日は雨脳も一緒に休みます
家族の完食たわいないしあわせ
虚栄心なくなつたよう老い進む
覚えられぬ隣家四人の子の名前

鳥取県 細田 裕花

散歩道青い穂波の歌を聞く
会いたくて残暑見舞のペン走る
背高の紫苑ひと足早く秋
母校消え思い出だけの空がある
明日には鳥になれそうストレッツ

鳥取県 松川 行男

夏の恋学生服で口惜しがり
コンビニを素通りしても引返す
四畳半真中で見る世界地図
母の膝寝息聞こえて読書止め
厚化粧目のクマ隠すガンバリ屋

鳥取県 山下 節子

花火見て燥ぐ子泣く子夏の夜
国中が燥いで泣いた金メダル
緞帳の内最後の仕上げする
カウントが気にならぬ程熱中す
あと一歩だった悔しさバネにする

鳥取市 池澤大鯨

兄弟が並んでいるのに似ていない
横に立つな一緒にはされたくないよ
並んでいるのに俺の前だけ素通り
白鳥賊が並んでいるが味と金
渋滞で辛抱強く車列する

鳥取市 加藤茶人

風呂敷が私はシヤネルよりは好き
叱られてなんぼまだまだある魅力
何故と言う疑問は解けぬ嫁姑
結婚と遊びは別のランク付け
ジャイアンが我が家にも居る反抗期

鳥取市 岸本宏章

お昼寝が上手になった八十二
弱くてもサード藤村からの縁
乾杯のビールを妬いている地酒
逆走が怖い車も台風も
クロマグロ誰がそんなに食べたのか

鳥取市 岸本孝子

スイスイと古希は越えたと今思う
八十で老いに気付くも幸せか
家事雑事歳相応の分を知る
同居して気付く家族のありがたさ
四季歳事ばちばち嫁に渡そうか

鳥取市 倉益一瑤

人許すかたちに咲いたハスの花
人形を抱く泣き虫の妹よ
苦手です一身上と書いておく
振り返りや派手な喧嘩もしましたな
まだ花火揚げる力は秘めてある

鳥取市 坂本とも湖

燥ぐ海恋する人魚姫を抱く
判一つつけば離婚は簡単だ
渡り鳥いくさもテロも見て疲れ
簡単じゃないですリオの金メダル
鏡池わたしの心なぜ写す

鳥取市 棚田大

あちこちで略語流行くらくらだ
人や物皆寿命あり生かし合う
生きているいや生かされる我が寿命
リオ五輪ぬくもりわかす大感謝
同窓会とぼけたふりしにらまれた

鳥取市 谷口回春子

金と欲捨てた暮らしも極楽だ
脳トレはなぜなぜなぜの孫の問い
余所行きのドレスアップの妻に惚れ
五七五詠むたび心空にする
女子会の締めテーマは姑と夫

鳥取市 夏 目 一 粹

ビックリしてもシャッキリは止まらない
挫折などしている暇はありません
なぜだろうホレた弱みの無抵抗
正論を吐いて保身を考える
負け惜しみ力を抜いていたなんて

鳥取市 永 原 昌 鼓

若人が夢を叶えたりオ五輪
金メダル取れぬ人にも努力賞
焼いた肌自慢し合った休み明け
なぜなぜの探究心が花咲かす
休日が増えただけです山の日よ

鳥取市 中 村 金 祥

沖縄旅行思い出尽きぬ症候群
暑かった筈だ野球にリオ五輪
納涼祭汗だくで盆踊り
庭の花友達にして午後のお茶
抜ける空見れば疑うことはない

鳥取市 西 川 和 子

コンビニへ私の足で行ける距離
コンビニのおでん嬉しい老い二人
コンビニの唐揚げサラダ缶ビール
来客に慌てコンビニまで走る
コンビニで手軽に揃う必需品

鳥取市 平 尾 菜 美

長生きの秘訣とに角動きなさい
オアシスの森へ未来と木を植える
持つべきは友ね会うたび気を配り
順当はいいねと夫を介護する
あこがれの癖もつ父の広い海

鳥取市 福 西 茶 子

なんちゃ無いと笑い飛ばして明日を待つ
十指では足りぬ人生変えたひと
三叉路の別れ残暑を抱いたまま
バーチャルな恋して鬱を吹き飛ばす
残りもの黙って食べるいい人だ

鳥取市 前 田 楓 花

親と子の微妙なサジ加減
甦る古い日記の中に母
素のままのあなたに会えただけのこと
思いやることが出来なくなつて雨
身勝手な昔の私とはちがう

鳥取市 森 山 盛 桜

術も無くゲリラ豪雨の中に居る
疑心など持たず清水が湧いて来る
簡単に箸から落ちて行く希望
澱むのは嫌いで根無し草でいる
銅メダルなんぞと悔しがる不思議

鳥取市 山下 凱柳

倉吉市 山中 康子

三分の二届き改憲走るのか

腹芸をちよつとやりすぎ身の破滅

先がないいたわりあつて生きるのみ

四十一個旗行列でお出迎え

籠の鳥出かけるたびに許し乞う

鳥取市 吉田 孔美子

平日だ農村広場猫 猫 猫

短日と種蒔秋はいいテンポ

これが夫明るい内の夕餉なし

退職後たった一年華やいだ

新築に引つ越せぬまま妻が病む

鳥取市 吉田 弘子

加齢です初期の難聴打つ手なし

格差生む戒名死して名を残す

赤信号わたし一人が止まつてる

公共施設和式トイレ見当たらぬ

四季彩る癒しの山に囲まれる

倉吉市 猪川 由美子

愛と絆の人が居るから走れます

国民栄誉賞むかし辞退のイチローだ

銀メダルでは満足できぬベテランだ

週刊誌の過激報道暴力だ

スマップ解散後味悪さ日々募る

窓辺からじつと見守るサルスベリ

羽根つけて飛んで見たいな大空へ

うつ伏せでアンヨピンピンひ孫ちゃん

生きてるうちに誉めて笑いあいたい

利尿剤飲んで病いを遠ざける

米子市 後藤 宏之

コマーシャル出だした力士負けがこむ

脛の傷だれももつてる気にしない

十本の指でたりない自慢グセ

白旗で降参おかずもどおり

アンコール見込んで準備二三曲

米子市 後藤 美恵子

散歩する帽子に野菜もらい受け

野草料理知ったかぶりはタブーです

満月に踊る私の影法師

亡き夫の世話を焼いた手もて余す

靴のサイズ老母未だに文でいう

米子市 竹村 紀の治

部屋の鍵かけてガッツポーズする

しょうもない思い巡らせ朝になる

鯉節のように年金削られる

水割りも湯割りも好きな副作用

秋刀魚焼きながらキッチンドリッカー

米子市 中原 章子

気取つても老化進行止められぬ
愛ちゃんのあふれる涙貫い泣き
逃したものの取り戻すのは大変だ
過去は過去未来は変えることできる
ふんわりと飛んで過ごせる時が来た

米子市 成田 雨奇

七人をおわして帰る家に敵
リオ五輪屈辱感はよくわかる
目覚ましを止めたらすぐに起きること
ポイントは盃を置くタイミング
冷蔵庫に西瓜がうまく入らない

米子市 吉田 陽子

展望台で確かな秋に逢つて来た
無作為で選ばれ返事してしまふ
自己満足を飾った壁が痒そうだ
恋なんてしている筈がない鼓動
名月へ今年の梅酒開けましょう

島根県 伊藤 寿美

お言葉が重い「生前退位」論
生流転大観の絵の風の彩
IUターン空き屋に一つ灯が点り
逆風もあり女独りの艀が軋む
アラジンのランプを資源ゴミに出す

松江市 石橋 芳山

逃げてから久しい夢の中の鳥
妄想のカナリヤ籠に戻らない
口角を緩めて悪人が笑う
病んでゐる黒か決意の黒なのか
忘れえぬ記憶に夜の難破船

松江市 小川 注湖

祝い皿鯛が真つすぐ立ち姿
リオの空ラリーが続く羽根の音
大笑い帰つて見れば米がない
座の話題初耳という顔で聞く
敵を知り負ける戦争した日本

松江市 藤井 寿代

昼顔に耳うちされてからの鬱
熱帯夜これからの事考える
ここだけの話はいつもラビリンス
深夜便聴いて私も柴田トヨ
命日に亡母からのメールが届く

松江市 松本文子

規則正しく食べて規則正しく逝こう
生き難しこの世独居も寄り合いも
流れ星もいいね別れていく時は
徘徊と間違われぬようタスキ掛け
右だ左だ どっちでもいいことだ

出雲市 伊藤 玲子

痩せた私に知らん顔した自動ドア

SOS ちびのシグナル見逃さぬ

薄くなった眼だが心眼まだ達者

手花火のボタリと潔い別れ

利休好みに二畳ばかりの小宇宙

出雲市 岸 桂子

良く出来た義母でも又の名は姑

約束の一つ二つに絡む義理

大望に燃えた日記を読み返す

針のない時計を抱いて旅に出る

成り行きで結んだ糸がほどけない

出雲市 小白金 房子

国境を持たぬ平和な鐘を打つ

主選手島根の誇り世に残す

稲藁で芸術光る宝船(いずも北島敦)

泣き笑い綴る日記の丸い文

神仏一体心に宿る老いの日々

出雲市 多久和 敬子

百均の傘で寄り添うにわか雨

あの日から親子のボール弾まない

味付けは目分量です主婦の勘

ちぐはぐな会話笑いの中に消え

甲子園母校の校歌聞かぬまま

出雲市 竹 治 ちかし

公園にスマホ手にした子が戻る

デジタルで刻む余裕のない暮らし

何ごとともホームページという時代

老う程に小さき幸の味を知る

スポーツも頭も出来る不公平

雲南市 松 本 昌

空の青知る井の中の蛙です

京の旅迎賓館の食思う

先手必勝領土を守れ海守れ

沈黙の多数となつて町に住み

友は言う後姿がさみしいぞ

岡山県 池 田 たか子

雲のない空に童話が生まれない

ぐうたらにシャンシャン蟬が急き立てる

勝ち負けは贅沢そばの花に立つ

コスモスの迷路を抜ける風となる

ミサイルに拉致の家族は置き去りに

岡山県 高 岡 茂 子

体重を気にして食べる梨ぶどう

本ばかり積みかさねてるダイエツト

田舎にもこんなに子供いた夜市

家々の夕餉の香りかく散歩

今日もまた返事をしないカギ財布

岡山県 田中 恵

木漏れ日の中をスキップして通る
地球から海がこぼれませんように
火消し壺の蓋は忍耐力がいる
小魚をいっぱい食べて補強する
がらくたを並べて同じ夢を見る

岡山県 山縣 のぶ子

トランベット明日を起こす午前五時
山歩きソフトクリーム頬張って
如意棒がほくの丹田打ちに来る
独り居の夢は昭和を駆けめぐる
赤まといでんと構えている達磨

岡山市 工藤 千代子

ひと言を飲みこむ波が荒れるので
平凡な夫とアラ汁を啜る
小さき火抱いているのも少し厭き
ソーメンを啜り昼からは図書館
見ぬふりも聞こえぬふりもして秋に

岡山市 丹下 凱夫

駅長の合図でシャンシャン蝉が鳴く
よく来たとお墓で待っているカラス
ゴジラ上陸土佐湾の雲の峰
木刀を振って気合いを入れている
陽炎を追いつづけている残生

岡山市 永見 心咲

前向きになれよなれると初尾花
投影のわたし右肩あげなさい
養殖の鮎だとわかる整二列
ボス猿になびかぬ猿に惚れている
虫の声白くまアイス食べ納め

岡山市 藤成 操江

百日紅去年と同じ庭の景
苦勞した話が好きな午後のお茶
子の傘に成り得たろうか日が沈む
結局は自分の殻にまた戻る
介護する四人姉妹の輪がきれい

岡山市 前田 恵美子

いい汗をかくといい顔きつとなる
筋トレの汗はさわやか若返る
心配は神に預けて軽くなる
ばあちゃんはハラハラだけで手は出せぬ
迷ってもまっすぐ進む五黄の寅

広島市 岸本 清

カープ愛どの球場も真っ赤っ赤
細細と暮らしてのになぜ太る
老けたなあ鏡と交わすひとり言
安全と言える所がない地球
再稼動責任とると言わぬまま

竹原市 石原 淑子

台風もてんやわんやで無事終る

済まないと思う被災の野菜高

激闘の赤ヘル魂日本一

嬉しくて優勝セールなど覗く

敬老の祝嬉しい孫レター

竹原市 岩本 笑子

生かされて私に影法師がひとつ

もう鏡見ない私の顔でない

忘れものUターンする数が増え

火は消した鍵は掛けたと思うけど

太陽の色ですトマトはトマト

防府市 坂本 加代

無関心決めて自由に泳がせる

ほめ言葉元氣印に火を付ける

菜園のカラスとモグラ競い合う

じゃんけんに勝った負けたで盛り上がる

人生のおさらいしよう再会す

東かがわ市 川崎 ひかり

明と暗わくわく待っている披露

一字ずつ雑念払う写経筆

晴れた日はホエールウォッチ出来る島

キムタクももうおっさんの域に入る

彼岸花咲いてひとりの秋を知る

松山市 栗田 忠士

味噌汁がスープに遠慮三世代

パラリンピックなんと義足の大ジャンプ

子だくさんテレビ特集する時代

通夜客を送ってからの真の通夜

意味不明でもありがたく聞くお経

松山市 古手川 光

秋日和心洗たくしてくれる

すぐキレル私を喰う蝸牛

流行と無縁で暮らす老い二人

人のエゴに弄ばれてる盆栽

肖りたいあの雑草のど根性

大洲市 中居 善信

私の志です飴ひとつ

原発が無ければ一過性の事故

見かけ倒しはあるのが普通鬼の面

肩の手よ私に何をせよという

飛ぶことを止めた昼間のワンカップ

西予市 黒田 茂代

森は母疲れたわたし包み込む

言葉には出せないままでいる感謝

追憶を抱いて遠いひとと居る

母の幻影だったのか今朝の夢蜚

青春吐息ばらもダリアも愛犬も

高知県 小澤 幸泉

老い一人涸れゆく海を眺め入る
四十年二人のドラマ終らない
疲れ過ぎ一人カラオケひとり旅
光あれ聖書の言葉握りしめ
欲深く生きてかわいい顔を見せ

唐津市 坂本 蜂朗

躊躇なく振ることもある日章旗
接待の酒が続いて腫れた舌
ドアの開け閉め強過ぎる今日の妻
トラブルがご破算になる子の電話
もっと楽しめとゴールを延ばされる

唐津市 山口 高明

元寇の堡塁址をご散策
人間の器が判る棺の中
江戸っ子の父は小鰭のスシが好き
蒟蒻の字が読めなくも大学出
中学に成っても一番前の席

熊本県 岩切 康子

女医さんの優しい素振り無言技
咽渴き只独り入るレストラン
柿の葉が落ち出し掃除増えてきた
朝日射す今日の幸せ手を合わす
半日で足りない受診変化なし

熊本市 杉野 羅天

汚染水漏れ影響はないと言う
毎日が試練日 老後の一日
城再建殿がりっぱなことを言い
山男気が合ったのか木を呉れる
握られ管理され男流される

沖繩県 森山 文切

冷蔵庫開けてギックリ腰になる
深い咳がして静かな夜になる
安い医者だから信じようと思う
腹が減るはずの時間は過ぎている
少々の臭いも許されぬタオル

札幌市 小沢 淳

入れ物がやたらに増えて秋が行く
褒め言葉人伝てに聞く心地よさ
肌合いの合う仲間とは三次会
一張羅タンスの奥でカビが生え
僕の血をたっぷり吸った蚊を叩く

札幌市 三浦 強一

親指の親父にも似た頼り甲斐
人差指誹謗中傷ばかりする
中指の優越感は背比べ
左手でサイン筆跡変えておく
両の手で汲む養老の滝の水

青森県 松山芳生

小銭入れみんな淋しい貌ばかり
蓮ひらく年輪積もるお盆来る
空は青高ぶるころ折り畳む
幸運を掴む手だ秘かに鍛えてる
線香花火に自分を置き換える

弘前市 浅田隆樹

草刈りは私にとってゴルフです
過ぎ去れば暑さ恋しいスキの穂
菜園の話農家はじっと聞く
億ションのテラスで育ったミニトマト
コンクリの裂け目に咲いた好奇心

弘前市 稲見則彦

ライバルがあっかんべしているらしい
意気込みもすっかり萎えたブランター
マドンナの面影もなくクラス会
女傘さしてやんやと囃される
ふる里をまた遠ざける友の計が

弘前市 岡本花匠

五楽庵師笑福くれて楽しませ
尊しや教え忘れずみち歩む
ねぶた終え津軽秋風赤とんぼ
趣味と生きころなごませ至福です
初曾孫一歳迎えめんこい娘

弘前市 今愁女

記憶力鍛えられると医者が言う
家事労働草抜きまでも運動に
買物はウォーキング兼ねスニーカー
自分だけの午後のひととき好きなこと
パリンピックの朗報北の嫌がらせ

弘前市 須郷井蛙

四年後へ川柳塔も舵は右
もう四年生きてやるぞと塔を抱く
ゴメンネの一言広い道にする
東京の五輪へ日本まつしぐら
鉄よりも石の強さに史跡群

弘前市 高橋洋子

絵葉書が写メに干される観光地
棘のある言葉呑み込む柔軟さ
軸足を変えれば見える人の色
生あくびドライアイには持つて来い
やりくりのアイディア詰めるエコバック

さいたま市 星野育子

アベノミクスよりカーブのV効果
日めくりカレンダー春のままで秋
スマホから歩き出す言葉が不明
飢餓の子救える軍事費一割
鉛筆十本削り迷路にいる

東京都 川 本 真理子

秋風に無邪気を徐々に脱ぎ捨てて
幸福になる作戦を練りに練る
耳に残るパラパラ漫画めくる音
人であることにホトホト疲れた日
ふるさとの合鍵がある胸のおく

東京都 まえで とよこ

台風一過見上げる空へまた台風
局地的大雨えらいこつちやなつきはどこ
まくらカバーのポケモンと寝た孫むすめ
閉会式 金銀銅へ雨がふる

「メダルが重いです」ポケモン世代がんばった

横浜市 菊 地 政 勝

ハネムーン来たのを忘れまた訪ね
美女を追う視線を妻が見逃さず
絵手紙の西瓜へ蟻も描き加え
思いやりあるから花もよく育つ
本人は望まないのに生かされる

富山市 島 ひかる

星の降る宿なつかしい妹よ
妹を詠んで呼んでの一周忌
冷凍の愛が時々解けたがる
開運の人を信じて来た轍
相思相愛ときどき喧嘩して居ます

可児市 板 山 まみ子

台風のテレビ見てる生ビール
日本の弱点ついてくる野分
敬老の日だと言うのにおさんどん
自立する手立ての一步免許証
親と子の夢食い違う塾通い

愛知県 早 川 遯 行

ひとことが根雪となった別れ際
言うことを聞かない脳に酒を足し
スマホ禁止車輛だつてあつていい
人は人ボクは迷わず生ビール
騙される金が無ければ騙されぬ

犬山市 金 子 美千代

簾にもUVカットある時代
減塩の努力をせずに済む猛暑
ブレッシャーをかけてしまった銀メダル
ライバルと言われるように精を出す
これという悩みはないが不眠症

犬山市 関 本 かつ子

荒れ狂う気象もきつと天の声
エアコンをかけて温暖化の話題
坊さんが若いと仏間にも生氣
生ゴミを出す奥さんに肩がない
パソコンもいろはのままで四年経ち

京都市 清水 英 旺

あつかんべ世間にも俺自身にも
金や銀よりも偉大な銅メダル
コンビニはあとくされがないのがよい
京都人の京都ぎらいは的を射る
ネクタイを締めれば現役懐かしい

京都市 藤 井 文 代

冗談で済んだ毒舌ホツとする
検査前断食にして休肝日
アンチ老化もう隠せないギブアップ
身構えた時点で負けを自覚する
煮ても焼いても変わらぬ姿勢マイペース

京都市 榎 本 宏 子

亡母の待つエンディングまでひとやすみ
水に流し流され夫婦妥協癖
美人に産んでくれた母さんありがとう
商談より難しい小遣い値上げ
浪花っ子になりそこなったかぐや姫

京都市 三 宅 満 子

賞味切れでも腐ってはいない僕
姑逝き気がねせず食べる秋ナス
エアコンの温度差夏は別居中
大器晩成待ちくたびれた五十の子
山坂を越えて金婚まぶしすぎ

長岡京市 山 田 葉 子

先延ばし二次災害をひきおこす
来た道のグレーゾーンに陽が当る
クッションの役割犬が引き受ける
レバートリー増やせとアボガドが叱る
動物的カンで今日まで来たのかな

大阪府 石 田 ひろ子

古いノート開くと喋り出す没句
夏バテの特効薬はカラオケだ
孫帰省寸法直し持つて来る
手荷物が老いの階段嘲笑う
ひぐらしが鳴いて夕日を食べている

大阪府 桑 田 ゆきの

郭公が鳴いて膨らむ森となり
蝉よ鳴け七十年の日を偲ぶ
病む母へゆっくり送る団扇風
新しい地蔵がかむる野球帽
大樺二羽のつぐみを育ており

大阪府 野 田 栄 呼

褒められることはないけどある元氣
まぐれ載りするから熱中する句作
目の手術推察力へつなげたい
欲出さず現状維持へ夕茜
陽を浴びて休みやすみの畑仕事

赤とんぼ連れて来たのは小さい秋
砂かぶりカメラ写りのよい和服
生命線長いと見る皺の数

大阪府 米澤 淑子

ドアそつと開けたら秋が立っている
お元気やねに精いっぱいの空元氣

大阪府 池上 清治

左杖右に孫の手米寿の日

今日もまた昨日の話聞かされる
揺れ落ちたぶどうに残る甘い味
今月も楽しく見れた新歌舞伎
月替わり着物選びに一苦勞

大阪府 井丸 昌紀

念入りにネクタイ締めている野心
ポケットからはみ出す欲を咎められ
目覚めたら財布が空になる神秘
成り行きに任せて肩こりが治る
真実を言う人がいて輪が乱れ

大阪府 内田 志津子

私にも懺悔することたとある
感動の心磨いてバラ五輪
朝涼し孫の話を聞いてやる
コンビニの残飯異国の子を想う
溜息は明日のやる気戻すため

闘病記読めばわがまま消えていく
川柳のシャワーを浴びにいく句会
電車ではスマホしないと決めている

大阪府 宇都 満知子

大阪駅ファッションショーを見るようで
ふわり来てふわり去ります憎つくき蚊

大阪府 江島谷 勝弘

先輩が左派だったので僕も左派
ライバルと思っていたが齒が立たず
真つ当に年金ぐらしきつおます

恋じゃないときどき起こる不整脈
この平和過去にさせてはなりません

大阪府 榎本 日の出

嬉しくてついぼんやりとしてしまい
長生きの秘訣時どき破つてる
良いことが続くと痛み消えていた
高齢化昭和生まれもぞくぞくと
寺巡る度に鱗をはがして

大阪府 榎本 舞夢

皇室も後期高齢お悩みに
あなたなら出来ると云われ引き受ける
こんな時しか会えないなんて通夜の日
尾道の町や風景おいしさよ
新鮮な空氣欲しくて小旅行

大阪市 大 治 重 信

大阪市 熊 代 菜 月

磯の香を包んで鮑届けられ

女房のちよつとが長い百貨店

長く生きすぎ間すき間に幸もあり

まだまだと思った老後迫り来た

郷愁にふと出会いけり花野風

大阪市 奥 村 五 月

大阪市 小 谷 集 一

頼りない夫信じてあの世まで

敬老日笑顔で妻と三杯目

飛びだした里に戻って妻と鍬

飯いらん言いつつ酒に手は伸びる

医者行かぬ朝はゆつくり十時起き

大阪市 笠 嶋 惠 美

大阪市 古 今 堂 蕉 子

なめられてたまるか小池都知事と都議団と

母校の寄付さつさと送付歳だから

あうんの呼吸息子夫婦と墓まいり

名店の弁当供え盆行事

大成功リオのバトンは東京へ

大阪市 川 端 一 步

大阪市 近 藤 正

セブテンバーソングを聴いてティータム

盤寿来て一步大事にしています

今年こそやるぞの決意いざ読書

ワンカップつけたうどんで仲直り

ガン手術終えたら怖いものはない

こっちおいで貴方の指が呼んでいる

カルチャーに通う余生の忙しさ

夏まけを言い訳にする昼寝かな

指折って数えた数にはげまされ

指折れば私はげます五七五

大阪市 小 谷 集 一

つぶやきは心の隙間から洩れる

唇の余韻は若き日の記憶

輪の中の優しい風に守られる

起伏いくたび最後の最後まで戦

遅すぎたダッシュを笑う蟬しぐれ

大阪市 古 今 堂 蕉 子

ひと手間を惜しむ癖が治らない

自分には甘い私の足が痺る

十字架の元でねむる日も近い

風邪で臥す私にごはんまだですか

スマホが火種中学生が殺された

大阪市 近 藤 正

標札に英語も表示彬の碑

年金は下方修正されるだけ

靖国が待ってるらしい新柱

砂利運び加担している機動隊

沖縄が憎いのですか安倍総理

大阪市 坂 裕之

夏バテを治してくれた通り雨
名が出ないまんま乾杯クラス会
ハトに餌与えないでと広報車
精一杯頑張ってこそ実る秋
天高く澄んだ空気に洗われる

大阪市 佐藤 忠 昭

根気ない僕が続けた川柳だ
煽てられ他句会顔出し恥の山
十年の中に入院四度あり
眠れぬ夜買った小説読む間なし
友人に川柳誘う無反応

大阪市 田 浦 實

アイロン掛け自分でやって老いに喝
若い時と比較するから悩むんだ
お互いに褒め合い元気付けている
街の地蔵手を合わす人美しい
若づくりしてもびくともしない老い

大阪市 津 村 志華子

雑踏の町を抜けると青い風
ふる里の温もりに逢う田舎バス
文明に疎いが古い智慧はある
喜寿傘寿身内はみんなご老体
この先も自分の彩で咲くつもり

大阪市 津 守 なぎさ

サミットの偉業に浸る鳥羽の宿
戦中のあれこれ思う飛行雲
句会場めぐりに余念のない老後
羨望を集める美女の大ジョッキ
役に立つ生きざま残すボランティア

大阪市 寺 井 弘 子

おもちゃ屋で孫の涙はすぐ乾き
道祖神取り巻いている曼珠沙華
山の日に登山挑戦する新た
明日からの暮らしを決める癌検査
ときめきの白髪を染める気にさせる

大阪市 寺 本 実

楷書でと読みにくい字で書いてある
台所ゴキブリさんとにらめっこ
父母の恩すべて失い総入れ歯
口説くのは踏切渡ってからにして
採めてでもどんな鳥でも皆欲しい

大阪市 栃 尾 奏 子

パンザイのかたちで落ちたおとし穴
諦めた恋ライバルと弾み出す
髪を切り女は強く美しい
妄想の小部屋で猿を放し飼い
夜が明けるやっぱり君が好きらしい

大阪市 中井 萌

暴走の自転車という凶器にて
看護師の細い肩には縄れない
これしきの難儀ごときに負けまいぞ
世話かけた夫にたたく減らず口
処方箋日にち薬というくすり

大阪市 原田 すみ子

待ち構えてるとやつて来ないチャンス
記念日の旗はくたびれても上げる
執着を放せば翼生えてくる
順不同訃報はある日突然に
その事は私の中で済んだこと

大阪市 平賀 国和

古里に帰り昔に会いに行く
墓参り竹馬の友に手を合わす
愛ちゃんの五輪ロマンズ金メダル
観光も五輪も平和あつてこそ
日本人戦後の初心忘れまい

大阪市 平嶋 美智子

いやな役受けて後悔まとい付く
両の手で数えきれない悪事持つ
良い事が有って夏ばて吹っ飛んだ
検査入院無罪放免軽い足
しんどいのも忘れちゃうのも歳のせい

大阪市 藤田 武人

喧嘩した夜はゴメンと囁こう
明日テスト徹夜の決意殺ぐ寝間着
肉じゃがの匂い一合追加する
何日も馴染みの店で悩む服
無人駅ひとり座りの椅子で待つ

大阪市 藤原 千恵子

メダリスト選手の横の家族愛
鎮魂の花火見えるか空光る
正座して両手合わせるやんちゃな子
聞く曲で弾んでみたり沈んだり
私ならそこで下向き萎えている

大阪市 升成 好

折半に情がからんでいる迷い
順番に言わぬと次が出て来ない
爺ちゃんの手帳葉のことばかり
まだ不要浄土の旅の時刻表
終章をいろいろる花を選つて買う

大阪市 吉内 タカ子

早起きは得した気分よく動く
前向きに五人の孫も選挙権
これからも三食うまい腹八分
九条の平和わたしの今至福
この夏にやあつと覚えた酔い心地

大阪市 若本 安代

沙羅の花亡父を語れば長くなる

自転車も定年がある喘ぐ坂

イヤフォンを外してごらん虫の歌

松枯らす虫が蠢く月明かり

ふりだしに戻す余ったネジ一ツ

堺市 柿花 和夫

腰痛に湿布より効く老いの恋

過ぎ去った恋と聴いてる虫の声

聞き役がメザシの尻尾持て余す

カタカナ語に負けるもんかと四字熟語

ブレーキがかからぬ真夜中のメール

堺市 加島 由一

東京の五輪見る気にさせたりオ

音楽の話が出たら貝になる

カラオケで好きな彼女にアブローチ

どう攻めたって距離の縮まらない彼女

同じ墓に納まりそうにない夫婦

堺市 源田 八千代

隣人に恵まれ天に感謝する

コースとヨガ心身をリラックス

句会デイケア脳と体のリハビリに

バスデイ次回は八十路仲間入り

日当たりと風通し良い終の家

堺市 齋藤 さくら

ふたりきりお茶におやつをもう三時

はやいても年金下がり続けてる

肉肉と食べていた頃なつかしむ

ビンの蓋開ける役目が妻となり

家二軒芸能人は稼ぎはり

堺市 坂上 淳司

メルトダウン戻せないまま五年半

石棺にも戻し切れない核のゴミ

汚染土を盛り上げ戻れない家主

常識にミサイルを撃つ北のドン

四半世紀支え続けたカープ女子

堺市 澤井 敏治

里の秋偵察に来る赤とんぼ

金婚の節目にも吹くすきま風

垣根ない路地には温い風がある

落款の傾きにみる自己主張

鳩の仮面つけてる鷹が恐ろしい

堺市 遠山 唯教

活断層に近畿の危険度が高い

徹夜してメダルの色をたしかめる

誰からも忘れ去られた誕生日

ビールさえあれば何とか生きのびる

迫りくる老いを嘆かず楽しもう

堺市 内藤 憲彦

自転車で津々浦々へこころ旅
左遷地でチャッカリ貰う美人妻
コップ酒笑顔のわりには手厳しい
食欲の秋にうれしい秋番茶
きつちりと風を読んでる法師蟬

堺市 村上 玄也

女房の記憶に時効などはない
毎日が日曜なので気が減入る
娘夫婦子が出来親の顔になる
事故ってはないが車は傷まみれ
好きなように負けたらいいさタイガース

堺市 矢倉 五月

痛いところ突くほど悪じやないわたし
何も彼も忘れた母のシャボン玉
杉箸を割る風合もよし老舗
削除キー押して白紙の美に気付く
あせらなくてもそろそろ雨は上ります

池田市 栗田 久子

戦争の世紀を生きた身を自覚
みなが皆マザーテレサにはなれぬ
譲られた席へ感謝をして座る
ポイントに釣られた今日の無駄遣い
食べ物の好み話題にはしない

茨木市 島田 誠一

赤恥も挫折も僕の宝もの
年金の幅で手品のように生き
歳時記の暮らし歪めてゆく文化
勝ち組が億ションで見る蟻の列
定年を境に妻の下剋上

茨木市 藤井 正雄

夜の顔昼の顔とにある格差
いろり火に岩魚が焼けて聞く民話
古文書の蠅に先祖の私語を聞く
豪快に三振明日に期待する
自己査定とっても甘くなつて老い

和泉市 横山 捷也

念力を掛けて猛暑に耐えている
この辺り橋が欲しいナ猛暑です
贅沢に慣れた真夏の昼寝
ライバルの前でサンングラスをかける
四十五度の角度から見る男前

大阪狭山市 矢野 梓

新秋刀魚すだち搾って夕御飯
梨葡萄仏も秋を食べ尽くす
あれが好きこれもだったと母偲ぶ
衣更えしては買物遠く迄
八十路入り体型だけが丸くなり

妻の攻めとほけ続けた迷演技
河内長野市 大島 ともこ

またですか美人に会うところける目
抜かり無い根回しの良さ舌を巻く
お坊ちゃまと呼ばれ人生舐めていた
妻に相談せず骨董を買うスリル

河内長野市 梶原 弘光
任せたい人に限って後ずさり

川柳に秋波送られ早や10年
後継の指名常識的な線

国越えて選手にエールバラ五輪
曲がってる情報喉に突き刺さる

河内長野市 木見谷 孝代
記念日を忘れつつつま合わせてる

仲良しの秘訣程良い距離保つ
秋風に背なを押されて畑仕事
大根の芽が出た虫と知恵比べ
ささやかなゆとり抹茶の香り立つ

河内長野市 黒岩 靖博
妻の毘はまって諭吉召し捕られ

愚痴を聞く背中合わせの夫婦仲
母さんの返事ハイハイ二重奏
八分目余力を残し老いの坂
働かぬ蟻も平等生きている

河内長野市 谷 久美子
瀬戸際に立つて咄嗟に得たヒント
晒すほど強情になる夫の灰汁

アルバムの中で弾んでいる私
愛娘箱入りのまま虫付かず
酸欠になればみどりの森へ行く

河内長野市 辻村 ヒロ
言い分けの矛盾つかれて寒の入り
塾通い石をダイヤに輝かす

ネジ外し暴れてみたい呆け防止
嬉しい日柱のキズを孫が越す

不器用で歩幅合わせぬかたつむり

河内長野市 藤塚 克三
遺言状書いたら遊びしたくなり
御破算で願いましては我が決意

手付かずの古里の良さ悟る歳
駄目な人ね妻のひとこと酒がいる
樹の下に孫と知らない種を蒔く

河内長野市 松岡 篤
嫁姑溝埋めたのは老介護
若き日の理想の彼を介護中

メールして届いているか電話する
孫自慢ブレーキの無い電車内
バス停へ行ったり来たり孫来る日

河内長野市 村上直樹

四條畷市 吉岡修

善男善女ひとつになって風の盆
ボケモンGOその情熱の使い道

ノラ猫までブームに乗って頭が高い
縊り戻すチャンスまな板歌ってる

先憂後楽お陰で酒がまだ美味い

河内長野市 山室光弘

沙保里さん負けて騒がすりオ五輪

情報公開大事な所はのり弁に

近頃は昭和の常識通らない

小池劇場郵政の闇が少し見え

晩婚でも立派な手柄子沢山

岸和田市 岩佐ダン吉

核で死ぬか核を無くすか今やと

あちこちに傷負い私見えてくる

大勢にまた流されていたんだね

直線を走って僕は傷だらけ

閃きを忘れた頭載せている

岸和田市 雪本珠子

現実と向き合い夢が覚めてゆく

だんだんと愛が重荷になっている

去る者は追わない事にしたのに

赤い糸紡ぎ直してチャンス待つ

何時になく棘を含んだ目をしてる

折り込め鶴折りました飛ぶように

司会などするもんじゃない食べられぬ

ライバルはびんびんしてるいう噂

あちこちへ顔出してます運だめし

お顔では思いもつかぬやさ男

吹田市 太田昭

老婆の植えた花壇と会話する

言いたいこと言おう化石になる前に

女の涙で黙らせられたのが最後

暗黙のルール絆が守りきる

生きたくて今日も背伸びをしてしまう

吹田市 大谷篤子

ドア一枚仕切るわたしの小宇宙

一時は自分の歳も忘れがち

せめて着てるパジャマで昔に還る

しょうがない男女というものは

私の携帯守秘義務ありません

吹田市 木下敏子

足らんとこ足して上手に八十路坂

躓いた石に注意をされた朝

曲り角ちよつとゆつくり考える

姿見を見ればやっぱりお歳です

ひとりでも登って行ける八十路坂

故郷から届いた海と山の幸

吹田市 須磨活恵

ヒマワリの首重たげに種を抱く

しっかりとけじめをつける返し針

しみじみと兄弟のいる温かさ

赤とんぼそして三回忌が終る

吹田市 野下之男

台風が日本好きでも度が過ぎる

回答に笑顔つけてる都知事さん

独居には災害ニュース身にしみる

あの人の笑顔木刀忘れない

毎日でもオウムを見てる仔犬の目

高石市 浅野房子

オリンピックメダルいただき幕下ろす

オリンピック終えて世間は静かなり

いい事を思い付いたがすぐ忘れ

天災がつづきこの世が怖くなる

ネガティブで一步も前へ進めない

高槻市 井上照子

今年こそとて過ぎて来たはや九月

三分のテレビ料理も時によし

栄転をよろこぶ妻も荷は重い

夏休みバイトで学ぶ処世術

一等賞親のいい顔徒競走

元氣出す朝一番の朝顔に

物干しにリボン結びの赤とんぼ

爺さんが雷と言う遠花火

越して来て十年まるで夢のよう

命日を忘れないでと揚羽蝶

高槻市 片山かずお

なんと呼んでも正体現さぬ節

酌み交わすうちにチラリと愚痴も出る

キレイな声を聞くとお顔を見たくなる

雰囲気が大事明るい服にする

汗をかく業です盆の墓掃除

高槻市 島田千鶴子

夏草の中でこおろぎ鳴き始め

駄目なところ見せて気持を軽くする

平凡な町で安らぎ抱いている

もめごとが老いの住処に飛び火する

銀杏がころころ御堂筋は秋

高槻市 初代正彦

水撒きもゴミ出しもしたい朝だ

早急に寿陵をたててから達者

ものぐさもスマホは飽きず日日覗く

核ミサイル又かと思うのが怖い

錦織の悲願Vを待つも幸

高槻市 杉 本 義 昭

妻が留守コーヒーにジャズ夢心地
ブックカバー中に潜んでいるドラマ
ジーパンの女が跨ぐ蟬の殻
削除キーボンと哀しみ忘れ去る
照れくさい云いつつマイク離さない

高槻市 左右田 泰 雄

どこでどうねじれたのかなこの話
無理をせずそつと流れに身をまかせ
この坂を越せば開けて来る明日
あこがれをふんわり乗せた白い雲
まだまだと卒寿の足を踏みしめる

高槻市 富 田 美 義

長寿など関心ないと呑み仲間
回らない寿司は場所だけ見て帰る
もう余命ないけど金は未だ余裕
命懸け守った子等も散り散りに
アッそーで幕引きなのか我が命

高槻市 富 田 保 子

十指みな動く幸せじつと見る
デパ地下でいろいろ学び手抜き学
絵ハガキで心配させぬ子へ便り
芸術の秋にフルート響きけり
量よりも質で食べたい年となり

高槻市 原 洋 志

遠い日の想い出と飲むラムネ水
冷奴以上も以下もない暮らし
さくらんぼ皿に数えるほどの幸
おれ頑固お前も頑固とろろ汁
路地裏に夕陽詰まっている過労

高槻市 安 田 忠 子

何事も無くて幸せ夏終る
いらいらを日記に書いてほつとする
デジタルへもう追いつけぬ頭です
難民の選手十人夢舞台
ついに来たか大阪駅で道迷う

豊中市 江 見 清

生き方を支える若い日の苦節
そこそこの人物らしいまだ無言
体力がないから口がお手伝い
それなりに生きて賞罰には無縁
耳打ちのことを復唱してしまふ

豊中市 藤 井 則 彦

役に立つと信ずればこそ出る勇氣
残り香に責められている午前様
情熱の赤が眩しいマチスの絵
引き算ばかり重ねていつの間に傘寿
健康だと他人の痛みは分らない

豊中市 松尾 美智代
選ってテレビ見ても途中で寝ています

ところで話す言葉やさしい彩になる
愛と言う不確かなもの追っている

突然聞く友の訃報に胸塞ぐ

これから勝負残された日々錫色に

豊中市 松村 里江

やりくりでつくす女のまぜごはん

天狗の鼻折ったまさかのレントゲン

何げなく詠んだ一句で賞を得る

良心の汚れゆだねる弥陀のみ手

土壇場で男の強さ見せつける

豊中市 水野 黒兎

なお夏の猛暑の余韻物忘れ

ふる里を訪ね見知らぬ人が増え

百歳の童無心に粥する

明日の夢見ながら帰る終電車

胸になおときめきを秘め喜寿の酒

富田林市 片岡 智恵子

目の前の一本道を疑わず

心の傷に時効は来ない花の芯

振り向けば故里遠き亡父母がいる

スタートは野心に燃えて乗った船

方向音痴列を離れてもどれない

富田林市 中井 アキ
頑張って来たなと摩る両手首

夏を支えた庭のゴーヤとミニトマト

迷惑をかけない様に端にいる

群青の空から亡夫の応援歌

精一ばい生きていますよ子も孫も

富田林市 中村 恵

ほのほのと少し抜けてる妻がよい

あなたが奏でると私踊ります

ストレスの仕業か贅肉の嵩は

やさしさが欲しくて病氣探してる

激論の的は私に向けられた

富田林市 山野 寿之

丑の日に鰻が食える妻の愛

貢ぐだけ貢いだ愛がそっぽ向く

ゆつくりと小銭を探すレジの列

ポケモンを探す公園子が居ない

姿見と話して自分取り戻す

寝屋川市 伊達 郁夫

故郷の川に洗いに行く挫折

退屈の海で小舟を漕いでいる

小さいが私にもある残り福

ハイハイと言って仲間の顔をする

居酒屋の洒落たユーモア持ち帰る

寝屋川市 籠 島 恵 子

逆縁の初盆いまもアホやなあ
無礼講天狗の鼻もまぎれ込む
黙っているだけで個性とはズルイ
矢印はだあれもつけてくれません
だんまりも頭数にはなっている

寝屋川市 富 山 ルイ子

彼岸までの暑さクーラー我慢せぬ
冷房か草引きか腰痛み出す
整形外科往復タクシーを使う
二年振り話やまほど眠れない
来年も元気で会おう傘寿すぎ

寝屋川市 平 松 かすみ

コマーシャル程に効いたら死ぬません
コマーシャル毎日聴いて手が伸びる
手土産で孫から順に手懐ける
灯台の映画手に汗にぎりしめ
十一月家計簿僕の手になじむ

寝屋川市 森

茜

かなかなが呼ぶふる里は遠くなり
西日射す部屋に一通置き手紙
フリーマーケットに吊す初恋物語
ボランテニア帰って点滴のベッド
身勝手をなじられそうな墓掃除

羽曳野市 安芸田 泰 子

食べ切ってしまう献立冷蔵庫
雑草と知らず育てた植木鉢
天井に一夜で老いたゴム風船
何するも猛暑が過ぎてからのこと
早々と蟬鳴き終えてまだ炎暑

羽曳野市 宇都宮 ちづる

夏休み今日は花火で孫を釣る
書道展孫の元気な字を誉める
神経衰弱わたしをカモにする五歳
まだ履けるくつ下捨てる娘の世代
朝刊のまずはチラシを見る財布

羽曳野市 徳 山 みつこ

悼みつつ名簿に朱線引く晩夏
わたしも庭も熱中症のまま初秋
涼風が動いてすすき赤蜻蛉
鼻も背も高いチームによくやった
官邸へ届くかアリの叫び声

羽曳野市 中 川 ひろ介

男気が若手の奮起うながした
遠花火浴衣祭りの本立寺
六十周年竹のオブジェで記念する
旅心惹かれる安芸の小京都
二十五年ぶり東京ドームで胴上げだ

羽曳野市 永田 章 司

高野山数多くの墓が割拠する

宇宙より地球解剖先だろう

送り火に亡母のさよならする姿

一強は嫌だが受ける皿がない

選挙での分裂裁き腕を見る

羽曳野市 藤 原 大 子

世間の波遅れまいぞとニュース読む

あれ夫この頃動作スローだな

二歳児の見聞きするものみな宝

割りきれぬこと幾つかがポケットに

幾つかの顔を持ってたんだわたし

羽曳野市 吉 村 久仁雄

ファストフードの店の笑顔の目が怖い

年金の幅で蕎麦道励んでる

正解が複数あつて生きてゆけ

友見舞うあとは飲み屋で一人酔う

近道に選んだ路地の花に酔う

東大阪市 北 村 賢 子

鏡の顔元気をくれる紅をさす

いつてらっしゃいおかえり聞けるだけで幸

乾くころ少し華やぐレッスン日

カレンダー印無い日の長いこと

相性は良かった筈のAとO

東大阪市 佐々木 満 作

竹原の家並み凜として風流

自然との共生人は知恵絞る

デフォルメが過ぎて自分を見失う

遺言書はけないうちに認める

終活へふんぎりつかぬ喜寿の坂

枚方市 海老池 洋

今更ながら角栄語録を読み直す

迷いから抜けたく仏画写す僕

CMの美女を信じていいですか

ふんわりの言葉を探す母の辞書

昭和遠く巨泉六輔千代の死去

枚方市 小 林 わ こ

いい歌だ元気を貰う盛り上がる

茶碗むしボクに松茸見当たらぬ

茶髪にピアスこんなシェフから買う団子

買わなくてよいもの結構あるのです

欠点を隠さぬ友と午後のお茶

枚方市 丹後屋 肇

断髪式敢えて涙を拭わない

後輩に抜かれた脚の泣き笑い

百一歳矍鑠為せば成ると謂う

中八に一刀両断する選者

鼻歌で世のぬかるみに立ちむかう

枚方市 寺川 弘一

言い訳で分厚くなつた広辞苑
万歳は思い切り両手をあげる
戻らない昨日もそしてその前も
燃え尽きるまでが命という炎
年寄りの恋は可笑しいものですか

枚方市 二宮 山久

我庭のコスモスゆれて赤トンボ
明暗を分けた五輪の夏終わる
介護士の瞳きれいな昼下がり
発表会スター気取りの猛練習
青い空俺を呼んでるハイキング

枚方市 二宮 紫鳳

鈴虫のBGMでおもてなし
夏終わり子らの歓声通学路
コンサート パワーもらって若返る
夏疲れ手足伸ばして露天風呂
全細胞よみがえらせる発表会

藤井寺市 伊藤 アヤ子

盆栽にひずみをつけて美の世界
走馬灯に面影浮かぶ母の顔
町内の豊年祭り寄付集め
赤とんぼ植木の枝でひとねむり
収穫を目の前にして災害地

藤井寺市 太田 扶美代

長所とばかり思っていた短所
蟬去ってひまわり達の店仕舞い
自問自答ジグザグ道を振り返る
二人がかり一生かけて解くクイズ
無作法は承知見つめさせて貰う

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

何はともあれ黙って柿を剥いている
浮き雲よく日寝ると逢えますか
見る夢もだんだん若さ消えてゆく
その事は忘れましたと萩は散る
冬眠をしよう煩わしくなった

藤井寺市 高田 美代子

君が代を聞きたがつてた金メダル
台風が狭い日本をノックする
優しい声だ心の温かい人だろう
思い出を止める真つ赤なクリップで
明日が来たら続編を追おう

藤井寺市 津田 シルク

セールの故郷訛りに気がゆるみ
社の情勢腹をくくって聞く社員
歯車が軋み出しても夫婦なり
左指まるめ口元へがサイン
来年の約束しない根無し草

藤井寺市 増井 ヨシ枝

肌チョットつまみ老化をたしかめる

肌布団一枚重ね虫の声

黒揚羽お元気ですかと庭に舞う

秋明菊ピンクに亡姉に逢うた朝

アリ一匹見ずに今年の夏終わる

藤井寺市 吉田 喜代子

うす紅を差して行きます墓参り

異常気象体力気力失せて夏

大衆魚出世したのかサバサンマ

秋まつり手作り人形おどり出す

八十路道女心をまだ磨く

藤井寺市 若松 雅枝

外面だけは若く達者なおばあさん

若いと言われ持病あるとは言い難い

リハビリへピンクのシャツを出して着る

天候不順今年の蝉は鳴き足りぬ

あの頃の凜凜しい君も車椅子

箕面市 大浦 初音

戦中派生まれついでのエコの道

思っていることの半分言えば良い

へらず口きける間は大丈夫

誕生日うれしくないが生きてこそ

この年になってもあるか反抗期

箕面市 酒井 紀華

不揃いの野菜が旨い夏の庭

砂時計去ったお人を数えます

育児日誌ひとつふたつと知恵のあと

急がねば古里きえる過疎の街

紙ヤスリおんなの爪が自己主張

箕面市 出口 セツ子

人間の本質善と信じてる

手の込んだ嘘に騙されとく平和

経唱え無心に歩く山修業

一日を楽しく悔いなく生きてやる

白い歯が何故か善人らしく見せ

箕面市 広島 巴子

良い兆しオーロラのような日が昇る

天然泉効いて熟睡リフレッシュ

パラリンピック自分の甘さ気づかされ

里のどかされど寂しい人恋し

おセンチな秋髪切ってケセラセラ

八尾市 高杉 千歩

素直に呆けたら可愛いおばあちゃん

唇のご飯嘗め合う特養の夫婦

百歳も七十歳も同じ飯

昨夜亡くなりましたと特養のマイク

特養の個室は天国である

八尾市 宮崎 シマ子

神戸市 奥澤 洋次郎

淋しい時娘に虚勢張っている
ふわり来た姥捨山のやすらぎよ
水差さないで私夫を信じてる
ひとりでも婆は生活崩さない
万華鏡どっちを見ても歪んでる

八尾市 村上 ミツ子

毎年届く暑中見舞が来ない
脚がつるシンクロの真似ただけで
ぜいたくな悩み娘がそばにいてくれる
二人なら三食用意しなければ
言いわけばかり考えて筆無精

八尾市 山根 妙子

茄子紺のエステしたよな美しさ
シンクロは水得た人魚跳ねるごと
雑念を水に流せる歳もよし
美術展遠い人待つ京の駅
投句紙の名前みやげに帰阪バス

神戸市 上田 和宏

大きな恩ずつと忘れているみたい
百薬の長はやめろと医者と言う
○×テスト結果を見れば認知症
喧嘩して仲直りしてまた喧嘩
川柳で中毒もする治癒もする

忘れもの一つ残して秋の空
パソコンのエラー私が悪いのか
オリンピック酒のつまみは出来てるか
長編を読む根が失せ虫時雨
一日中笑っていたい空の色

神戸市 富永 恭子

術なくて秋の初めの蚊やり香
残念な事だと老いを嘆く母
夫婦枕亡父の分だけ箱の中
突撃し自分で自分も余す
歯の抜けたようだね君のいない夏

神戸市 松井 文香

出来るかもきつと出来るにある未来
いつからか背中の中チャック上がらない
何億歩待っているのか兎の一步
階段を見上げ溜息一ツつく
また挫折幾度初心に戻るやら

神戸市 山口 美穂

元気な声で互いに不調を電話口
Tシャツ二枚洗って干して夏はゆく
虫の声つくつくぼうし遠慮させ
秋刀魚とも言えぬ高値にただ惑う
レシビなしであの亡母の味分量

神戸市 山崎武彦
白黒を付けず勝ち組み確かめる

喝采の嵐に幕が降ろされず
昼の月あわ淡と出る北新地
ひとり分の鍋が煮え立つ都市砂漠
たびたびの度忘れ早よう医者行かな

明石市 梶谷和郎

大都會善の数だけ悪も住む
定年の俺には来ないアンコール
笑顔みせ金が絡むと乗り出す身
盾を貫くことしか鉾は考えぬ
あふれる湯に骨の軋みが溶けてゆく

芦屋市 黒田能子

仕切るのが好きなんだから任せとく
あと少し我慢をすれば咲きそうだ
お互いの我慢もあつてまだ一緒
急かされて衝動買いをしてしまう
愚かだなあまだ戦争をしてる国

芦屋市 竹山千賀子

満月がきれいで友に電話する
顔のしわ深い男だ頼れそう
頼られていると分って湧く元氣
額縁を変えて亡夫も衣更え
あるだけで心安らぐ夫婦枕

尼崎市 市坪武臣
原爆の日こんな猛暑であったのか
動く歩道止まらず前に進まねば
ほのぼのと家族が揃う今の幸

リオ五輪茶の間で弾むジイとバア
お出掛けに呑んで来るのと妻が聞く

尼崎市 藤井宏造

鯛がいやしてくれる夏疲れ
念入りに化粧して散歩行く
二人目もどうも出戻る予感する
ネオン見るとスイッチオンになる身体
それからの話つづかぬクラス会

尼崎市 藤岡りこ

息子は父の娘は母の背を見て育つ
短いが手足真つ直ぐ伸びている
小学生路地裏好きな登下校
病にもおしゃれ心は忘れない
感情がうすくなり老い穏やかに

尼崎市 山田耕治

白いページ残り何枚ありますか
ケアホームへ手品の笑い持っていく
川柳という病氣です治らない
孫五人母には記念日の多し
八十で文学少女ほの見える

加西市 金川宣子

不器用も一歩ずつなら進めます
旅支度あれやこれやとまず試着
一見の振る舞い酒に酔いしれる
手術台地獄極楽運次第
四年後の年齢見据え金目指す

篠山市 北澤稠民

空想で金の成る木を買いました
不況風わが家のすきをのぞき込む
人知れず流した汗も灰になり
愛すれば花も笑顔で答える
溜息を酒の力で吹き飛ばす

篠山市 酒井健二

名所では無いがオーシャンビューで眠る
首すじをなでて弱ったフリをする
路上キス大した愛じゃ無さそうな
磨いても白くならない歯で笑う
健康のオタクで今日をやり過ぐす

篠山市 酒井真由

約束のふたつ返事が頼りない
寄り添うて八十路波立つこともなし
しょっぱい汗を拭っている軍手
老いふたり羽を休めているベンチ
目の先にある思い出の森の泉よ

三田市 足立つな子

起きぬけの身にしむ水に湧く活路
リハビリの経過良好金メダル
コテージの孫の目変わる西瓜割り
イルカショー児らの歓喜の水しぶき
患って幸せを知る果報者

三田市 石原歳子

料理して食べてもひとり味気ない
朝早く元気をもらうゴミ出し日
近道があっても回り道をする
慣れているひとりで散歩並木道
黄金の田圃の色がちと薄い

三田市 上垣キヨミ

感謝して尊い汗の米を研ぐ
養殖に慣れて知らない時価のトロ
手術待つ廊下鼓動が鳴り止まぬ
不摂生付添人が叱られる
仏より自分の為におはぎ買う

三田市 上田ひとみ

私をだますことなど容易いと
その肩はまだまだちから抜けてない
雑音は子守り歌です悠々と
一生けん命お乳吸い上げ 命
指先のちから未来は輝いて

三田市 尾崎 一子

人が好き人のかかわりもつと好き
ささやかな趣味にも師あり友もあり
子の悩み見破る母の聞き上手
ふる里の大気に自縛とき放つ
曼珠沙華はつほつ咲いて彼岸入り

三田市 北野 哲男

月の出に漣の如く虫の声
夏休み孫の宿題手に負えず
ねぎらいの言葉を添えた酒を干す
秋祭り人の都合で日曜日
フランスにシャンソン日本には演歌

三田市 久保田 千代

抜け殻に蟬の魂見てしまふ
老いたかな弱気を誘う肉ばなれ
加齢してうたがり深くなりました
いつからか親とおなじはやき癖
一切を無にとび超える水溜まり

三田市 多田 雅尚

還暦に赤い衣服は着ていない
マスクした歯科医の話聞き取れず
獅子唐の辛さで決めた今日の運
休刊日意志の弱さにまた負ける
反抗期無い子の方がなお恐い

三田市 野口 晶子

意表突くレッドカードにある殺意
突き刺さるトゲもろともに抱く覚悟
器に盛る水が馳走になる炎夏
白黒をつけて一氣に水を飲む
やめなはれ天使のラッパ主戦場

三田市 福田 好文

故郷に帰れば今も匂がある
ホスピス棟嘘と笑顔を置いてくる
相槌を打つと話が長くなる
肩書が出世と言われ行く僻地
医者よりも妻の見立が的を射る

三田市 堀 正和

老眼鏡いいニュースだけ読んでいる
スイッチオフしばし一人の雲がくれ
半世紀運転免許ありがとう
ありがとうバスのお客は僕ひとり
袖枯れるもう植え替えは間に合わぬ

高砂市 松尾 柳右子

大阪の地をはなれて戸まどう日
近くにて世話してくれる娘居て
良い空気でも大阪がなつかしい
冷ヤッコ口当り良い昼のめし
会合で顔のつや等ほめられる

宝塚市 田中章子

竹原に遊ぶまっさんと遊ぶ

バリバリとせんべいの味旅の味

父に主張母には妥協教えられ

しゃべり出すサンローランの口紅が

胴衣持つ少年の眼にある未来

西宮市 秋元てる

後退りばかりの日々にひ孫出来

ハンカチの折り目に吸わす嬉し涙

伸び代は未だある筈と九十七歳

無理はしない明日は誰にもやって来る

病院に物音一つ無い恐怖

西宮市 足立茂

お酒よりひと足早い選挙権

心機一転明日の風に乗ってみる

ニッポンの良さを忘れた日本人

イケメンの中から探すお金持ち

スポーツ紙がおだててトラは今日も負け

西宮市 緒方美津子

老いた父寒い話はすなという

梅花藻はきつと咲きます川掃除

灯の消えた里に残ると母頑固

元気です町のはずれの提灯屋

太陽のふりそぐなかテロで死す

西宮市 亀岡哲子

初秋なり私のドラマ今佳境

自慢話も共に笑える友がいる

少々のもめごと生きるアクセント

負けん気が足りずのんびりのほんと

入道雲いつしかうろこ雲流れ

西宮市 西口いわゑ

絵手紙で友の暖かさに触れる

雲悠悠々ゆっくり風も秋色に

エアコンも疲れましたねありがとう

百日紅に散歩の足をしばし止め

なんとなく終わる一日いとおしい

西宮市 福島弘子

町おこし力を借りる「赤トンボ」

オルガンの響く式場天使舞う

新しい羽根頼もしい一年生

潤いを失くした世間軋み出す

自分の事出来るだけでも御の字と

西宮市 牧渕富喜子

終戦は十六歳の夏だった

何でもいいどうでもいいを言い過ぎる

今が規則正しく只過ぎる

それなりの青春だったほのあかり

夕映えが哀しいものになってきた

西宮市 山本 義子

内緒ですもやしの根っこあらどりで
自己診断はノウノウですよ認知症
姿見は閉じたままでは駄目だめよ
ピザトースト手馴れて朝の定番に
仰せどおりクーラーつけて夏籠もり

西脇市 七反田 順子

言い負けて今日も一日無事終る
一善をこなして明日の陽を待とう
寝ころんで雲と一緒に旅に出る
油断してバリアフリーに蹴躓く
有り難い雨が降ったと申し上げ

南あわじ市 萩原 狸月

十秒の壁の向うにあるメダル
スタンドの愛国心が振る国旗
言葉から槍が飛び出す野党席
ポケモンGOかく操られやすき民
機械化で磨いた腕が泣いている

奈良県 安福 和夫

義理を欠く後ろめたさが薄れつつ
泣き寄りの機会を減らす家族葬
病院の待合室がいまサロン
斜にしか握手をしない国もある
政治家に平和を託す不安湧く

奈良県 谷川 憲

猛練習いまだ遠くに甲子園
PLのラストゲームに大拍手
飼いだに女性の匂いチェックされ
大都会秘密めかした人の群れ
秘密基地思い出の中に生きてる

奈良県 渡辺 富子

かぎ裂きのところを癒す里の山
休み休み生きて自分の花咲かす
眼鏡替えあなたの笑顔しかと見る
熱帯びた息子の夢と酌み交わす
父と子の建築談義エンドレス

奈良市 阿部 紀子

紫芙蓉一輪残り秋の空
曼珠沙華紅白ふいに咲きました
ブラジルのビール苦味がありました
年なのに胸が痛くて寝れません
リハビリの車に慣れず乗る夫

奈良市 大久保 眞澄

よく見たら懐メロ歌手も同世代
隣の花とつい見比べる墓参り
まるで怪談真夜中に見る総入れ歯
オバチャンの自転車ルール蹴散らして
先生が病気で休診の医院

奈良市 加門 萌子

日本の祭り花火は素晴らしい
遅咲きの朝顔やつと控え目に
穏やかに季は移らない野分荒れ
つらいな被災地にまだ厄続く
他所ごとと思わないようする自戒

奈良市 辻内 げんえい

過去は過去十年あとを思う古稀
休み休みそれでも歩く一万歩
メダルラッシュで東京五輪ひかりさす
前撮りで見事な笑顔七五三
海外でビックリ孫の英語力

奈良市 山本 昌代

いつだって笑顔優しい肩がある
来た道を思い浮かべているふたり
朝顔が咲いた涙をそっと拭く
夕べの雨澄んだ青空生みました
手のひらが温いずうっと一緒にです

生駒市 飛永 ふりこ

絃子さんのショパン心の玉手箱
丁寧に生きねば限りある時間
おしゃべりとチョコでうきうきバスの旅
ハイタッチできる会話に酒すすむ
十年の足の軽重千光寺

香芝市 大内 朝子

老楽はプラスの思考から生まれ
オムレツのふわりとろりは愛だろ
地上から消える日の来る現実み
素のままで酒酌み交わす友がいる
亡父母と見た夕陽と同じ夕陽見る

香芝市 山下 純子

人生を戻してみてもこの夫
亡き父の麦わら帽子西日浴び
ペダル漕ぐ君の背中に身を任す
妻乗せたペダル重くて踏み出せず
ダラダラと過ごしたい日に客が来る

和歌山市 磯部 義雄

耳掃除老いても妻の膝枕
福耳がピクピク噂キャッチする
愚痴ひとつ言わぬ介護の嫁と居る
猫死んで孫の泣き顔もらい泣き
赤紙が正夢かもとテレビ消す

和歌山市 上田 紀子

抜いても抜いても形状記憶伸びる草
正論を吐けば味方が消えていた
虚と実の狭間へ夕日落ちてゆく
諍いよ静まれ地球ただひとつ
カタツムリお前も時代乗り遅れ

和歌山市 柏原夕胡

食欲も落ちゆく母の認知症
恵まれているみたい嫉妬をされている
甘えたいのかなピンクが好きになる
カーテンを閉めて明日への羽根たたむ
おーいお茶言わせてあげた日もあった

和歌山市 喜田准一

解決の一步手前で煮え切らぬ
用意した答え変えてる場の空気
集中をすれば周りの道も消え
花束を貰って探す花ことば
トラブルを避ける一手が見え隠れ

和歌山市 坂部紀久子

ハードルを下げて下げて暑さ越す
才女でもみんな同じに歳をとる
万華鏡のようなおしゃべり聞いている
聞き上手で相手素直に出す本音
おっさん同士抱き合っている金メダル

和歌山市 武本碧

トッパ行く蟻はぶつつんだ出来ぬ
潮時を待つてさくらは花ひらく
戦いが済んだ証だあくが浮く
互角には戦う意志のない蛙
この思い届く絵文字が見当らぬ

和歌山市 玉置当代

暑さゆえ反りが合わない共白髪
炎天と戦い汗の鍬洗う
満月になると亡き娘を思い出す
まだ伸びる信じて孫の背を押す
にわとりが水飲むように薬飲む

和歌山市 土屋起世子

風鈴を終い虫の音聞いている
非常袋中を覗いた防災日
敬老日きつい言葉に感謝する
まだ履くと思つて磨く男靴
長旅を癒してくれた我が家の灯

和歌山市 福井菜摘

執着を捨てれば読める風の彩
ひと呼吸おけば心も濾過される
苦労した過去は言わない太い指
財宝はないが家族の灯が丸い
許し合い心を蝶にして帰る

和歌山市 福本英子

ハガキから孫の絵手紙はみ出して
他人ごとのように思っている卒寿
加齢臭消す香水が高すぎる
裏口を開けてあるのに帰らぬ子
五輪からパラリンピック大和魂

和歌山市 古久保 和子

ひまわりの首が重たくなる晩夏
苦虫を噛んだ歯だからよく磨く
一人分の音でレンジが呼んでいる
角の出る気配心がむず痒い
ふんわり着地ひとの情けに囲まれて

和歌山市 堀 富美子

生きている限り仮面は外せない
曾孫抱く温さが走る血の絆
棘のあるジョークと知った日の迂闊
食べて喋って当分は行けそうだ
防災リュック賞味期限を確かめる

和歌山市 松 尾 和 香

野球応援続くわたしの楽しみも
太陽をかくす風吹き癒される
秋あかねレフトの回り風に乗る
善悪の境に立った女神さま
平和今そして未来へ鶴を折る

和歌山市 松 原 寿 子

君がいてワルツのような輪が温い
聴きましよう本場仕込みの安来節
激流に揉まれて答つかみ取る
いつかきつと私の彩になるだろう
世渡りが下手で樹海に迷い込む

岩出市 藤 原 ほのか

犬掻きでひっしに大河渡りきる
浮き草のようにプカプカ立ち泳ぎ
人間のエゴが平和を掻き乱す
平和への警笛鳴らす民の声
どんぐりを拾った日々はセピア色

海南市 小 谷 小 雪

本日のシナリオは闘う場面
終わってから逆算をして答出す
まったりな緑目玉も休ませる
よういらっしやい つくつく法師御一行
斜めから九月の光愛想良し

海南市 堂 上 泰 女

嫁さんの仕付けが光る後始末
大夕焼け少女の頃を懐かしむ
お気の毒被災地へ又台風が
台風が農民の汗無駄にする
セブテンバーソング虫達の宴

紀の川市 北 山 絹 子

モノクロの記憶が残る青春符
泣き虫がまさか社長の椅子につく
鉛筆を削った後の杜快さ
雑学の森で途方に暮れる父
薄味になって父から出た本音

風の子がしぶしぶ決めた塾通い
 紀の川市 楠原 富香

顔色を読んで二人の歩が揃う

賢者の知恵待ち侘びている被災の地

デイサービス笑顔で送り荷を下ろす

添うてみて意外な妻の底力

紀の川市 山 東 日出男

決戦はジャンケンポンの一騎打ち

掴もうとすればスリと逃げる虹

マンボウは浮いているやら泳ぐやら

炭鉱の街も寂れて今日の月

LEDよりもお得な月明かり

紀の川市 辻 内 次 根

しがらみを解いて自由な風になる

この世での味方は一人妻だった

多くの秋精霊蜻蛉飛んでいる

手のひらの木陰に移す蟬の屍

七錠を飲んで嚙下に支障なし

田辺市 岡 本 昇

やることを忘れなければ忙しい

朝顔の蕾数えて水をやる

まあまあ値で売れたよと梅に施肥

シンプルな暮らしに要らぬ物捨てる

飢餓の子に待つておれよと鋏を振る

目と耳で若さを保つ好奇心
 麻酔から覚めれば医者Vサイン
 蝉の声体温さらに2度上げる
 情熱がタクトの先に乗り移る
 早足で過ぎてしまった絶頂期

橋本市 石田 隆彦

平成29年度 業務分担表		平成28年11月現在	
	常 任 理 事		
総 務 部	島田 誠一	久保田千代	坂 裕之
企画事業部	片山かずお 久保田千代	足立 茂	石田 隆彦
編 集 部	木本 朱夏 内藤 憲彦	江島谷勝弘 森松まつお	大久保眞澄
句 会 部	古今堂蕉子	石田 隆彦	居谷真理子
同人誌友部	江島谷勝弘	鶴田 遠野	吉村久仁雄
渉 外 部	藤井 宏造	松原 寿子	
会 計 部	鈴木いさお	坂 裕之	内藤 憲彦
発 送 部	足立 茂 吉村久仁雄	江島谷勝弘	藤井 宏造
事 務 部	森松まつお		

◎太字は部長（部長以外は50音順） アンダーラインは新常任理事

川柳塔の

川柳讃歌

(43)

上方芸能評論家 木津川 計

家へ帰ると家を出て行く妻哀れ

福士 慕情

絶唱である。今号の慕情さんの五句すべてが川柳の「智恵子抄」である。

「雨風に頓着しない妻の足」「警察大妻の行方を見失う」「夜通しの徘徊僕も眠れない」「限界か妻の介護の矢が尽きる」

妻の認知症をこれほども哀切に詠んだ川柳家がいたのだろうか。「人間商売さらりとやめて／もう天然の向こうへ行ってしまった智恵子」を大きな両腕で包んだ高村光太郎のように慕情さん、奥さんを守り続けて下さい。

ありがとう今日も朝には目が開いた

棚田 大

八十歳から猛烈に売れた浪曲師の広沢瓢石衛門さんの記憶力は抜群だった。遠い昔の浪曲界を事細かに語り、「上方芸能」にも「浪花浪曲粹ばなし」を三年連載、貴重な証言を残した。ことに艶話の達人で酒席で人気を集

めた。一人暮らしだったのが、「どうかこのまま目えが覚めませんように」と佛さんに願うて毎晩寝ますねん」と何度も語った。こういう寝方もあるが、大さんには「朝には目が開く」喜びがある。その幸せがいつまでも。

カリスマの等身大はまあ小柄

加藤 茶人

大立者や偉業をなした人物は堂々たる体格と思わせる。実際、西郷隆盛は偉丈夫だったが、「河内山」は松江邸で北村太膳に切る啖呵で「かの下々でもてあそぶ川柳とやら申す雑俳にも、大男総身に知恵が廻りかね、形ほど知恵はござらぬな」と嘲笑った。西郷も「総身に知恵が廻りかね」たのだ。明治を構築した薩摩の大久保利通との違いだった。

茶人さん、カリスマの小柄はよいとして、

「川柳とやら申す雑俳」は聞き流せません。

今は言える当然いるの妖怪よ

川本 真理子

NHKの「ラジオ深夜便」でこの七月の三夜「怪談さまさま」を語った。平和な時代には怖い話がブームになる。平安時代中頃の地獄絵や地獄草子、江戸時代の「播州皿屋敷」「四谷怪談」「真景累ヶ淵」「牡丹灯籠」などの怪談そして現代のお化け屋敷から「妖怪ウォッチ」への流れがそれにあたる。

無論幽霊や妖怪は想像の産物だが、真理子さんには妖怪は「当然いる」と思える。実際東京にはうようよ、大阪にもどこにでもいる。

空店舗守る立派なアーケード

井丸 昌紀

今朝の新聞が伝える。「百貨店や総合スーパーは地方都市を中心に業績が振るわず、閉店が相次ぐ」と。JR三ノ宮駅前のそごう神戸店は「売上高ピークの三割」という。街が変わる。人びとの好みも暮らしも変わった。だから道頓堀にアーケードをとったとき、藤山寛美が反対した。「盛り場には雨が降り、星が見えなあきません。塞ぎこんだら開放感がうしなわれます」と。落ちぶれた心齋橋筋のアーケードが昌紀さん同様に異質に見える。

忍従の跡は写真にうつらない

岸 桂子

「顔で笑うて心で泣いて／行くぞ嵐が俺を待つ、はディック・ミネの「長崎エレジー」だった。辛い気持ちに笑いでごまかす場合がある。苦笑と云い、苦笑いでもあった。見た目で心の奥底は判らない。が、大阪の海は悲しい色やね、と上田正樹は色に悲しみを見ていた。誰かの人生が忍従だったとして、その跡は桂子さん、写真の色に出てくるのでは。

新川柳鑑賞 (57)

麻生 路郎

汽車の戸はガチャンと締めるものらしく

(無 鬼)

ガラガラッ、ガラガラッと汽車の通路の戸を明けては行くが、明けっぱなしの人が多い。これ位なんでもないこと柄を軽く穿っている句は稀れである。川柳は何処にでも落ちていと言う感を深くさせられる。

邪教が知らんがバスの客が増え

(万 古)

いいものが必ずしも人気がある訳ではない。人気があるから必ずいいものとは限らない。だが、しかしと言いたい。あの神さまが近々二、三十年間の発展ぶりには驚かない訳にはいかない。駅前から社頭までバスがズバリとならぶ。すべてが信者であるか、どうかは別としてワンサワンサと詰めかけるバスの乗客は物凄い。何んだか考えさせられるではないかというのである。

大阪だ月賦のラジオが鳴り出した

(清 潮)

朝っぱらからジャンジャンラジオが鳴り出すのも大阪である。五球のスーパーですと言う、そのラジオも、その実月賦の品で、まだ半分も払えていないのである。「アラわたしとこのラジオも月賦なの」とも何とも言わないが、流石に大阪、向い三軒両隣りから鳴り出すのである。

我れは山の子大阪からリュック

(永 断)

大阪駅から各地の山を目指してサッソウと発って行くリュックの姿は青少年の羨望の的に違いない。「我れは山の子」と言い切る山の魅力は大したものである。

又かいなと大阪城を案内し

(多久志)

次々と郷里から人が来る。見物となると先ず大阪城を案内することになる。コンクリートの天守閣から、大阪の街を見降ろすから、大いのところは見たいような気になれるのである。この句、又かいながよく利いている。

大阪は悪の榮える灯もともり

(一 瓢)

アルサロ、キャバレー、バーのネオンで渦巻く大阪。ここへ吸い込まれて来る限りの男たちは酔いどれ、使い込み、女の誘惑に身を持ちくずすのであるが、そうした男

を相手に悪の華が榮えてゆくのである。そこを作者は「悪の榮える灯もともり」と観たのである。

二枚ずつ二枚ずつ切る熱海駅

(薫風子)

熱海と言えば、新婚旅行に、アベックに一度は足の向くところだと言うのがこの句のテーマでなければならぬ。

改札の係は二枚ずつ二枚ずつ重ねてパンチを入れる。この句は熱海で結んだ嬉しい夢を抱いての帰路であることは言うまでもなからう。

ソロバン川柳は理智が働きすぎて詩情が希薄である。

富士遠く橋の高さに及ぼさる

(喜 由)

景色を詠んだ句としてなかなか面白いネライだ。まるで東海道五十三次の広重の絵を見るような句だ。

「アレが富士ですよ」

指さされた方を見ると、ちつとも見えない。

「どこに？」と訊けば

「それ、あそこですよ」

と、遙かに遠い富士が橋の下方に見えていたのであった。

遠近法をねらったのがこの句のいのちである。

自選集

小島蘭幸

四千発の花火の中の師のことば
師も見たであろう大花火の哀歌
師の色紙私の色紙歳月よ
大会は終わった祝杯はひとり
台風に待ったをかけたのは愛だ

三宅保州

曲がつたことが嫌い運河も私も
ライバルのことは何でも知っている
玉虫色になるとは限らない妥協
覗いてはいけない井戸に蓋がない
生きるとや見えぬゴールを追っている

宮西弥生

富士山の見える角度にあるシャワー
億ションに住み替えていく蟻の列
水玉もすぐに消えいく秋の空
太陽が燃えても冷やす秋の風
七彩の告白を待つ秋の出番

リフレイン

八木千代

過去たちが奏でてくれる眠り唄
月と寝て風に目覚める くりかえし
わたくしのままで去りたいから 起きる
終わりまで書くの五感のあるうちに
いつでも好きが捨てたいほどの世ではない

両川洋々

格安で汚れた地球売りに出す
イスラムの棘が星条旗に刺さる
熊にすりや近頃人が出て困る
丸腰で話せほんまの平和論
離婚届妻へドローンで届けたい

板尾岳人

ちんちろりんばちばち冬眠するマタギ
熱熱のタコ焼き食べている蜻蛉
鈍臭い男と暮らす砂時計
終電車に遅れたビール芋焼酎
命あるかぎり馬鹿には逆らわず

林瑞枝

太陽を仰いで自然に出る笑顔
浦島太郎信ずる医者の手が温い
海沿いの人生海へ感謝する
老いて今想う家族の巣が温い
触角を伸ばして余生の身を守る

奥田 みつ子

武庫川の流れゆつたり今日も晴れ
娘を送る駅で不覚の涙見せ
友達の友達誘う思いやり
詩どころ忘れ空しい日を過ごす
ペランダの花の色香に魅せられて

川上 大輪

猛暑です今日も半分溶けました
点描画点の一つが私です
鮎ちゃんはくれない緑のおばちゃん
あきらめる他なしこれも時代です
そう言えばそうかも知れん何となく

小西 雄々

気づかずに独り言いう年となり
免許証かえし不自由身にしみる
祝日へ国旗を出したことが無い
引き摺った欲が大きくなってきた
つつがなく体は稼動よしとする

斉藤 焔

芋を掘る土へ感謝の姿して
森の中秋の恵みを探して
曲がってる胡瓜正直なんだなあ
茴香の花に出逢った散歩道
りんどうの藍に誘われ来た峠

新家 完司

銃を持つ権利認める似非文化
元氣度じやサンバに負けぬ阿波踊り
散歩道風吹くたびにビバルディー
わらべうた聞こえず柿の実が太る
自爆テロ遠くビールの栓を抜く

津守 柳伸

お裾分け甘い巨峰のしたり顔
食欲は猛暑乗り切るパロメーター
思考ゼロ身内の異変察知する
探し物時間厳守にうろたえる
陽の当る道で笑顔をとり戻す

都倉 求芽

点と線つないでみても今日は今日
二人っきりの暮らしの中に時差がある
特大の雷が落としていった秋
旧暦も新暦も同じ十五夜を拝む
享年と思えぬ歳に掌を合わす（嗚呼 啓子さん）

土橋 螢

生と死は夢まぼろしの中にあり
葬送の曲はゆっくり海ゆかば
乱世を見送っている曼珠沙華
若者に年金の荷を重くする
煩惱の空念仏に月が出る

この歳でどんでん返しあろうとは
先行きは思わぬようにして眠る
神仏を恨むことある昨日今日
悪夢ならそろそろ覚めるはずなのに
川柳で現実逃避しています

晩酌にスイッチ今日の影映る
スイッチを押せばテレビに弾の音
スイッチのミスで大臣本音吐き
スイッチの切り替えに慣れ重い尻
一票の意思スイッチを動かすか

心許せる友を数えて眠りつき
夢の中僕を見つめるほくが居る
恰好をつけると自分見失う
頼らずに老人力で生きてゆく
少年に神の裁きが待っている

塔へ行く出雲の神と伯耆の神と
朝五時に寝ほけた顔で米子発
道の駅用もないのにバスを降り
着いた着いたと川柳忘れやや浮かれ
一日を過ごした柳友と賑やかに帰る

西 出 楓 楽

仁 部 四 郎

前 たもつ

政 岡 日 枝 子

第74回 秋の吟行句会 ご案内

日 時 11月28日(月) 午前10時30分集合

集合場所 烏丸丸太町ハートピア京都(月例会場)前
(地下鉄「丸太町」下車5番出口エレベーター)

行 程 集合次第タクシーにて真如堂へ
境内散策 句会場真如山荘(椅子席)

予 定 12時 食事 13時 句会
16時ごろ散会

兼 題 「当日雑感」「ボンコツ」
「やきもき」「飯」
各題 3句

会 費 5000円(当日いただきます)

申込締切 11月20日まで

榎本宏子あて 〒607-8231

京都市山科区観修寺堂田70-16

TEL 075-591-0424

主 催 京都塔の会

出雲総合芸術文化祭

第38回 出雲市川柳大会ご案内

日 時 11月13日(日) 10時 開場

会 場 パルメイトホール 4階

兼 題 (各題2句) 出句締切 午後1時

「豆 腐」 竹治ちかし 謝選

「告げる」 清水美智子 選

「約 束」 伊藤 寿美 選

「鍋」 渋谷由紀子 選

「帰 る」 長谷川博子 選

「感 謝」 新家 完司 選

席 題 なし

会 費 1500円(発表誌呈)

主 催 出雲市・出雲市川柳連盟 他

主幹・理事長の選任について

川柳塔誌平成28年6月号にて社告案内致しました主幹・理事長の選任につき、7月1日から10日までに川柳塔社事務所に届きました立候補届は無く、依って「主幹・理事長の選任に関する規則」により主幹の再任、理事長の再任が下記の通りとなり、10月1日の同人総会に於いて承認されました。

主 幹 (再任) 小 島 蘭 幸
理事長 (再任) 新 家 完 司

立会人

会計監査 藤 村 亜 成

会計監査 西 村 哲 夫

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

父母の歳はるかに越して誕生日
らくがきのつもりが個展までひらき
悪人も善人もいる河内弁
勲章をやるとは誰も言つて来ぬ
日の丸を見ると鯨が逃げてゆく
もの欲しい男にやらぬチョコレート
海の子の血潮が騒ぐシーレーン
年寄りの話を聴かぬウォークマン
意にそわぬ音でグラスが合わされる
老い哀し畳のへりにけつまずき
山の辺の道に落ちてる相聞歌
水枕干す日は母の顔も暗れ
お帰りと言う目に何時も裁かれる
階段の多い文化の街に住み
一票の力いくさを嫌いぬく
子ができて鬼のなさが深くなる
洋菓子のいちごが媚を売っている
またしても戦 埴輪の目が昏い



西 出 楓 楽 選

大阪府 神 野 千恵子

ガラケーという希少種を持ち歩く

方向は変われど日差し今だ夏

ショーウィンドウ映るわが身にトホホホホ

顔の皺増えて脳膜つるつるに

パラリンピック心に力もらってる

賛成と言うだけに出る委員会

三田市 谷 口 修 平

あっちっち地球が悲鳴上げている

室外機熱中症でダウンする

迷う振りしてるが実は決まってる

日時計が朝日と共に目を覚ます

お先にと譲る余裕の無いトイレ

ゴーヤではどうにもならんこの暑さ

箕面市 中 山 春 代

ふるりの梨が重なるビッグな日

ピフォアフターパチンと閉じるコンパクト

飛行機が苦手で持たぬパスポート

ベタついた鉛ちゃんもらうハイキング

芋虫になった気分の五十肩

道の駅味覚の秋をおとな買い

和歌山市 倉 橋 悦 子

風の彩訪ねて秋の身繕い

懐かしい笑顔に変わる万華鏡

ハイヒールもうつり橋は渡れない

衣食住足りて元気で独り住む

使いみち考えている低利息

美容院だけで見ている週刊誌

福井市 伊 藤 良 一

正直な言葉に時間まで止まる

世渡りに猫なで声も使ってる

妻の留守そこはかとなく隙間風

時々立ち泳ぎして風を読む

ことごとく妻の助言の老い支度

お帰りと暖簾に言われ馴染む店

池田市 上山堅坊

タイガースへ厳しくなれぬ浪速っ子
ネット時代子どもを縛る術がない

とことんまで詰めることなく和をたもつ
土作りにちゃんと応えてくれる花

同趣味と分かって弾む初対面
窓口を広く開けよう老いの窓

尾道市 小畑宣之

まぶしい程美しいのはイミテーション

腹一杯英気を吸って泳ぐ鯉

本処分出来ず断捨離はかどらず

満天の星よわれらも宇宙人

最後まで未完の神器それで良し

大股で歩けば若く見えるかな

鳥取市 児玉規雄

四年後にリオの敵は東京で

超人はバラリンピックのアスリート

福島はまだフクシマか四年後も

前期より後期の永い高齢者

敬老の日は大人しくしておこう

平和ボケSMA P解散大ニュース

神戸市 近藤勝正

愁い顔なでて行く風母だろう

父母寡黙不思議と思い通じてた

息災は父母のおかげと手を合す

お前たちけんかしたのかちぎれ雲
何んでだろ心安らぐいわし雲
お前にも悩みあるのかはなれ雲

竹原市 若年幸子

たまにはの手抜きいつしか癖になり

エレベーター互いに譲る車椅子

口実を作る積りの忘れ傘

ダンディーな眼鏡に替えて老春譜

機能は個人差有りとコマーシャル

スマホの海泳ぐ孫達宇宙人

神戸市 玄番美恵子

母介護せめて小さな恩返し

生かされていたい出来ない恩幾つ

リハビリのプールは老いの花ざかり

旅カバン何はともあれ常備薬

白熱の競技自在の車椅子

柿八年句会九年まだ初心

堺市 大和峯二

この国の平和のモデル守りたい

年金減ばけることすらできません

健康は管理能力試される

煩惱は捨てきれないと自覚する

電車内スマホ主役の世界なり

聞くことは話すことよりむつかしい

福岡県 本田 さくら

お互いの色染めあつて古希の坂
長電話さみしい人が今日も又
無情の雨爪あと深く命まで
あの人と名前が出ない昨日今日
わが人生恥いくつもの古希半ば

佐賀県 真 島 久美子

煌めいているから無意識に避ける
ため息を嗚呼という字でついている
この指は解ける魔法と知っている
いま以上大人になれと言う背中
秋が来て過去のデータを書き換える

那覇市 前 川 真

朝顔と月下美人のなさぬ恋
伸びしろは挫折がくれた贈り物
注意書き悪意も覗くこまい文字
深読みをして遠まわり汗を積み
先頭を走ると背中ビビり出す

沖縄県 高 良 秀 光

健康のありがたさ知る検診日
伸び代のゆとりだけ踏み止まれる
I Tに高齢者たち歩幅ズレ
さわやかな妻の笑顔は何馬力
足るを知るプライドなんか要らないよ

沖縄県 島 尻 卓

デイケアは家人のために休めない
仏壇も賑やかになる入試の日
バランスが大事と言うが麺が好き
非正規が増えて子どもは減るばかり
宗教と政治は避けるクラス会

札幌市 斉 藤 宏 子

折り鶴に核廃絶が重く乗り
畳紙に女の歴史折り込んで
青サンマ回転寿司でマグロ並み
夏帽子日向にぼつん置き忘れ
鮭遡上熊も待つてる母の川

札幌市 富 永 恵 子

振花のらせんに見とれ語る夢
まじまじと鏡の中に夏疲れ
朝弾み夜は疲れて高軒
曲がる道地主のガンコ水溜り
笑顔出る叔母の振るまい病癒え

塩竈市 木 田 比呂朗

強運を信じ霜月来てしまいい
体裁は親展再検の通知
何年持つようにしますかと歯科医
ことばで補う目力の衰え
仕舞湯に今日の正論はめられる

男鹿市 伊藤 のぶよし

最初から弱みを晒す生き上手
ここ一番生かわきでも勝負服
秋ですね心の癒しみつからぬ
グメンねと言えば素直にハグとなる
曼珠沙華さかせ絵にする田圃道

横浜市 巖 田 かず枝

幸せは小袋入りが丁度よい
狭い庭草と戦う老い二人
朝夕の祈りの中に子等の顔
大雨は地球が流す涙かも
幸不幸だれが決めるの自分です

横浜市 川 島 良 子

一期一会昨日のわたし塗り変える
一点に絞ると答見えてくる
筋一本通し妥協を許さない
ポツカリとあいた空間どう埋める
ポイントを溜める楽しさ無駄も買い

静岡市 渡 辺 芳 子

一才半もらわれて来て今生きる(回想)
赤ちゃんの時の写真はセピア色
釣りたてのキスは田舎で米に化け
庭は皆お芋畑に変身す
従兄弟だと思った二人は弟よ

大阪市 磯 島 福貴子

昭和世代ハッピーマンデーはじめない
老いの集い黙祷増える年毎に
四年後の猛暑対策気にかかる
夏バテで七日安静強いられた
涼風が運ぶ虫の音秋夜長

大阪市 柴 本 ばつは

ここがええ膝で仔猫が申します
これは不覚猫にあくびをうつされる
猫の恋あなるほどと自然体
焼き立てのお魚すきなうちの猫
お帰りと起きて待つてくれる猫

大阪市 高 杉 力

じゃんけんぽん大きな声の方が負け
女って怖いなキーキバイキング
夢ばかり食べて長生きするつもり
厚揚げと大根が好き君と僕
ええこともたまに言ってる酔っ払い

大阪市 田 中 ゆみ子

日焼け止め残り少なくなつて秋
木犀の風を仏間に入れてやる
かぶと虫連れて帰阪の黒い肌
これからが楽しみ赤い絵の具足す
秋暑しモジリアーニの首の凝り

大阪市 橋 本 典 子

満月に虫が奏でるシンフォニー
河川敷今年も律儀秋の花
心病む友に寄り添うすべ搜す
世話好きが気づけば世話をされる身に
立ち位置が変わる年にも慣れてきた

大阪市 平 井 美智子

あつさりと別れて全治三ヶ月
埋み火をまだ抱いている日記帳
まさぐればニヤリと顔を出す妬心
冷蔵庫覗いて明日を確かめる
夢は夢お好み焼きが焦げている

大阪市 森 廣 子

白秋の雨に昔の探し物
青かった空はいつしか鰯雲
涼風を見つけて飛んだ赤とんぼ
チャイナマーブル恋の駆け引き七変化
噂好き左の耳が二度伸びる

大阪市 横 山 里 子

夢食べて生きる路上のミュージシャン
じゃじゃ馬を馴らした婿に感謝する
意のままにならず勝手に振る尻尾
恋は落ちるもの穴掘っている
ベアリック仲が良いとは限らない

泉大津市 助 川 和 美

卓上におかずのごとくあるスマホ
フルコース最後は薬水を飲む
癒される今日は熱海で明日箱根
待ち人はコーヒー二杯遂に来ず
茶がぬるいなにを怒っているのやら

貝塚市 吉 道 あかね

体温も同じになって来たふたり
ふたりして有名人の名が出ない
いい声もガラガラ声もいるカラス
泉州に秋一色の祭り笛
下手でいい絵手紙だからへたなまま

河内長野市 中 島 一 彌

七十路は油が切れて身が軋む
七十路で生まれ変われる趣味を持つ
熱中症即身仏のあぶら蟬
足裏に地球感じるウォーキング
布団干し天道虫も取り入れる

河内長野市 穂 口 正 子

胸底にマグマふつつつ時を待つ
前のめり誰が押すやらせわしない
手こずった息子巧みに世を渡り
悪友の二三人いて出ずっぱり
秋風に誘われ買った時刻表

河内長野市 渡邊 修

試着よりサイズ選びが長い妻
預貯金の残り惜しんで冥途旅
水分の補給とトイレ正比例
断捨離も夫の物は捨て易い
水虫は妻より長い僕の友

岸和田市 宮野 みつ江

コオロギ君の下手な初鳴き
愛の賛歌照れず歌える歳になる
子の年輪とところどころに反抗期
憎まれ役買つて丸あるく母収め
孤立する勇気ないから黙つとく

堺市 梅木 澄空

感動の鳥肌でしたリオ五輪
アスファルト涼しく響くゲタの音
淋しいなあ昭和の星がまた一人
気の迷いドボンとはまり抜け出せぬ
潮時を決めかねている小商い

堺市 小林 若芽

たましい満ちてひとり遊びが好きになる
筋書きの通りでないがいい余生
わがままを互いに許す歳になる
笑う目が合えば心が通じ合う
起き上がるコツは自分が知っている

堺市 近藤 治子
赤ちゃんの笑顔ほつべたつついちゃう
もったいないが身にしみついて地味に生き

寝過ごしてはね起きて立つ台所
転んだ子起きるの待つてほめてやる
一二三膝に声かけ起き上がる

高槻市 三谷 白黒

齢のせい言いたくないがまた言つた
やつとこさカーブファンを公言す
物事が見え過ぎるので目が疲れ
口髭がタワシのようで孫が逃げ
盆過ぎてまた二人だけの一年だ

豊中市 荒巻 夢

大暑の日わたしも退位宣言す
涼風に首を撫でられ生き返る
生きている葉ずれせせらぎ私も
明日あると信じ生きてく能天気
経験を積みば益々迷い出す

豊中市 上出 修

オリンピック閣に蠢く黒いカネ
古希近し五感少々疲れ気味
高速も悲鳴をあげる盆と暮れ
ごくごくと水を飲み干す夏の庭
母さんの期待背負つた幼少期

富田林市 小出修三

大阪府 高木道子

愛された証ペットは肥満体
胸張って笑顔で虚実問う鏡
怠け癖ついて畑は草だらけ
嫌な言葉は無視して口は一文字
繰り返し聴くメロディーに癒される

寝屋川市 岡本勲

会わずともつながっている年賀状
鈍いふりしてきつちり手綱とる女房
アナログ派辛棒よく辞書めくる
お財布はにぎり亭主は放し飼い
雲一つなくて名月絵にならず

羽曳野市 仲谷真一

なまけものの蟻も必ずいるはずだ
蟻さんに糖尿病はないのかな
真夏日に何度もシャワー浴びている
五輪中高校野球影薄い
日本丸逆走してはいませんか

大阪府 小栢こずえ

明日もまた目覚めますよう祈り寝る
笑う種拾い自分を励まして
送料で買える野菜を子に送る
物差しの単位がちがう嫁姑
忘れたわ上手に使い生き伸びる

恙無く早稲の稔りへコンバイン
ひねもして風コスモスを遊ばせる
ぶさかわいい妹の孫はそんなとこ
掌のナースのメモの大きな字
この夏の情性のままの時間割

神戸市 細川花門

MRIまで撮ったのに風邪だった
道楽は読書と貯金と散歩です
休肝日割り勘分は喰ってきた
苦い水だから飲めます缶ビール
ふんわりとわたしを包む聞き上手

神戸市 山根弘子

ありがとうその一言がやすらぎに
やすらぎは母の笑顔の中にある
三猿で生きていきたい嫁姑
ポンコツも家族の愛で動き出す
つまり初心忘れた老いの坂

尼崎市 清水久美子

歳時記の季語うろたえる日々続く
介護して女を磨く暇がない
捨て石のお蔭窮地を免れる
唸っても腕を組んでも出ない知恵
デザートに釣られて高いランチ食む

尼崎市 永田紀恵
酔うほどによつしやと奢る人が好き

お騒がせ神出鬼没ボケモンGO

一日のけじめがつかぬ休肝日

嗜みを通り越してゐる妻の酒

懷を嘲笑つてゐる宝石展

加西市 山瑞 なつみ

墓参りいい塩梅に雨が止む

塩辛い涙しか出ぬ墓参り

石碑から塩辛蜻蛉スイと飛ぶ

墓参りなぜ穢れなの清め塩

結局は慣習どおり塩を置く

川西市 日野岡 和之

負けてこそ学ぶ道あり希望あり

百日紅胸に咲かせて孤独感

カンナ燃ゆ反戦平和原爆忌

疲れたと言わぬお日様お月様

朗らかな笑顔で分かる幸福度

三田市 幸田厚子

暑いですネいつまで続くこの言葉

新聞の見出しで済ます週刊誌

崖からも落ちる事なく小池知事

投げつける言葉の裏に責任を

向かい席化粧はじめて目の遣り場

三田市 辻 開子
バランスの大切知るも肉が好き

相談が出来る相手のある至福

古希もこえ末っ子甘えぬけきれず

留守番はエアコン友と引きうけて

避暑地です図書館通い皆同じ

宝塚市 太田 としお

地震台風あつても日本お気に入り

気をつけよう顔は心の窓だから

揉めませんすいませんですありがとう

早寝早起きそんな悪人居りません

東京へもう戦いに入つてゐる

西宮市 株元 玲子

エアコンが働き詰めでうなり声

押し寄せる台風戦術なく

もうろくのすすめの本に飛びついた

もうろくも裏から覗ればほほえまし

心模様すこしピンクに染めてみる

奈良市 尾畑 なを江

炎天下庭のトカゲものびてゐる

名古屋までうなぎを食べに行くはめに

外面の良い人あまり信じない

好奇心若さを保つサブリナ

守るものいくつもあつて母強し

和歌山県 森 下 よりこ

クーラーの部屋で昼寝の時間増え
オリンピックを堪能出来た熱い夏
三十品目あれもこれもと食べられぬ
朝夕に集約させて畑仕事

ブラジルのよさも発見出来た夏

鳥取市 大 前 安 子

七十路へ画布張り替えて色選ぶ
新メニユーエプロンやる気よく動く
平凡な止まり方する独楽回す
右の手砂糖左手塩の七十路よ
ボランティアこなした鼓動ピンク色

鳥取市 奥 田 由 美

色色と有つての二人共白髪
早食いが肥満の敵と栄養士
さりげなく元氣投入療法師
筆ペンの免許がほしいのし袋
真夏日のワナに猪五匹くる

倉吉市 大 羽 雄 大

靴下をケンケンしても未だはける
打ち水が効き前の家との会話
台風一過爪痕残し日本晴れ
逃げ足は遅いが信頼は厚い
晩学に地団駄ばかり踏んでいる

倉吉市 岡 崎 美 知 江

ありのまま歩こう風が変るかも
夏雲がもこもこ父母の顔に似る
ぬくもりを求めて拝む神仏
ひと言が渦をまいて喉の奥
一票が歴史の扉押しあける

倉吉市 田 中 紀 美 恵

母さんが笑えば家中はつかばか
うふふと笑う母の背あつたかい
小さい事にこだわり大事見逃した
忘年会割り勘らしい呑まなきあ
母の愛たっぷり浴びた子の笑顔

倉吉市 中 村 毅

先送りしてもいいのは再稼働
流行でも嫌いなものは嫌いです
スロープで街のやさしさ見えてくる
おばさんが美人に撮れと無理を言う
笛吹くが誰も踊ってくれません

米子市 野 川 宣 子

夕暮れに反省を込めまず一杯
老人にアメをしゃぶらせ票集め
勘違いから始まった恋だった
銀幕のスターにも老い忍び寄る
こだわりが出来を決めてる手打ちそば

鳥取県 飯野 菖子

人生路何時も晴れとはかぎらない
結び目を固く守って強く生き
逝く日まで絆は深く生きて行く
節約で家計豊かに暮らします
産声は両手に未来握り締め

松江市 中 筋 弘 充

献血をしたいが歳が邪魔をする
黙祷ができる間が華である
自慢話が得意な人に近づかぬ
七十六歳誕生会はないようだ
七十六歳介護ゴルフで忙しい

松江市 山 根 邦 代

聞き上手心が軽くなって来た
パリンピック懸命さには胸つまる
食べ物で粗末に出来ぬ戦中派
胸ポケ自慢の種を連れ歩く
台風爪痕こころ挟られる

出雲市 黒 目 英 男

改憲の議論ゆっくりやればいい
ユートピア迷路を抜けて辿りつく
難問に振り回されて古稀がすぎ
メッセージいろいろくれたメダリスト
思い出がゆつくり巡る脳回路

雲南市 菅 田 かつ子

楽しんで仲間と歩く好きな道
今もつておつちよこちよいが直らない
ハミングの後ろ姿が嬉しそう
負け上手になつてにこにこ生きてゆく
放つと言う日は拗ねているのです

瀬戸内市 片 島 秀 月

一筋の道を楽しく生きている
人間ですか時々魔女かと思う妻
八十路坂怒り哀れみ捨てました
バランスを上手に保つ鮎と鞭
神様に愚痴を言うてる暇がない

瀬戸内市 宮 宅 比 佐 恵

リハビリの効果芽をふく青い空
逢うごとに社会に溶ける孫の顔
八起き目の薬一本で今日も無事
卒寿まで生きる望みの万歩計
老いるとは晴れのちくもりまた曇り

三原市 鴨 田 昭 紀

もう古希とまだまだ古希という手足
原石の頃がいちばん映えていた
お日さまが見ている嘘はもうつけぬ
雲悠々にんげんなんて小っちゃいね
黄昏てじわじわ宇宙人になる

三次市 伊藤寿子

宇部市 高山清子

大会へ参加の夢が実る朝
川柳人どこか似ているなんだろうな
柳友と再会ころだけ若い
生の声選者に耳をささげます
人生の一番良い日書く日記

府中市 岸田武

とんでもない方に寝ている夏の孫
おとなしく酔って笑って妻の里
甚平の団扇片手にひよこひよこと
だんだんと調子のがる物忘れ
大物か孫のつむじが三つある

山口市 青木隆子

喧嘩して母の背中に詫びを言う
理解して覚悟できない母逝く日
苦手な人の懷に飛び込んでみる
推敲をしては見限る駄句の山
趣味持つて健康寿命延ばす日々

山口市 中前幸子

真実は玉虫色に片付ける
鉛筆を削ると運が落ちそうで
ワインを抜いて愉快ひとりの誕生日
霧が晴れると女の尻尾見えてくる
人生ゲームいよいよ終活に入る

こんなこと出来ていたんだ古日記
老いの道歩幅を変えて生きる智慧
短所にも弱身にもある人間味
懲りぬのは昔も今も永田町
シャッター街歩いて時世だと思ふ

松山市 神野きつこ

お日様よ燦々降れと屋根が言う
地震予知隣の猫に聞いてみる
想定外責任なんてとれませんが
生前退位ややこしくする人がいる
日中は主婦の溜まり場ジムお風呂

今治市 渡邊伊津志

リタイア後湖面のような海に出る
サングラス外して神の瀧仰ぐ
もう少しこの世に居たい昼の蝶
雨上がりが一氣に初夏の庭になる
玄関に裸火灯す遍路宿

大洲市 花岡順子

にこにこ母の忙しい台所
いつ死んでもいいけど今日はまだ困る
イノシシが朝に晩にと来る畑
削除キー少し私が消えていく
コスモスを一輪一人お茶を飲む

沖繩県 禰^{いのり}

キヨ

リオ五輪国境を越え平和だね
世界中夢を咲かせたりオ五輪
独座して千手観音手をつくる
挨拶をマニユアル通り声揃え

沖繩県 宮

すみれ

姉二人苦勞話に泣き笑い
鍋囲み話溶け合う三世代

三日月にのぞかれ照れる露天風呂
不揃いの自家ゴーヤーは人気者

シドニー

坂上のり子

旅立ちへピンクのシャツが似合ってた
君は死んだだけ変わらぬ朝が来る
あの声が待っていきそうな留守電話
ふっと涙が込み上げて来る散歩道

弘前市

高森 一 吞

鍵穴から覗けば世の中善くみえる
夕陽おち西海岸の露天風呂
何故ですか命一つの自爆テロ
ニューハーフ美人すぎて見間違う

弘前市

吉川 ひとし

未だ少し亡母の微熱が手に残る
冗談を聞くか聞かぬか北マクラ
誕生日祝う言葉が重過ぎる
一週間質問攻めにあったセミ

つくば市 嶋本 喬

ばらばらに川向うへと同志達
友が死送ったわが身がなくなり
入院の夜長に響く大軒
入院の留守にごきぶり運動会

上尾市 中村 伸子

酷暑らし大阪にいる娘を思う
やり直し出来れば中学からかなあ
万歩計いつの日からか忘れられ
現実味帯びる南海トラフ地震

松戸市 山下 明子

夏のゆく蜩哀しカナカナと
サイクリング鼻唄まじり必死です
蒼い空海へ叫ぶよ諸手あげ
あと少し若ければ飛んだバンジー

東京都 高岡 弥生

台風的气まぐれ天気雨や晴れ
いつの間に見上げる子供低い声
赤ちゃんもちゃんと人格持つてるよ
ダイエットしてるつもりでいるんです

八王子市 川名 洋子

最後には妻の涙に押し切られ
弾まない毬に尻尾が生えて来る
異議なしに菌ざしりをする雑魚の群れ
地味だった母の着物がよく似合う

横浜市 長 島 亜希子

言いたいこともあるけど五輪いいものだ

親のための手摺にわたし助けられ

「お盆玉」聞いて素通りできぬジジ

さすが日本落としたバスマ無事戻る

佐渡市 高 野 不二

うまそうに笑顔を作るコマーション

十七字並べるだけに苦勞する

出口調査嘘言う人もいるだろう

栗拾うあとから風が又落とす

沼津市 鳥 沢 無 午

薄化粧そんな女に恋をする

ゴキブリの恋は暗くて激しくて

ひかりを見つめて造花になりました

結婚をして言えますか愛してる

江南市 脇 田 雅 美

賑やかに咲いたひまわり絶え果てる

三角も四角も丸もあるチーズ

句読点ひとまず打って一呼吸

春秋に廻り会えない温暖化

豊橋市 藤 田 千 休

お神輿も軽く感じる祭り酒

味気ない数字が並ぶ通知表

腹痛を臭いで治す正露丸

地に足をつけぬ景気が浮かれてる

鈴鹿市 小 河 柳 女

青田から夢がのびゆく未来かな

雑草をとり雑念もととり除く

世界が輪になれば太陽が二つ

さあ大変が年寄るほどに増えてくる

京都市 櫻 崎 篤 子

折ったが今年も解決しない拉致

鯉二匹池を立派なものにする

テントウ虫別れおしんで肩へ乗り

秋の田の向こうを歩き遍路行く

大阪市 田 中 廣 子

無理すれば肩の痛さで目がさめる

朝めざめ鏡に向い笑みつくる

盆施餓鬼法話を聞いて衿ただす

絵画展解説の声聞きほれる

大阪市 中 島 栄 子

病人さん少し良くなりや小煩い

味覚の秋松茸の味どんな味

パラリンピック親の思いは如何ばかり

オリンピック努力も差なし皆金金

大阪市 梅 里 南 天

腹の傷人に晒して生きてゆく

温泉に入るお猿も身分制

茶髪の子欧米人になりたそう

ウエヲ向イテハツバフミフミ昭和ユク

大阪市 前川善之

河内長野市 森田旅人

小さくとも親切にされ暖かい
健康に三度の食事一万歩

発想を変えて知恵出し衣更え

売れぬ魚一手間掛けてすしの種

大阪市 宮村満寿恵

調子良い足を試しにデパートへ

どっこいしょエンジン掛けて事始め

バイキング限界なのに又つまむ

ユニークも人から見れば変り者

大阪市 吉田知之

がんばりや目標ちゃんと持っている

整骨師耳学問で楽しめます

まずくても自己満足で五七五

天国に川柳あれば楽しかる

交野市 田岡九好

(久幸改め)

あるべきようは多少の意地と瘦せ我慢

航平の脇毛の濃さと金メダル

だんだんと遠し八月十五日

終戦の詔勅のごとお言葉を待つ

河内長野市 楠本和代

今日もまたオリンピックで日が暮れる

暑い夏もつと暑い日応援日

赤とんぼ群れ飛ぶ田んぼはまだ青く

秋がきてタオルケットじゃ寒くなり

ようきたと認知の友も誘い飲む

帽子がないとさがすは二分おき

ダジャレ出るワオと笑いを掬い上げ

持ち歌が元気な君を連れてくる

堺市 羽田野洋介

やれやれと思う気持ちにある油断

情熱をかけた結果がこれかいな

大きい目のマスクで野心包み込み

備えても備えてもまだある不安

堺市 松永庄三

免許証更新ごとに禿げ上がり

俺なんか見向きもされぬ後妻業

入所待ち孫保育園俺老ホ

立ち尽くす自販機ポスト警備員

豊中市 荒木郁子

薬より夫の労り効き目ある

医師よりもきめが細かい薬剤師

草抜きに貸して下さい魔法の手

インタビュ笑顔弾けるメダリスト

豊中市 貝塚正子

助けてと言えぬ可愛げない私

箸マナー外国人に教えられ

八十の自分を認めそのままに

嘸み合わぬ会話楽しむ老夫婦

羽曳野市 磯本洋一

土手探る春の一日餅づくり
 マイナンバー何時に使うか友に聞く
 エンディングノート買い増し三冊目
 猛暑日に米の磨き水鉢に分け

羽曳野市 安本美喜

高齢者増え費用の膨らむ敬老金
 名月の家族揃って肉だんご
 勝負メシうなぎを食べるわが夫よ
 金銀銅涙の壺はあふれ出し

枚方市 坂本ミヨノ

友と会う海老で鯛釣る酒席なり
 エアコンに頼り風邪引く弱虫だ
 過去忘れ若い気で生き凜と老う
 冷めんに山盛りの具で喜ばす

枚方市 山口弘委智

日の丸とプライドかけた五輪済む
 腐葉土になつて役立つ葉の命
 風一つ百の風鈴めざめさす
 敗者にも同じ青空迎え入れ

箕面市 寺井柳童

遠吠えに聞こえるPLの花火
 「疑う」という字は僕になじまない
 掘出し物探す楽しみ陶器市
 パンの耳フェンスに並び待つ雀

八尾市 田邊浩三

孫くれた御守りすべて付けてます
 大峠昔還暦今傘寿
 丑の日はうなぎ行列ナマズにも
 朝起きてまず開くのはテレビ欄

八尾市 前田紀雄

リオ五輪東京五輪その調子
 教養が邪魔して未だ無位無冠
 隣国が細波立てる境界線
 愛よりもお金が欲しい古希半ば

八尾市 山川寧

しらす井並ぶ江の島遠くなる
 靖国神社特攻隊を偲ぶ夏
 古稀すぎて今の幸せかみしめる
 特養の友見舞う行く末思う

大阪府 畑中節子

老いてなお定年のない農の道
 頼られる事も嬉しく生きがいに
 雑草に負けて居れぬと鎌を研ぎ
 農業はお天道様の意のままに

神戸市 井上忠貞

家族でも大事に保つ車間距離
 受けた恩子息に返し晴れ晴れと
 アンコール受ける側にもまわりたい
 子育てに親の背中が葉です

神戸市 興 水 弘

自慢する何もないのに口達者
老い二人無言劇して意地を張る
回り寿しパネル操る孫眩し
大食いのテレビにボチも知らんぶり

尼崎市 藤 田 雪 菜

月見草咲いて遠い日偲はれる
おもてなし期待ふくらむ旅の宿
募金箱素通りできぬ律義者
好きなことやれる主人にありがとう

伊丹市 平 井 富 夫

又来るね孫が手を振り盆終わる
遣影用三段腹が気にかかり
外食とデパ地下めぐり味見です
奢るって友の企み何だろう

篠山市 永 井 かほる

雨上りベダルふんで野菜見に
秋蒔きの旬におくれぬ畝作り
夜八時何より嬉し娘の電話
明日のプラン立て乍ら床につく

篠山市 長谷川 善 輔

萩零れこおろぎ相手にうまし酒
月明かり猪は出ないか萩の庭
秋の夜をブルックナー聴く一人酒
アスリート美貌は次の仕事待つ

篠山市 藤 井 美智子

この元氣どこまでもつか神だのみ
猛暑日も何とかクリア秋の風
宅急便親の思いの重さ増し
お出かけへおしやれるからばけ防止

三田市 宗 福 清 司

必ず寄るポイント駅中トイレ
終活開始資料廃却裏紙増
定年離職後逢ってびつくり光ってる
減ってきた水くさいと言える友

三田市 東 内 美智子

おみくじは大吉と出たさて不気味
お一人二個じいちゃん連れて並んでる
藤村のりんごのものと初な恋
寡黙だがボソボソと突いてくる

三田市 馬 場 貴美江

打ち水は遠慮不用の井戸の水
親子でも財布の中は他人です
姑介護心つくせば笑みもでる
虫の声夜空に競う夏終い

三田市 松 本 ゆかり

飲む打つが買わない人でついできた
ウォーキングついでの事が高くつく
ともかくも並んでみるか暇だもの
化粧して安堵私の顔になる

宝塚市 井上 風花

さるすべり白く咲いても百日紅
再会を約して涙喜寿の会
塩からい人ほど後で味が出る
高齢者光輝と書いて胸を張る

宝塚市 丸山 孔一

水入らず家族の旅もいつまでか
西暦か昭和ですかと生まれ年
ベット可のホテル探してキー叩く
惚けないで長生きしてと妻の無理

三木市 山口 久子

デイサービス誕生祝えびちらし
夏まつりおどりの好きな亡夫しのぶ
孫上手長生きしてね折鶴を
川柳が頭の中で走ってる

奈良市 高橋 敬子

夕の街より脱ぎたい人の群
少しずつ浮世の垢を母おとし
おばあさん桃太郎抱き腰痛に
万歩計ノルマばかりが気になって

奈良市 高橋 仁志

ナツメロで忘れた人を思い出す
青い山脈歌って会をおひらきに
台風がところかまわずせめてくる
台風が手加減をせずやってくる

和歌山市 北原 昭枝

幸せの方に向いてる風車
胸の奥吊したままの片思い
遠まわりしたくなるよな月に会う
少年のようなあなたを好きでいる

和歌山市 鍋嶋 澄子

花盛り咲いてみましょう今が旬
今日こそと思うばかりの万歩計
ひとり遊ぶ淋しくないか驚一羽
蕎麦うどん踏まれ伸されて一人前

和歌山市 平田 元三

やっと秋取って置きたいこのままで
振る舞いに日本が残る古い宿
抜くまでの苦勞楽しむ挑戦者
嫌な夢見たくないから腕に数珠

和歌山市 福呂 秀子

顔の老い心でカバールの努力する
仏前に今日一日の手を合わす
謝ってやっと落ち着く安堵感
夏の日は無理するなよと亡母声

岩出市 村中 悦男

赤とんぼ下校の児等の前後
わけありのわけがわかって二つ買う
日が沈む恙ない日に手を合わす
平凡な皿に非凡な妻の味

鳥取市 高原 かおる

栄えるを願ひ孫子の名が決まり
財よりも心の善が栄えんか
大声で笑っておさめて今日の幕
迷いつつ泣いて笑ってこの齢に

鳥取市 津村 律子

台風を免れ黄金色染まる
火花さえ打ち上げ億の金がいる
玩具のようにミサイル飛ばす北の主
自国に落ちる核の恐さを知らぬよう

倉吉市 田中 けいこ

出かけた宅急便がまだ来ない
労働より気を使いすぎ疲れ果て
夢のつづきハサミをとった昼寝あと
大丈夫何とかなると笑顔見せ

倉吉市 堀 かずこ

シャンシャンと踊り行列かさの花
若いねとほめられうれし七十路
打水で濡れた敷石涼しそう
甲子園球児の顔がさわやかに

倉吉市 宮田 風露

酷暑です骨の髄まで汗まみれ
猛暑日もあんなこんなでやり過す
老いたかな焦げつくような夏でした
よう来たな傘寿の扉開いている

境港市 中井 虎尾

知事よりも強い九電だったのか
金坊がミサイル核で遊びはる
北の国地球がこわれる核やめろ
古都京都文化庁様帰り来る

米子市 池岡 たけし

真夏夜は寝具脱ぎ捨て汗塗れ
暑い夏居場所が無くて大弱り
秋の風眼が閉じる朝寝坊
青い色何処まで広がる秋の空

米子市 生田 和之

秋風の吹いて素麺飽きが来る
座右の句何だと聞かれうろたえる
素面では唄えるような声でない
東には核あり西にテロ続く

米子市 川本 美津子

よき友と出会えてうつな気が和む
夏なのに脳が冬眠句が出来ぬ
気がついた変らぬ日々が幸福と
カレンダー見てるか秋の虫が鳴く

米子市 田村 周子

目の錯覚母に似た人他人様
交通事故目の錯覚で起しそう
足元が危なくなつた八十路坂
北朝鮮随分勝手わがまだ

ゲームなのに本気になって子を泣かせ
米子市 永井 三津子

新築し椅子に靴下履かせてる
着せられて泣く子はしゃぐ子七五三
田刈り終え長閑さ染みる祭笛

米子市 見山 温子

秋風をしのぐエプロン引つ掛ける
新盆を送り束の間彼岸待つ
二人居の夫婦漫才揉めている
病院の予約でうまるカレンダー

鳥取県 門村 幸子

生きてゆく疲れ出ぬよう出さぬよう
いろいろと脱皮重ねて今の顔
鰐広の夏の女のあつけらかん
綺麗にはほど遠い位置背を伸ばす

鳥取県 下田 茂登子

我がままは一度も言わず逝った夫
三回忌終えて悲しみまだ続く
一人者同士なかなか本音語れない
百歳に手の届く位置一人です

松江市 相見 柳歩

歳重ねなお勢いのある恋だ
同情にぬるい本心見え隠れ
大切なあなた来世もプロポーズ
仏さま言い表せぬ深い愛

休耕田猪獃う遊園地

安らかな軒安堵の守歌歌

浮き見つめ湖上に憩う秋日和

夕映えの穴道湖明日へエールくれ

松江市 福岡 左余

安来市 原 煩惱児

来年は我が身か新旧盆多忙

独居老愚痴も不満も常のこと

ローカル線廃止抵抗無力感

帰省子と言葉はいらぬ以心伝心

瀬戸内市 東 楨ますみ

てっぺんは知らぬ汗する蟻の列

行間に雨がそは降る私小説

一步前を妻が歩くのがルール

偶然の積み重ねです生きるとは

玉野市 片岡 富子

卒寿母肉食女子で恐れ入る

前の人キャリーバッグに目を付けて

夏の陰紫陽花咲いて足軽く

防災の意識ある内準備する

尾道市 日谷 寛

正義感裏で支えている希望

信頼の方程式が崩れだす

知らぬより知ってる方が邪魔になる

表現の幅をひろげたにんげん味

竹原市 土井輝恵

岩国市 上村夢香

大観と信じ鑑定など出さぬ
川柳があるから優しく居れる
嗚呼母よ反省じくじ子を育て
とりわけの被害はないが惚けている

竹原市 六田半徳

下松市 有海静枝

先走るその一言が疎まれる
口論を丸く収めて共白髪
緒方流選挙生かして優勝を
夕焼けの西空向かい手を合わす

府中市 田辺和子

松山市 郷田みや

ご指名の時は今かと待っている
生上手は自慢をうまく織り交ぜる
独学を言って手本を漁ってる
ふれあい市吾もつられて大根買う

三原市 笹重耕三

松山市 柳田かおる

足払いされても怯まない極意
年金の枠が崩れた夏休み
夏バテか老いか進まぬ箸二膳
新鮮に見えるが二番煎じです

山口市 増田めだか

西予市 西田美恵子

孫の守り昔話を聞きたがる
糠つけが上手な嫁で人気者
老いたのか夫は孫に甘くなる
糠床も我が家の宝歴史あり

筆握る違う自分が動き出す
永年の夢は実って空高い
ベテランと若手のコンビいいお味
口数を控え見守るだけの人
ここからは深みと書いてない水面
割り切れぬままの発酵恋かしら
口ひとつ聞き漏らしている耳ふたつ
そもそもの原因自覚なくへへへ
待たすより待つ方が好い時計台
いざという時より今の自由席
びっくり箱パネがだんだんバカになる
がんといい魔物が今日もワイドショー
きのうとは微妙に違う風の色
認め合うふたりだけれど別な道
小心でいつも二番が好きでした
言葉にはならない握手ありがとう
回る寿司こんな恋でもいいですか
ここは一つ大人になろう深呼吸
花に水私に君が居るように
初めから結べぬ恋の紐の文

高知市 三谷 松太郎

避暑してたへびもようやくお出ましか

嘘だって泣いてしまえば負けですよ

老いの夢そっとしたままサ高住

赤い糸無色だったがちよい染めた

北九州市 小松 紀子

年重ね思い出すこと多くなる

地に足つけてある時は反省を

老いの血を吸いに来たのがウンのつき

雑草いきいき花しおれる猛暑

唐津市 岩崎 實

いざ問わん第九条のその重さ

願成就充ちたる心ありてこそ

今朝生んだ卵精がつくからね

鉛筆を研ぎ揃えとやる気です

唐津市 吉富 節子

離れても心の友はそばに居る

秋風に心の悩み打ち明ける

腸検査異状なし聞き元気でる

雨あがり休む暇ない洗濯機

山鹿市 中山 好打

運まかせトリブル被害ぐぐり抜け

蝉の声立秋過ぎて虫の声

百で人間模様さまがわり

生ぬるい国の政策的はずれ

第40回 寝屋川市民川柳大会

と き 11月20日(日) 午後1時開場

出 句 2時締切

ところ 寝屋川市市民会館 2F

〒572-0848 寝屋川市秦町41-1

京阪寝屋川市駅東口から 京阪バス
「太秦住宅行」イズミヤ1番乗り場
No.31か31Aに乗り市民会館下車、
または寝屋川市駅下車東へ徒歩15分ほど。

TEL 072-823-1221

会 費 1000円(投句 82円切手 5枚)

題と選者(各題2句 席題なし)

「視く」	上田 仁 選
「限界」	江見 見清 選
「裏切る」	江島谷勝弘 選
「血筋」	柿花 和夫 選
「刻む」	池田 武彦 選
「一転」	吉岡 修 選

投 句 11月15日必着 下記事務所宛

〒572-0063 寝屋川市春日町9-9

高田博泉 方 川柳ねやがわ

主 催 川柳ねやがわ

鳥のよう空飛んでみたい時もある
デイスーパービス集まる顔はエビス様
正信偈一筆取りて朝の行
古稀祝白寿の母に頭垂れ
直球しか投げられぬ背広着て
わがままをいつも通してヒーローで
一步先夢物語のピエロです
三歳児覚えてないと政治家並

山鹿市 前田 幸子
柳田 白沙

橘高薫風句抄

〔橘高薫風川柳句集〕平成十三年発刊

出来心ダイヤの指輪していても
末っ娘ももう声上げず泣く齡に
泊まる氣になつて外したイヤリング
パトロンが替わり香水が替わり
蛇が皮を脱ぐようにまた離婚した
慰謝料に感傷はもう交じつてず
静かなる嫉妬坐つたままで待ち
未亡人どの親切も淋しうて
子供等にママと呼ばせる後妻が来
継母の思ひ出に針つきまとい
オールドミス娼婦のような手紙書く
高島田猫背のくせが出てしまひ
美人とはいひな眼鏡に個性が出
姑がまた我をとおす釘の位置

ぼんぼんの嫁は標準語を使い
母に似てこの娘も百貨店が好き
菊の露ふくんで母の針仕事
あたたかし孟母のような母ならで
妻がもう口あけて寝るようになり
毛皮着た妻になじめぬものが出来
妻の日記もう子供等のことばかり
妻若し産衣すら縫うことをせず
妻若し水道一っぱいにひねり
猫がもう膝にのつてる女客
ざあますに妻もなつてる女客
灯がついてからは落ち着く女客
毒舌に負けてはおらぬ流行っ妓
暴君のところが好きと妓惚れ
元旦を旧い家風が落ち着かせ
遠景に凧あり松の内のどか

誹風柳多留一二篇研究 41

つまり淫売が主であった。だから妊娠すること度々のことで、「事もせずにもた墮ろし」。その上踊子は日本橋橋町から薬研堀一帯に住んでいたから、
はらんでもこまらぬ所にけい子居る

天元智3

薬研堀には墮胎専門の中条流の医者が居たから容易に出来た。

娘々とうたはれて又おろし

宮二29

山田 昭夫・石川 道子
小栗 清吾・細井 龍夫
伊吹 和男
清 博美

329 みそをする為すりこ木をむこはかい

山田 寺に有るのは大黒さま。しかし生き仏ならぬ生大黒さまで、所謂梵妻。小間物屋は

山田 普通摺子木は、他の正月用品と共に歳の市で買う。歳の市は江戸市中の各地で開かれたが、十二月十七、八の浅草観音が有名で、それを口実に近くの吉原へしけ込むのが常道。

女の必需品を扱うのが商売だから、梵妻も得意先なのである。浄土真宗以外は邪淫戒で女犯は禁じられていたから、世間に秘し隠す。かならずくりやへ出やるなど和高い、
一七39

女房氣を出すで大こく目立ッ也
清 賛。
玉11

当年中のしおさめと市にされ
三29
しかしそこは入聲の悲しさ、吉原などに逸れたりしたら、それこそ年も越せまい。それで文字通り「味噌を摺るため摺子木を聲は買ひ」。

331 おとり子ハことゝもせずにも又おろし

市の翌親父隣の聲をほめ
七四3
清 賛。

山田 踊子は、宴席等に侍り踊りを見せる女性のことだが、内実は、
三ミせんもおとりもしらずげいしや也

330 あの寺にあるをしつて小間物屋

安七礼2

332 しのびこまそつとのそいてみれハ嫁

山田 忍駒は「三味線の特殊な駒で、音を他の人に聞かれないようにするためのもの」

〔日国〕。忍駒で弾く三味線は、ワケありそな風情があり、興味がそそられる。それで「そつと覗いてみれば」何とわが「嫁」であった。まさに驚き桃の木だったろうが、それで惚れ直し、家内安全となれば幸いだ、嫁の心の中は「忍駒」ないと分らない。

小夜ふけて風情有げなしのびこま
拾七20
淋しさをうまく聞せる忍び駒
五八39

小栗 賛。「女房」ではなく「嫁」。他人に聞かれぬように静かに。

清 賛。

333 お舟ハきつちりこと下女わらハれる

山田 「きつちりこ」は「ぎつちらこ」と同じで、舟の櫓の音。「ぎつちりこ」と舟を漕いでいるので「下女笑われる」。だが、眠い盛りだから無理もない。

白川の夜舟ハ下女か遊山也

七三二

石川 賛。居眠りの様子ですね。

小栗 賛。江戸時代に唄われていたかどうか確認しておりませんが、「おふねがぎつちらこ、ぎつちらこ、ぎつちらこ、せんどや、まんぞうや」というわらべ歌があるようです。

伊吹 賛。宝暦・明和の頃（七五～七二）江戸で歌われた童歌の集録である『童謡集』（釈行智著・文化三年（一八〇）頃成る）に「御舟はぎつちらこ。ぎち／＼こげば、あびすか、大黒か、こちや福の神よ」があります。

清 賛。

334 かけとりがかへると家をほめに来る

石川 年末の掛け取り（借金取り）が帰って行くと、年始には三河万歳がやって来ておめでたい文句をおもしろおかしく囃し立てて得意を回す。家の造りも誉め上げて、「一本の

柱は金剛界、二本の柱は退蔵界：十本の柱は不動の力柱と立てられる」。

万才ハやらう疊ミをいゝのこし 安元信一

万歳ハ柱に節を付ていひ 五六三

清 賛。

335 品川で遣ふハ本ノ入レぶつじ

石川 入仏事は、檀家が費用を出して寺で仏事すること。転じて、かかりにむだの多いこと、また骨折り損。

品川の寺で仏事を執り行くと、その費用はすぐ坊主の遊興費となる。檀家としてはそんなことのために入費やお布施を出したのではなからう、あれが本当の入仏事（むだ、骨折り損）というものだとも、あるいは、坊さんがいくら品川で遊び、お金を落としてもよしとしても無理だとも取れる。

品川のどらハだんかに見かざられ

安七礼五

しんだ金いかして遣ふ品のきやく 一九一八
法灯をか、げ読んてる品の文 一〇六五

小栗 賛。「入仏事」を無理矢理使ったので意味がとりにくいが、やはり品川の句は「坊主客」とするのが約束だと思う。後説ではなからうか。

伊吹 賛。入仏事の語意を正確に伝えている前説に引かれるが。

山田 小栗兄説に賛。「入仏事」を使つたところがミソの句。なお、入仏事について『川柳雑俳用語考』に詳しい語釈がある。

清 同右。

336 白かべのそばててうちやく御用され

石川 白壁に落書きをした御用は、見つかつてぶちのめされた。

白壁にへのこハ御用能書ヨ也

二三四

清 賛。

337 とそ酒だまいれと長田むこにし

石川 平治の乱に敗れ東国に敗走した源義朝は尾張国内海に落ちのび、家臣鎌田正清の舅長田忠致のもとに迎えられた。ところが、長田は彼らの暗殺をはかり、正月三日、正清には酒を飲ませて殺害し、義朝には入浴を勧め、そこで殺害。長田は婿正清に、屠蘇を一献、また一献と無理強いたのであろう。

智殿やすござつしやいと長田いひ 四四二
御背中を流しましやうと長田言 五六一五

清 賛。

英語 de Senryu⑤⑨

麻生路郎句集『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

金持ちだ 胃癌だ いつの間にか死に

he is rich

he has stomach cancer

and he dies without notice

ハガキすら よこさなくなり 寒いこと

not even a postcard

has been sent

how cold

rich 金持ち *stomach cancer* 胃癌 *die* 死ぬ *without* ~なしに *notice* 知らせ
even さえ *postcard* ハガキ *send* 送る *how* なんて *cold* 冷たい

～リバーウィローのため息～ R.H.ブライスによる川柳の解釈と英訳②③

今回は SENRYU から、日本人の *Life* (暮らし・生活) を取り上げましょう。

駆落の其の夜名所へ来て泊り 非水

The first night, / The elopers / Stay at the beautiful place. (Blyth 訳)

eloper 駆落ちの当事者 (*elope* 駆落ちする) *stay at* ~に滞在する

beautiful place 素敵な場所

『広辞苑』によると駆落ちは「恋しあう男女が連れ立ってひそかに他の地へ逃亡すること」とあります。現代の恋する二人は、駆落ちなどと云う命を張った行為に意味を持たず、ごく自然に二人の意志を貫いて同棲という形態をとるでしょう。その意味で駆落ちという語彙は死語に近いのではないのでしょうか。英語では駆落ちを *elope* と云いますが、日英語ともに封建制度の名残の語彙であると云えます。作者の非水は、駆落ちした夜に名所に泊まる駆落ち者の甘さとその情熱もからめて皮肉っています。ブライスは「この駆落ち者は特に計画も立てず、行く先も決めず、自分たちのロマンチックな雰囲気合う場所に自然と引き寄せられて夜を過ごす」と述べています。私の耳には駆落ちという語彙が何となくロマンチックに聞こえますが、それは駆落ちが実行された時代に青春時代を過ごしたからだだと思います。

参考文献：尾藤三柳編『川柳総合事典』Blyth, SENRYU (北星堂書店 1949) p.203.



秋を詠う

暑いときは暑さを、寒いときには寒さを楽しむのが理想でしょうが、高齢になると酷暑極寒に耐えるのが精一杯で楽しむ余裕などありません。凌ぎやすい秋を謳歌しましょう。

本欄No.65では「ベストシーズンを詠う」として、春を詠いましたが、秋もまた最高の季節です。雑事に流されて「ふと気がつく」と冬!」とならないように、立ち止まってしっかりと秋を見詰め、一句でも思い出として残したいものです。

お隣の柿がそろそろ熟れる頃
粒よりの栗ふるさとに母がいる
杉本 克子

妹が梨を送ってくれる秋

谷口 義

ゆるやかに時が過ぎ行き柿を吊る

左 俊江

もみじ狩り敬老会は昼の酒

古川 奮水

秋というのに口内炎にしみる酒

古久保和子

秋の夜をお茶と団子の休肝日

初代 正彦

このシーズンは「読書の秋」「芸術の秋」そして「スポーツの秋」と讃えられていますが、何よりも嬉しいのは「収穫の秋」そして「食欲の秋」でしょう。柿・栗・梨などの果実に加えてお酒も旨く飲兵衛にとってもベストシーズンです。

しかし、口内炎ではせつかくの酒も楽しめません。肝臓を休めるためには一週間に一度ぐらいお茶と団子で我慢です。

綿菓子のような台風やってくる

土屋 天九

お客待つように台風待っている

田村きみ子

台風に傘をさしても無駄やのに

米澤 俣子

素晴らしい季節を邪魔するのは招かざる客の台風。気象衛星から写した写真はまるで綿菓子ですが、その力は甘くはなく、今年は北日本や北海道に甚大な被害をもたらしました。台風のパワーを削ぐ手段を開発してほしいものです。

秋日和風車も羽根を休ませる

岸本 宏章

遊ぶ子のいない庭にも赤トンボ

國定 和子

戯れに猫語を話し秋つらら

水野 黒兎

秋の陽に蜘蛛の巣ずらり文化祭

斉尾くにこ

元氣かと問う絵手紙の栗はじけ

渡辺 富子

一年中秋でもいいと思う秋

永田ふき子

台風が去った後はカラリと晴れわたった穏やかな秋日和風で「天国」とはこのようなものか」と思えるひととき。

欠伸している風車や赤とんぼを眺め、猫と語り合い、蜘蛛の巣の芸術作品を楽しみ、絵手紙の栗を喜ぶ。すべて心に余裕があるからできること。ずっとこのような日々が続けばいいのですが、すぐそこに冬が忍び寄っています。

急速にからだの中に入る秋

西谷 悦子

ハンドクリーム擦り込む秋も深くなる

玉置 当代

枯れ葉散る我は天下に疎く居て

稲葉 洋

寂しさが埃のようにつもる秋

木本 朱夏

丁寧に終わりを告げにくる秋だ

真島久美子

春の訪れを告げるのは荒っぽい「春一番」ですが、冬型気圧配置が整ったと告げるのも厳しい「木枯らし一号」です。枯れ葉が舞い落ち、虫たちの姿が失せ、肌寒くなって孤独感が増してくると「元氣者」もいささか感傷的になってきます。それもまた「秋の味」であり思索を深める陰の力です。

第22回 川柳塔まつり

同人総会

平成二十八年度第五十一期川柳塔社同人総会は十月一日午前十時からホテルアウリーナ大阪で開催された。総務部水野黒兎の司会で開会し、小島蘭幸主幹から主幹六年を経て塔誌の充実、誌友同人の拡大等、一定の成果を得たが、引き続き塔の方針に沿い、頑張る所存との決意も含めた開会の挨拶をいただいた。その後小島主幹を議長に選任して議案審議に入った。

第一号議案の平成二十七年事業活動を片山かずお企画部長が報告した。

第二十一回「川柳塔まつり」を開催し参加者357名の成果となった。

第四回「春の川柳塔まつり誌上大会」を実施し639名の応募を頂いた。

・本社会会の充実に努め、年間を通して100名越えを達成した。

・経費節減を徹底的に実践し、今期財政の黒字化を達成した。

次いで鈴木いさお会計部長から平成二六年度の収支決算書及び財産目録の提示と報告があり、藤村亞聖会計監査が監査承認の旨報告した。特に質疑は無く、一号議案は拍手で承認された。

第二号議案の平成二十七年の事業計画について片山かずお企画事業部長から各部別に活動計画を提案、また鈴木いさお会計部長が新年度予算案を提案、本件も質疑は無く二号議案も拍手で承認された。

第三号議案として、新家完司理事長より役員の新任、再任人事が提示され拍手をもって承認された。新任役員名は後掲。

又、塔誌6月号に社告案内の主幹、理事

長の選任についても小島蘭幸主幹及び新家完司理事長の再任が報告された。新役員を代表し内藤憲彦新常任理事の挨拶があり、最後に川上大輪副主幹の閉会の辞で総会を終了した。



同人総会の模様

事業活動報告

2016年〔平成28年〕

10月3日 第21回川柳塔まつり及び

平成27年度同人総会を開催。

11月7日 川柳塔碑合祀法要を実施した。

（高野山大霊園。合祀者七名、

法要参加者合計十一名）

主な受賞・表彰

*本社句会 月間賞永久保持者 新家 完司

*藤井寺市民賞 鴨谷瑠美子

*全日本川柳大会十五年連続参加賞 松尾 和香

出版・句集の刊行

早川 遡行 句集「山の句集 独標」

井丸 昌紀 句集「ネオンきらきら」

岸本 宏章・孝子 句集「ふたり傘」

伊藤 玲子 句集「未完の絵」

高瀬 霜石 エッセイ集「私のスター日記」

木本 朱夏監修「ことばの国の猫たち」

松山 芳生編 句集「百花繚乱」

そりりゆう会 合同句集・その八

物故者（八名）

（西内 朋月 平成27年11月22日没 83歳

初山 隆盛 平成27年12月5日没 87歳

山崎 君子 平成27年12月19日没 92歳

妻谷 重風 平成28年2月11日没 92歳

水谷 正子 平成28年2月28日没 91歳

井上 桂作 平成28年2月 没 87歳

小野句多留 平成28年5月3日没 79歳

春城 年代 平成28年7月18日没 95歳

新任役員（再任・留任は含まず）

常任理事 石田 隆彦 大久保眞澄

参 与 内藤 憲彦 吉村久仁雄

坊農 柳弘 水野 黒兎

山崎 武彦

理 事 内田志津子 宇都満知子

緒方美津子 小谷 小雪

中川ひろ介 藤原ほか

新 同 人 （二七年八月～二八年九月）

野口 晶子（三田市） 丹下 凱夫（岡山市）

森山 文切（沖縄県） 藤田 武人（大阪市）

藤井 智史（笠岡市） 池田たか子（岡山市）

永見 心咲（岡山市） 田中 恵（岡山市）

工藤千代子（岡山市） 前田恵美子（岡山市）

坂本とも湖（鳥取市） 富永 恭子（神戸市）

坂本 加代（防府市） 上田ひとみ（三田市）

杉野 羅天（熊本市） 中川ひろ介（羽曳野市）

萩原 狸月（南あわじ市） 栗田 忠士（松山市）

山崎 珠生（大阪市） 多田 雅尚（三田市）

紫 しめの（岡山市） 藤成 操江（岡山市）

（H28年）

大治 重信（大阪市） 山縣のぶ子（岡山市）

高岡 茂子（岡山市） 山東日出男（紀の川市）

村田 博（三田市） 大浦 初音（箕面市）

山下 純子（香芝市） 平賀 国和（大阪市）

同人総会出席者（順不同・七九名）

澤井敏治 井丸昌紀 山崎武彦 山本希久子

初代正彦 大内朝子 北村賢子 大久保眞澄

安土理恵 矢倉五月 長浜美龍 宇都満知子

鶴田遠野 伊達郁夫 遠山唯教 今井万紗子

足立 茂 川上大輪 小林わこ 久保田千代

水野黒兎 島田誠一 村上玄也 松尾美智代

池田純子 藤井智史 前たもつ 内田志津子

柿花和夫 小島蘭幸 森山文切 吉村久仁雄

河内月子 新家完司 加川靖鬼 森松まつお

牧野芳光 藤井宏造 内藤憲彦 江島谷勝弘

松岡 篤 三宅保州 木本朱夏 出口セツ子

西出楓楽 榎本舞夢 山野寿之 片山かずお

吉岡 修 藤村亜成 川端一步 岩佐ダン吉

岩切康子 河内天笑 松尾和香 佐々木満作

大治重信 藤井正雄 藤井寿代 古今堂蕉子

岸本宏章 岸本孝子 山田耕治 居谷真理子

前田楓花 松原寿子 坂 裕之 鴨谷瑠美子

山根妙子 石橋芳山 坂本加代 中川ひろ介

緒方美津子 石田ひろ子 原田すみ子

鈴木いさお 大田扶美代 斉尾くにこ

■おはなし 要旨

老いを詠む

木本朱夏

本社会八十代がみな元氣

寒くとも今日は句会で明日は医者

どなたにとつても老いは未知の世界です。医学の進歩によつて私たちは「長寿」を手にいれました。けれども「長寿」をただ単に喜んでいられない問題がたくさんあります。

老いてゆくことは想定外でした

高齢者諸君もうすぐ砂漠です

何ページですか私の一生は

ドッコイシヨ言うたび老いを散き散らす

富山ルイ子

尾崎 一子

辻内 次根

新家 完司

川上 大輪

西出 楓楽

長寿高齢は川

柳の絶好の素材

になりました。

本誌に「川柳塔

の讃歌」を連載

中の木津川先生

が仰いました。

「天皇が身体の

衰えを口にしま

した。よく判り

ます。僕もあと

2カ月で81歳。体がひと月毎に衰えていくのがよくわかり
ます」先生は退職されてから、「木津川計の「人語り劇場」
を立ちあげられて毎年新作を発表。2時間の「語り」で口演を
なさっておられます。私は高齢者の希望の星だと思ってい
ます。

何歳から老後ですかとたずねたい 三浦 きぬ

老いとは幾つから言うのでしょうか。ネットで調べまし

た。日本の統計調査では65歳以上。国連では60歳以上。世

界保健機関(WHO)では65歳以上を言うそうです。60歳

といえば還暦。

六十一はまだ情熱は燃えに燃え 麻生 路郎

六十の恋も指切りして別れ 西尾 栗

私の実感では高齢者いわゆるお年寄りには70歳くらいの感

じなんです。唐の時代の詩人・杜甫の「曲江」という詩に「酒

債は尋常 行く処にあり 人生七十古来稀なり」と詠んだ

ことから70を古稀という訳です。

おめでとう古稀には古稀の咲きようが 松岡 篤

シヨートケーキ二つで古稀の誕生日 山野 寿之

10年前20年前の川柳誌には老いは今ほど使われていな

かったように思います。平均寿命が延びるに従って老いや

孫の川柳が増えていような気がします。

八十で死んで玄関の賑やかさ 麻生 路郎

八十になつたら恋をしてみよう 橘高 薫風

八十歳さあこれからが反抗期 江原とみお

八十の坂は45度である 高島 啓子

九十九で死んで一年惜しがられ 柳 多留

百歳の元気のもとよく笑う 黒田 能子



氏夏朱本木

現在100歳以上は6万人。しかし長寿の人が全員健康体かというところではありません。心身共に健康に老いるということが人生最大の目標と言えるかも知れません。

瀬戸内寂聴さんの『老いも病も受け入れよう』を読みました。寂聴さんは現在94歳。92歳で胆嚢ガンの手術をしました。「人生の最後にまた一つ、変わったことができる」とガンの手術を受けることにワクワクしたそうです。歳をとったら一番気をつけたいのは健康・病気です。

血圧を計ることから年明け

診察を待つて二十句できました

花の名が言える間は呆けてない

叔父伯母母従兄弟もみんな老けた顔

長寿国陰で支えている入れ歯

白引く七はいくつですかと医者が聞く

追ってくる老化をスクワットで叩く

まさかこの段差で転ぶはずがない

老いは病気ではありません。寂聴さんは言います。食事はしつかり。お酒は適量。よく眠り、お洒落を楽しみ、好奇心を持つ。「ときめき」は若さの素だそうです。

老いらくの恋は消化器では消せぬ

浅い瀬でちやぶちやぶしてる老いの恋

ざわざわと傍がうるさい老いの恋

輝かす八十歳のイヤリング

よそゆきの服も老けてしまつて秋

百歳になつても紅を引くつもり

赤いシャツ来ても背中になる齡

我が子より子育てに責任のない孫は無条件で可愛く川柳

にも多く詠まれています。

一歳のマドンナ七色の声で泣く

歳はイヤ病氣自慢に孫自慢

老後破産や下流老人が社会問題になっていきます。大病で

もしようものならたちまち家計に響きます。介護や離婚、

ニートの子どもが親にすがつて働きませんとそれが老後破

産や下流老人につながります。

年金の愚痴も入ったのし袋

医療費は必要経費下流老人

人生の末期しみじみ金のこと

老老介護の背なに秋雨降り注ぐ

老老介護同じ話題で日が暮れる

心身ともに健康で老いることが人生最高の幸せ。

川柳塔の重鎮・米子の八木千代さんは92歳！ 毎月の自

選集には等身大の八木千代像が正直に描かれています。

在宅のままで死にたいから起きる

八木 千代

川柳は認知症予防に大層効果があると言われています。

デュアルタスクと言つて二つのことを同時にすることは大

変良いそうです。歩きながら川柳を考える。電車を待ちな

がら川柳を考える・・・いつでもどこでも今すぐからでも

実行出来ます。

生きること仕事にすれば面白い

檀山へ決して急ぐことはない

「年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる」と、生きる喜びを謳つたサムエル・ウルマンの「青春の詩」を皆さんとご一緒に朗読してお話を終ります。

小島 蘭幸

萩原 狸月

島田 誠一

高杉 千歩

松本 昌

山田 婦美子

政岡 日枝子

前 たもつ

森中 恵美子

各賞表彰・記念句会

受賞者（敬称略）前列右から
 栃尾奏子・斉尾くにこ・主幹・名誉主幹・
 平井美智子・細川花門・西田美恵子
 後列右から大内朝子・石橋芳山



第二十二回川柳塔まつりは、夏の名残を感じさせる十月一日、ホテルアウリーナ大阪にて開催された。秋田から沖縄まで全国各地から同人・誌友はもちろん、多くの川柳愛好家三百二十一名の参加を得て大盛会となった。

句会に先立ち、六賞の表彰が行われた。受賞者に小島蘭幸主幹から表彰状と記念の楯が授与され、会場は拍手で祝福の気持ちをおくった。

引き続き本年度の新同人が紹介され、代表して沖縄県の森山文切さんが、川柳塔に活気呼び起こす力強い決意を述べられた。

お話は編集長の木本朱夏さん。題は「老いを詠む」。直面する老いに苦悩する姿や逆に立ち向かう心情などを、切なく、また楽しく作句する柳人の姿を彷彿とさせる句を多数紹介された。会場の大半を占める高齢者を大いに元気づけるお話だった。（78頁参照）

句会では佐賀県の小学生姉妹、真島涼さん芽さんの呼名に会場は大いに沸き立った。月間賞は居谷真理子さん（和歌山市）

（司会―黒兎・蕉子）（協取―千代・奏子）

（清記―勝弘・憲彦）

（撮影―松岡恭子）



兼題「芸」

居谷真理子選

猿よりは少し上手に字が書ける
 芸じゃないお仕事なのとイルカたち
 芸は二枚目顔は三枚目と言われ
 波がきてるな芸に覚悟が見えている
 馬の脚馬に教えを乞う律儀
 腹芸で都庁動いているらしい
 訓練の傷は見せない曲芸師
 芸術になった芝居は肩が凝る
 五十年主婦業三猿はおはこ
 芸術と遠距離にいて乾く脳
 オカエリナサイ九官鳥は亡母の声
 金婚までラブラブでいるすごい芸
 肥えた目は切れ役をも見過ごさず
 マジックショー盛り土が消え空の箱
 三角も四角も丸く生きてます
 一日を無事に過ごしている無芸
 大見得をきったつものりのプロボーズ
 おんおん泣きころる笑い生きている（伊玲）
 芸のない妻で酌だけしてくれる
 お手をする相手は選ぶ僕の犬
 一芸に秀で身内を困らせる

黒兎 敏治 公輔 桂子 武彦 正和 見清 狸月 賢子 恭子 とーな 富子 篤 たちつ ヨシエ みつこ 凱夫 玲子 典呼 利子 順啓

不器用に人という字を書いている
流し目で男何人喰うたやら
野や山のキャンパス秋は芸術家
日銀も私も芸のない悩み
日の丸が芸などしてはなりませぬ
口先で皆を踊らす芸を持つ
家族には見せない芸で宮仕え
無芸だと知っているから猫でいる
芸術的センスが光る蜘蛛の網
花形の背を追いかける馬の足
毎日自作自演のくり返し
薄皮を重ね続けてきた至芸
フライパン返し二三句出来ました
雷も芸術学科卒業生
しょうもない芸やと席を立つ浪速
一発芸ひと花咲かせ散りぬるを
無芸大食こんな体になりました
プレゼント開けて喜ぶ演技力
演技など要らぬあなたはエキストラ
なんでやねん一人芝居はまだ続く
反省も心こめねば猿の芸
身を守る鱗持つのも芸のうち
あの人をドキドキさせてあげる芸
笑うしか芸がないので末席に
空腹にされてイルカが芸をする
本人は芸のつもりでいるらしい

富美子 寿代 芳光 眞澄 宏造 弘明 弘一 平美智子 朱夏 幹子 千恵子 塚一徳 ひとみ 秋の子 栄子 和郎 あかね よう子 とも湖 留里恵 文香 日枝子 矢五月 裕之 郁夫 雨奇

芸術というから胡散臭くなる
サーカスの象のくさは見たくない
朗らかに笑って暮らす凄いの芸
芸人になれず売店まかされる
佳
人間が怖くてさるは芸をする
風鈴の声で嫌だと主張する
わたくしは二人羽織の中の人
裏声はどこ押されてもすぐにでる
芸術の秋市井は炭でサンマ焼く
人
芸術の秋だ 真つ赤な爆発だ
地
傘借りて返して男芸がない
天
また君が笑顔で虹の橋かけた
軸
これも芸今わの際のありがとう



兼題「マニア」

竹治ちかし選

正人 芽 完司 瑠美子 涼 克子 楓花 明日香 英夫 次根 久仁雄 奏子

何のマニアか大きな袋提げている
幾人かの戦マニアがいる地球
ガラクタを宝物だと言うマニア
がらくたもマニアに愛しコレクション
マニアにはなれぬ何でもすぐ飽きる
さかな君魚の話しかしい
SLへ鉄チャン秋は忙しい
カーマニア磨いて眺めたまに乘る
簡単に時間を止めているマニア
ミサイルのマニアが吠える北の空
釣りマニア魚拓の顔になっている
ジオラマに夢中電車が走る家
買うだけでまず安心のクジマニア
お宝で足の踏み場もないマニア
ご朱印のマニアも混じる遍路道
凡人は理解出来ない壺の価値
マニアにはなれずとうとう秋になる
撮り鉄と乗り鉄競う駅の中
徹夜して一番のりの列に居る
川柳のマニアになつて余生
しゃがんで虫と語らう虫マニア
マニアとは名ばかり蝶が好きだけ
ガラクタを集めてひとり悦に入る
無人駅巡って風の音を聞く
マニアからオタクへ深い深い海
ガラクタを集めただけと妻は無視

篤子 はこべ かずお 俊雄 富雄 宏造 六点 蕉子 智史 善純 若芽 千鶴子 見清 柳歩 りゆうこ 武人 菜月 孔明 (沢)和子 堅坊 航太郎 珠子 高志 ダン吉 芳山 憲

気がつければ玩具の中に僕がいる
 凄い品かかえマニアの友が来る
 写経からマニアになった筆と墨
 ステレオもないのにレコードのマニア
 ポケモンになるまでポケモンを探す
 教授から引きこもりまで居るマニア
 ばあちゃんの味マニアになった道の駅
 星のことなら何でも僕に聞いてくれ
 少年の日の夢つなぎ今マニア
 変人と言われマニアは生き辛い
 得得と底の深さを説くマニア
 断捨離でマニアの秘蔵姿消す
 飴よりもおまけ集めに買うグリコ
 少年の目を持ち続けてるマニア
 まず山を覚えるキノコ蒐集家
 見て欲しい触ってほしくないマニア
 LPマニア今も青春しています
 マニアックな趣味に独りもいないものだ
 引きこもり何のおタクか顔がない
 一芸に嵌り壺から出られない
 マニアなら同じマニアを嗅ぎ分ける
 マニアック狂気の沙汰と紙一重

佳

千賀子 紀乃 大紀子 浩子 久美子 将文 宏子 桂子 太子 八重 昌代 高鷺 淳司 玄也 希久子 キヨミ 賀世子 美千代 敏子 侑子 花門 (南)たかこ

嵌まったらとことん深い穴を掘る
 人 ヒトよりもモノに恋している孤独
 地 古墳マニアで夢で卑弥呼に会っている
 天 星ばかり眺め心は宇宙人
 軸 うんちくもあつてマニアの宝物
 兼題「うっかり」
 三宅 保州選



かこ 梶子 克己 完司 航太郎 敏治 シマ子 一恵 由一 すみえ 千鶴子 楓花 和夫 真理子 康子 良子 進

雨水を溜めてばうふら飼っていた (蒲)久美子
 うっかりと生きてたつぶり年取った 一男
 うっかりを許してくれた魔法瓶 紀華
 忘れ物ないかといつも振り返る (坂)加代
 アクセルはうっかりと踏み位置にある (木)明子
 うかつにも活断層を揺り起こす 百合子
 葬式で久し振りに会いハグし合う 千賀子
 うっかりも傘にはじまり遺骨まで 美津子
 自分たちの電話番号ばつと出ぬ 天笑
 今はまだうっかりですと言えろ 大輪
 うっかりも織り込み済みにして気楽 英夫
 レントゲン撮ったら鉄写つてる 義泰
 音もなくうっかり病が忍び寄る ひろ介
 うっかりをあちこち置いたまま眠る 和郎
 うっかりもちやつかりもいて輪が保つ いわゑ
 うっかりと昔に触れて発火する (伊)玲子
 うっかりが溜まるばかりの日ぐれ道 侑子
 うっかりとぼんやりコロボして破滅 壽峰
 縦に振ってしまった首が回らない 正人
 うっかりが続いてチャッカリを学ぶ 森子
 うっかりがアイディアとして生きた技 ひろ子
 うっかりとヒト科が犯す神の域 ちかし
 うかつにもライバルの影踏んでいる 更紗
 人生にうっかり時間あつて良い 智彦
 うっかりの愚痴を聞かせた靴のヒモ わこ
 豊作にうっかりは無い彼岸花 千津子

風の音ばかり電池が切れている

惠美子

居眠りを後悔してるキュービッド

和宏

うっかりと握手したのは熊だった

清

モナリザのような妻です要注意

(明) 明子

気を抜けば開いてしまう花である

(真) 久美子

うっかりと対角線はずさるる

明日歌

うっかりと吐いた愚痴から発火する

幹子

うっかりとしていた僕は人間だ

ダン吉

ひょいと出てひっこみつかぬ昼の月

(田) 章子

うっかりとしてた平和が流される

かこ

うっかりと夕陽ながめただけの今日

日枝子

つつ込んだ首が抜けないまま秋へ

(青) たかこ

佳

幸せにするとうっかり言いました

光久

迂闊だった涙は君の武器だった

(紫) 桂子

ほんやりの薄暮にうっかりを落とす

ますみ

うっかりとニュートンに見られたリング

堅坊

満開を待っていたのは私だけ

ひとみ

人

うっかりを補い合つて尉と姥

寿之

うっかりの度に花咲くありがとう

奏子

地

バスワード忘れ自分に戻れない

良一

軸

ミスをしたことに気付いていないミス



兼題「届く」

山本希久子選

あと少し極楽までの登り坂

廣子

字余りはゆうべ届けておきました

(古) 和子

手の届く範囲に夫放し飼ひ

理恵

秋晴れの空から墓石へ亡母の声

(矢) 五月

電波飛ぶ中をゆらりと来た手紙

真理子

明け方の枕に海鳴りが届く

完司

お手伝いしますと猫の手が届く

眞澄

千匹の羊が届く秋の空

芳光

赤紙が再び届きそうな雲

勝弘

田舎からすだちが届き秋刀魚買う

美智代

新米が届きましたよ仏様

扶美代

寿がほっこり届く秋日和

寿代

ソマリアへ届けわたしの寸志

いさお

爆弾かも知れず筒かも知れず

蘭幸

花束が届いて束の間の主役

瑠美子

Eメールは後で封書はすぐ開く

正彦

アマゾンからワニのバッグが届くはず

百合子

梨送るみかんが届く未だ達者

昌枝

残暑のかわりですよと台風が届く

ますみ

梨届く蟹を送れというサイン

無限

直球で来ました君のプロポーズ
借りた本秋の匂いのする葉
虎落笛届け津軽冬景色
火星にも月にもやがて手が届く
手が届きそうで届かぬ君だった
落とし物届く日本が驚かれ
子に代わり詐欺が届けてくれる声
ビザ届く分度器が要る子沢山
大きな夢ちいさな夢が宇宙から
頑張った結果が花丸で届く
失った財布が届く日本晴
男名で届いたチョコは孫だった
泣き顔で届いた孫のひとり旅
赤とんぼ秋を届けに来てくれる
好物を添えてごめんなさいが着く
ふるさとの山川栗を剥きながら
断捨離の督促状が届く喜寿
ビオーネから届く紫の恋文
私に届いたものは秋八十路
朝刊の音から朝が立ち上がる
間違わず忘れず届く請求書
交番に届けられない物拾う
友情の絆が届く花切手
終戦を今も知らない遺骨箱
百歳に届く梯子を捜す旅
平和への願い折鶴から届く
真心が届く思わぬページから

ひとみ

靖鬼

直樹

(片) 加代

光久

盛夫

敏治

見清

惠美子

柳歩

(岩) 明子

(伊) 玲子

(楠) 章子

洋

(平) 美智子

葉子

欣之

榎子

森子

良一

秀夫

(上) 紀子

若芽

のぶし

日の出

ちかし

紀乃

抜き立ての大根届く里の便

安心が届く主治医の処方箋

松茸の香りが届く隣から

風ふわり動いて秋の譜が届く

手の届くところにずっといてあげる

三食が今日も私の胃に届く

母さんの苦言はひらがなで届く

向こう岸ばかりに届く桃である

人

手の届くところにいつも紙とペン

地

ケータイの届かぬ場所にある自由

天

手の届く位置で他人と云う掟

軸

余命知らずにマイナンバーが届く

兼題「ぶらり」

新家 完司選



省エネの元祖ぶらりとナマケモノ

父さんは首を吊る真似してみせる

隣家からハミ出た柿が熟れ始め

今年の自慢三十本のゴーヤです

貫禄の柘榴がぶらり屋敷跡

更紗

富香

日出男

碧

青

あかね

すみえ

(真)久美子

一歩

俊八

(開)桂子

鈍行で立ち寄るイカの匂う町

図書館で寛いでいるスニーカー

にんげんに化けてぶらぶらしています

廃校のブランコ風と戯れる

ぶらりして古本一つ買っただけ

ぶらり来てお買い得品ないかいな

その辺をぶらり日本語よい響き

すれ違う美女を目当てにウォーキング

「べっぴんさん」探しにぶらり神戸へ

ウメ地下ぶらり帰りの出口わからない

縁というもので世間にぶらさがる

一人暮らしの糞虫に憧れる

たもつ

恵

日出男

ばっは

すみえ

銀ぶらで見つけましたよ玉の輿

どの店も覗いてみたい五条坂

寅さんも健さんも出て行っただけ

織田作がぶらり来そうなたこやき屋

下駄履いてどてら羽織って行く外湯

改札を出たら提灯ゆれていたら

ネクタイをぶらりとさして酔っている

駅降りて家の隣の居酒屋へ

ぶらりぶらりぶらりと酒の町にいる

杉玉がぶらりと揺れて吟醸酒

おとなりの庭から凌霄花がのぞく

GPS持っているから大丈夫

揺れるのでしんどいと言う毛虫

ブラジャーをしてる暇ない子沢山

(蒲)久美子

無限

美千代

芳山

鉄ほうでは私はいつもナマケモノ

迷ったらいつもブランコ漕いでいる

風鈴を秋の扉に侍らせる

ぶらり旅なさりたかろう両陛下

佳

茂

正和

いさお

真理子

眞澄

七七

栄子

楓花

楓楽

俊八

寿代

亜成

はな

恵美子

志津子

凱夫

勝弘

かずお

久美子

芳山

美千代

無限

将文

千枝子

一男

次根

茂

正和

いさお

真理子

眞澄

助手席にコスモス咲かせ山陰路

ハンモック一つで足りる僕の城

究極のぶらり糸瓜というポーズ

糞虫の糞の中にもある宇宙

秋空へ自ら糸を切った風

ありていに言えばぶらぶらしたい

難儀でっせ毎日ぶらりしてるのも

ぶらり来て飯がまずいと文句いう

ぶらり来て庭木を切つてゆく息子

みのむしになって暫しのオフタイム

暇だから職務質問されている

極道はぶらりと風になつていた

ティファニーへぶらり入って怪しまれ

ぶらりぶら ぶらぶらぶらり迷子札

暇だからちよつと家出を試みよう

生きている内は地球の風来坊

鉄ほうでは私はいつもナマケモノ

迷ったらいつもブランコ漕いでいる

風鈴を秋の扉に侍らせる

ぶらり旅なさりたかろう両陛下

佳

茂

正和

いさお

真理子

眞澄

くにこ

宏章

のぶよし

良一

英夫

武志

美恵子

綾子

(紫)桂子

(池)純子

大輪

蘭幸

玄也

武彦

涼

芳光

芽

雅尚

ますみ

直樹

一文

アキ

ふさあ

耕治

朱夏

人

ぶらり出て大きなくしゃみして戻る (岸) 桂子

地

かび臭くなってきたのでぶらさがる 恭子

天

垂れ下がる電線終わらない戦 正人

軸

自画像はぶらりぶらぶらナマケモノ



兼題「みどり」

小島 蘭幸選

緑いっぱい今なら自慢できる郷

日本の緑点滅しています

野のみどりいただきましよう春の膳

歳月へみどり濃くなる夫婦の樹

少子高齢瑞穂の国が保てるか

雑草も私のものよ一戸建て

みどり色の風吹く彼の轍から

母さんのみどりがヨモギ餅にある

妻の留守皿にみどりをちゃんと入れ

深緑を抜けると鬱が消えていた

風みどりあの日のことは許そうか

風はみどり少し勇気が湧いてきた

明日生きるために緑を植えて置く

みどり色の愛だ信じねばならぬ

盆栽と会話はじまる朝が来た

緑陰にいくさを語る深い皺

若菜色足してあなたと夢ゆらり

嬰兒の元氣田舎に戻らぬか

ボケモンGO樹海へ迷い込む勿れ

百年後の森を案じている白書

おそろしい地球のみどり消す戦

大らかなみどりが包む奈良の景

みどりにも赤にも黄にもなるハート

グリンティゆつくり五体浄化する

父母の愛掬えばみどり色の風

温暖化にみどりの手入れ欠かさない

ゆらゆらとみどりの中で脱皮する

真つすぐにみどり探しに行くところ

菜園の汗の緑がのる朝顔

古九谷の器を抱いているみどり

ハイウェイ若葉マークのマイベース

人間を人間らしくする緑

郷愁に触れると湧いてくるみどり

段段畑幼い僕が駆け抜ける

空蟬になつてもみどり離さない

みどりごに平和な今日であるように

新緑のころも確かにあった古稀

原爆ドームみどりの中で生きている

くたばるものかとひとこばえの眩き

アキ

博一 みどりいっぱい老人たちが寄るベンチ

ヨシエ

万紗子 お抹茶でなければならぬ句読点

羅天

草の緑になりきっているバツタ

宏章

扶美代 花が咲く私のみどりだったとこ

浩子

萌子 いつまでも緑でいたい影法師

たえこ

千賀子 図書館の椅子深いまどりの中にいる

唯教

文子 母からの手紙に添えてある酸橘

美智子

哲男 ベランダのみどりやさしくする夕日

六點

隆昭 大好きなけやき並木の午後の雨

(大) 一徳

ちかし 教会の鐘はみどりの色で鳴る

葉子

千代子 反省をしなさいみどりなんだから

朱夏

柳歩 雨上がリ天地も君もみどり色

博

信二 おべんとう開けてバセリの助演賞

信二

七回忌父の書斎にあるみどり

日枝子

武人

富美子

ますみ

瑠美子

日出男

明日香

善純

洋

希久子

(片) 加代

栄子

狸月

耕治

俣子

正人

寿之

くにこ

キヨミ

天

草いきれ人は保護色など持たず

居谷真理子

軸

天

草いきれ人は保護色など持たず

居谷真理子

軸

天

参加者の感想

最高潮のまつり

矢倉 五月（理事・大阪）

「川柳をやっていて良かった」との思いは日常ずっと持ち続けているが、その思いが一年中で最高潮に達するのが「川柳塔まつり」のこの日です。

今年も参加できて良かった!! 321名という多数の参加者にも拘わらずトラブルも無くスムーズに会が進行した裏には、役員の皆様の周到な準備とご努力の賜物と頭が下がります。講演も句の披露もすばらしい物でした。沢山の柳友と感動を共有できた事を心から嬉しく思い出来る限り長く出席したいと願った一日でした。

「老いを詠む」に感動

岸本 孝子（同人・鳥取）

右を見ても左を見ても老人、川柳界も同じです。若いと思っていた自分も八十歳、驚くばかりです。

「川柳塔まつり」に参加すること十回余

りになりますが、元気で参加できた幸せにふと気付きました。「老いを詠む」のおはなしの中の多くの老いの句に感動し、老いも捨てたものではないなど実感しました。平均寿命は百歳となるそうです。これを健康で生きられるように、明るく前向きな老いの句を作ること心掛けたと、つくづく感じました。

感動が冷めないうちに

前田 楓花（同人・鳥取）

二回目の川柳塔まつり、五年ぶりの参加です。帰宅して感動が冷めないうちにペンをとりました。受付も混雑することなく投句、同人総会、木本朱夏先生の滑舌のよい、透き通るお声での「老いを詠む」大変わかりやすかったです。大会、懇親会、スムーズに進行され、普段名前を知っているが、お顔は存じ上げない、喋った事もない方々と束の間の親交を深め、お会いしなかった方の所にはご挨拶に行きました。この大会に一人でも多くの方に参加していただくよう声をしようと思いました。

川柳万歳!

平井美智子（誌友・大阪）

覚悟していた雨さえも参加者の熱気に恐れをなした秋の一日。開場時間前から受付も会場も生き生きとした顔・顔・顔。木本朱夏さんのお話「老いを詠む」はユーモアたっぷりの身近な川柳を紹介しながら、心の持ち方の大切さを話され、あつと言う間の一時間でした。

入選句の披露もとてもスムーズで、脇取りとの呼吸もびったり。沢山の佳句に私の耳もワクワクドキドキと大興奮。

すべてに行き届いたスタッフの心使いに感謝しながら懇親会へ席を移しました。

まばゆい川柳塔まつり

美馬りゅうこ（川柳二七会・大阪）

開会の辞も主幹のご挨拶もあか抜けたシンプルさでした。新同人代表のあ若さとスピーチは川柳塔にとっただけでなく川柳界への心強いメッセージ、と大きな拍手を送りました。

そして「老いを詠む」のおはなしは笑わせて身に詰まされてしみみりさせて「歩けるのは当たり前ではないのです」まばゆい大会へいそいそ歩いて参加できた

ことに感謝です。

濃い時間を楽しませて頂きました。

感動・感動

伊藤のぶよし（誌友・秋田）

入会一年目の初参加です。感動、感動の連続でした。

会場に入るなり声を掛けられたのが、憧れのマドンナでビックリ。初めて求めた句集「天秤座」の作家が、その隣にいたので二度ビックリ。サブライズの止めは、「路賞」の代理受賞に指名されたこととです。会場いっぱい約三百二十一名に圧倒されたのは、もちろんです。

何といっても懇親会ラストの「星影のワルツ」大合唱と握った手の温もりを忘れない、記念すべき十月一日でした。

老いてこそ青春

初代 正彦（同人・大阪）

今年も各地から多数の参加があり盛会でした。私は七回目の参加になりますが、緊張の入選句披露ややかな懇親宴は勿論のこと、今年は木本朱夏氏の「老いを詠む」のお話。あの瀬戸内寂聴さんら著名人の生き方や多くの川柳事例を紹介さ

れて、老いてこそ「心に青春を」との熱弁に深い感銘を受けました。

私も好奇心・探求心を忘れぬよう心掛けて、今後も川柳を楽しみ充実した生活を送りたいものと思っています。

川柳塔まつりから婚活へ

藤井 智史（同人・岡山）

川柳会場へ行く前、会場近くの生國魂神社で川柳塔まつりの成功を祈願し、会場入りしました。

このたび新同人に推薦され、早速、同人総会へ参加。同人として川柳塔のため、頑張らねばと思った総会でした。

大会の結果は「うーん」。懇親宴で歌った「高原列車は行く」により、川柳塔列車の完成。これは、「深イイ話」。

翌日、婚活だったため、二次会への誘いを断り、皆様、申し訳ありませんでした。早く結婚報告できるように頑張ります。

懇親宴

句会の熱気冷めやらぬまま、三階の葛城の間に移り、懇親宴が開催された。司

会進行は片山かずお、居谷真理子。新家完司理事長の「これからが本番」の開会宣言に続き、木津川計氏の発声による乾杯で宴がスタートした。

料理とお酒と、何よりも旧交を温め合う歓談の時間、そして恒例のカラオケ大会が始まり、次々と自慢ののどが披露された。とりわけ会場を盛り上げたのは、新同人の、若い活気に満ちた高らかな歌声であり、切々と女心を歌い上げるまだまだ若い熟年の声であった。川柳塔すみよしや、鳥取・島根グループの元気な合唱も会場を大いに楽しませた。

圧巻は木津川計氏の一人語り。江戸物狂言を大阪弁で演じて見せるという、本邦初公開の名場面であった。

予定時間も過ぎた頃、おなじみの「星影のワルツ」でのファイナレを迎えることになった。小島蘭幸主幹の歌で全員が手をつなぎ、輪となり、再会を誓い合うという、川柳塔恒例の最高の時間であった。

木津川計氏の「万歳三唱」で、本当に名残惜しい気持ちで、散会となった。

（大久保真澄）

第22回 川柳塔まつり

川柳塔



会場風景



小島蘭幸主幹
の挨拶



新同人の方々
(河内天笑名誉主幹と小島蘭幸主幹を囲んで)



麻生路郎氏胸像と
川柳塔希望の星



路郎賞を受賞された斉尾くにこさん



兼題と選者名の垂れ幕

表彰楯



司会の水野黒兔氏

懇親宴



乾杯の音頭をとる
木津川 計氏



楽しく合唱される皆さん



司会の片山かすお氏と
居谷真理子さん



万
歳
三
唱



全員で星影のワルツを合唱

川柳大会参加者

総数321名
(順不同・敬称略)

〔秋田〕 伊藤のぶよし

〔静岡〕 米山明日歌

〔愛知〕 富田末男 柳 秀夫 金子美千代

脇田雅美

〔三重〕 吉崎柳歩 青砥たかこ

每熊伊佐男

〔京都〕 市井美春 櫻崎篤子 今井万紗子

藤井文代 前中知栄 榎本宏子 三宅満子

山田葉子

〔大阪〕 油谷克己 阿部俊八 赤松ますみ

荒川鈍甲 池田純子 池 森子 石田ひろ子

井澤壽峰 井丸昌紀 岩田明子 磯島福貴子

上山堅坊 榎本舞夢 海老池洋 指宿千枝子

江見見清 大浦初音 大堀正明 岩佐タン吉

岡部幹和 荻野浩子 奥村五月 内田志津子

大治重信 柿花和夫 笠嶋恵美 宇都満知子

加島由一 片岡加代 賀部 博 江島谷勝弘

河内月子 河内天笑 川端一步 榎本日の出

川端六六 北村賢子 木藤明子 大島美智代

久世高鷲 熊代菜月 黒岩靖博 太田扶美代

小林若芽 小林わこ 酒井紀華 小川賀世子

坂上淳司 坂 裕之 櫻田秀夫 片山かずお

佐藤忠昭 澤井敏治 沢田和子 鴨谷瑞美子

柴田桂子 島内節子 島田誠一 岸井ふさゑ

初代正彦 杉本義昭 助川和美 木見谷孝代

鈴木栄子 鈴木かこ 関よしみ 古今堂蕉子

伊達郁夫 田中新一 田中朋子 齋藤さくら

田中廣子 谷久美子 谷口東風 阪井美世子

次井義泰 土田欣之 津守柳伸 佐々木満作

鶴田遠野 寺井弘子 寺川弘一 柴本ばっは

遠山唯教 栃尾奏子 富田啓二 島田千鶴子

内藤憲彦 内藤光枝 中井アキ 神野千恵子

長井善純 永井玲子 中岡 妙 鈴木いさお

中川一男 中川隆光 中蘭 清 津田シルク

長高俊雄 中村 恵 西川更紗 津守なぎさ

西澤司郎 西出楓楽 西美和子 徳山みつこ

能勢良子 春木一恵 肥山一文 出口セツ子

平賀国和 藤井正雄 藤川八重 中川ひろ介

藤田武人 藤塚克三 藤村亜成 中里はこべ

藤原大子 本田智彦 前田紀雄 原田すみ子

前たもつ 増田隆昭 升成 好 平井美智子

松浦英夫 松岡 篤 水野黒兎 弘津秋の子

南 高志 都 武志 村上玄也 藤島たかこ

村上直樹 森井克子 森 茂俊 藤原千恵子

森 廣子 八木侑子 矢倉五月 松尾美智代

安田忠子 山根妙子 山野寿之 松本あや子

山本 進 雪本珠子 吉岡 修 宮崎シマ子

吉木栄子 米澤俣子 若本安代 森中恵美子

森松まつお 森吉留里恵 山岡富美子

山口弘委智 山本希久子 吉道あかね

吉道航太郎 吉村久仁雄 渡辺美津子

あまのとな 宇都宮ちづる 美馬りゅうこ

〔兵庫〕 青木公輔 足立 茂 上垣キヨミ

上田和宏 梅澤盛夫 大石希世 上田ひとみ

〔沖繩〕 森山文切

長川哲夫 加川靖鬼 金川宣子 緒方美津子 武本 碧 辻内次根 松尾和香 松原寿子
北野哲男 梶谷和郎 小山紀乃 奥澤洋次郎 三宅保州
梶元世津 多田雅尚 田中章子 奥田みつ子

御芳志お礼(敬称略・順不同)

塚北一徳 冨永恭子 長島敏子 久保田千代 新家完司 成田雨奇 平尾正人 坂本とも湖 田中新一・小島蘭幸・新家完司・森中恵美子

長浜美籠 能勢利子 萩原典呼 清水久美子 藤井寿代 前田楓花 牧野芳光 竹村紀の治 川上大輪・西出楓楽・前たもつ・鴨谷瑠美子

萩原狸月 福田好文 藤井宏造 竹山千賀子 両川無限 両川洋々 政岡日枝子 天根夢草・梶元世津・高瀬霜石・平井美智子

藤岡りこ 細川花門 堀 正和 西口いわゑ 両川無限 石橋芳山 伊藤玲子 熱田熊四郎 水野黒兎・柿花和夫・山崎武彦・竹治ちかし

松井文香 丸山孔一 村岡義博 前川千津子 今岡健柳 岸 桂子 佐藤治代 多久和敬子 石橋芳山・山口光久・松原寿子・山本希久子

村田 博 山口光久 山崎武彦 みぎわはな 福間芳枝 松田眞弓 松本 昌 戸谷てる美 鶴田遠野・長浜美籠・岩切康子・久保田千代

山田耕治 山口ヨシエ 松本文子 山根七七 仲田美千代 川端一歩・三宅保州・寺井弘子・古今堂蕉子 河内月子・内藤憲彦・藤井宏造・居谷真理子

〔奈良〕 安土理恵 安福和夫 居谷真理子 柳楽たえこ 長谷川博子 藤田武人・栃尾奏子・足立 茂・西口いわゑ

大内朝子 大楠紀子 大西將文 大久保眞澄 岡 山 大杉敏雄 丹下凱夫 工藤千代子 榎本宏子・坂 裕之・小澤幸泉・奥田みつ子

加門萌子 笹百合子 笹倉良一 小林すみえ 〔岡山〕 藤井智史 大杉敏雄 丹下凱夫 工藤千代子 島田誠一・木本朱夏・斉尾くにこ

谷川 憲 中堀 優 松本粧子 小林すみれ 〔広島〕 小島蘭幸 片山かずお・江島谷勝弘・鈴木いさお

毛利元子 森中博一 山下純子 澤山よう子 〔山口〕 坂本加代 森松まつお・佐々木満作・大久保眞澄

山田順啓 山本昌代 米田恭昌 飛永ふりこ 〔愛媛〕 西田富雄 西田美恵子 山岡富美子

渡辺富子 西久保隆三 長谷川崇明 〔高知〕 橋田綾子 橋田秀穂 番傘川柳本社・松江川柳会・まつえ吟社

〔和歌山〕 磯部義雄 上田紀子 山東日出男 〔佐賀〕 真島 涼 真島 芽 真島久美子 京都塔の会・川柳塔わかやま吟社

字野幹子 川上大輪 喜田准一 土屋起世子 〔熊本〕 岩切康子 杉野羅天 きやらばく川柳会・美研アート

木本朱夏 楠原富香 楠見章子 古久保和子

愛染帖

新家 完司選

(投句) 281名

米子市 成田 雨奇

こいつバー出すぞ開放的だから

(評) そう、頑固で石頭はグー。個性的な奴はチョキ。だいたい「あたりー」なのだが、読みを見抜かれたら簡単に負けてしまう。

奈良市 米田 恭昌

出世には遠いが僕は自治会長

(評) 会社人間としては出世しなかったが、地域の皆さんから信頼されて自治会長に推された。遣り甲斐のある老後ではないか。

松山市 神野きつこ

何度でも一人でできる片思い

(評) 誰にも迷惑をかけずお金もかからず、一人でできる片思い。しかも、何度でも繰り返してきて、心身ともにイキイキ!

福井市 伊藤 良一

理想とは少し違うが妻がいる

(評) 欲を言えばキリがない。「理想とは違う」のは奥方も同じだろう。お互いに「結婚してくれてありがとう」と感謝しながら末永く。

弘前市 高瀬 霜石
やめようと毎回思うカツカレー

(評) 「せめてカツなしにしようか」とは思うのだが、やっぱり食べてしまう。だが、うまいものをガッツリ食えるうちが華だ。

岡山県 山縣のお子

体重計まだ跳ねあがるパワー持つ

(評) 体重ではなく元氣良く乗って針(数値)を跳ね上げるといことだろう。その程度のパワーがないと寝た切りになってしまう。

三田市 福田 好文

貧乏を見抜いた猫が家を出る

(評) 仲間の食事を覗いて「ここはまたグルメ缶か、それに比べてウチは……」などと、我が身の不運を嘆いていたのかもしれない。

貝塚市 吉道あかね

歳相応に見られる服は似合わない

(評) もちろん、実年齢よりも若向きの服が似合うという自負。そのようなプラス思考が心身ともに元氣づけているのだろう。

堺市 内藤 憲彦

ああ言えばこう言う病氣完治せず

(評) すぐに反論できるのはホケていない証拠。だが、反省もなく、同じように言い返しているのは脳味噌が固くなってきた証拠。

枚方市 寺川 弘一

平均寿命越すと肩身が狭くなる

(評) 高齢化社会などと言われると、申し訳

ない気がする。高齢者にこのような思いをさせる国は文化国家とは言えない。

米子市 生田 和之

することもないが死ぬ気もない傘寿

岡山市 丹下 凱夫

一日中黙っていても草臥れる

生駒市 飛永ふりこ

ハエ一匹なんで今さら追い回す

尼崎市 山田 耕治

ピーマンにミンチを詰めるオママゴト

鳥取市 福西 茶子

ストレスの種はズボラなあなた様

大阪市 藤田 武人

イントロが流れマイクが奪われる

和歌山市 古久保和子

水分不足眉間に皺が寄ってきた

堺市 坂上 淳司

バスで脅してもソプラノで一蹴

大阪市 内田志津子

再会をしたくない人ひとりいる

神戸市 近藤 勝正

デパ地下の試食重ねて食通に

大阪市 古今堂蕉子

口ほどに物言うた手もガツサガサ

弘前市 稲見 則彦

日捲りが十日ぶりだと拗ねている

奈良市 大久保眞澄

寝姿も火の字の形熱帯夜

八王子市 川名 洋子

アンテナを磨き句のこと考える

大阪市 藤原千恵子

句が浮かび復唱返し家に着く

鳥取県 斉尾くにこ

言葉にて表現をするじれったさ

沖繩県 島尻 卓

凹凸の字形なかなか馴染めない

宝塚市 田中 章子

薔薇と檸檬書ければきつともてますよ

豊中市 藤井 則彦

万歩計持つと歩数を見せたがる

藤井寺市 若松 雅枝

まだ傘寿ステッキですよ杖じやない

ダイエット効果あり過ぎ歎だらけ

大阪市 柴本ばつは

ラブシーン消音にして一人見る

偏屈の父の形になる机

堺市 村上 玄也

跡取りが居ないいいよ腐る家

クレヨンのような新車の色揃え

鳥取県 細田 裕花

消えぬ傷消せない記憶原爆忌

少子化へ母校の時計止められる

大阪府 宇都満知子

シニア割引き世の中少しあたたかい

痩せなくちゃ今ギリギリのMサイズ

悪口を言ってる顔はちよつとブス

京都市 都倉 求芽

休診日になるとどこかが悪くなる

つくば市 嶋本 喬

難物だ稀だガンを誉められこそばゆい

京都市 榎本 宏子

新薬にトライしたがる若い医者

藤井寺市 鈴木いさお

正露丸で効かないときは陀羅尼助

喜屋川市 富山ルイ子

薬のせい右脳左脳が働かず

和歌山市 松原 寿子

弱音吐く度に仁王が吠えてくる

府中市 岸田 武

覚悟して独りの橋を一步ずつ

前立腺の話題になって会閉じる

ロボットは最短距離を知っている

東京都 川本真理子

チャレンジャーですわねこれは褒め言葉

老人と観念すればまだやれる

河内長野市 山岡富美子

ブライトというのは痛の一種かも

非常口ちよつとへそくり持っている

弘前市 福士 慕情

俊敏を過信したのか猫の事故

鶏が夜明けに啼くと限らない

羽曳野市 徳山みつこ

真夏日に京のお節の受付だ

ほんにおおごと築地はどないになりますの

八尾市 高杉 千歩

星になった人スライドで特養敬老会

主人認知症奥さん彷徨ケアハウス

三田市 谷口 修平

一人っ子同士で親を4人看る

鳥取県 門村 幸子

頭に虫湧いていろいろ悩ましい

瀬戸内市 片島 秀月

全力で駆けた荒野は忘れない

岡山県 田中 恵

エプロンが平常心を取り戻す

沖繩県 森山 文切

気が弱い人を探している会議

橿原市 居谷真理子

夫婦してガリガリ君とリオ五輪

川西市 山口 不動

掃除中妻の鼻唄さだまさし

佐賀県 真島久美子

くすぶったままで独りの部屋の鍵

今治市 渡邊伊津志

月見草の湖遠く見てひとり

海南市 小谷 小雪

がたがたと緩む兆しの糸切り歯

小野市 田中 辰夫

老婆のヘソクリでゆくフルムーン

熊本市 杉野 羅天

いつもより煙が匂う土用なり

大阪市 奥村 五月

足不自由だけど元気で酒飲める

堺市 加島 由一

居酒屋でサンマを焼かすほどリッチ

唐津市 仁部 四郎

タラレバの話を聞いてやった酒

三田市 村田 博

あと二合飲ませて欲しい全没日

米子市 後藤美恵子

ビール党残暑ちつとも苦にならぬ

寝屋川市 伊達 郁夫

幸せをちよつぱり貰う缶ビール

堺市 澤井 敏治

チンチロリン君も月見かビールどや

香芝市 大内 朝子

大好きな酒がこの世にある至福

札幌市 三浦 強一

幻聴か飲もうと黄泉の友の声

三田市 堀 正和

割り勘で呑むから酒が旨くなる

河内長野市 松岡 篤

碁で勝って割り勘で負け今日はチャラ

三田市 尾崎 一子

縄のれん憂さを晴らして終電車

松江市 中筋 弘充

老人ホームには滅多に居ない酔っ払い

岡山県 池田たか子

年金に花と焼酎けずれない

芦屋市 竹山千賀子

名前でも褒めてもらうと気分いい

松江市 石橋 芳山

浮きドックですもの妥協いたします

三田市 上田ひとみ

要するに少し動けばすこし減る

神戸市 細川 花門

地方創生なにも変わらぬおらが村

鳥取市 倉益 一瑤

悔しさは私の宝物である

塩竈市 木田比呂朗

カラオケのようにはいかぬ二輪草

大阪市 栃尾 奏子

番号で呼ばれてロボットになった

那覇市 前川 真

幾たびか呑んだ煮え湯も糧となる

防府市 坂本 加代

還暦は0歳今は青春期

奈良県 安福 和夫

頑なにアナログ通すのも勇氣

豊中市 池田 純子

なぜどうしての嵐に耐えた夏休み

鳥取県 山下 節子

発端は「なぜ」からでしたノール賞

豊中市 水野 黒兎

岬から見ればなるほど水の星

下松市 有海 静枝

あちこちでご縁からまる田舎町

堺市 大和 峯二

悲しさを吹き飛ばします阿波踊り

神戸市 松井 文香

派手な服衝動買いもまだオンナ

大阪市 高杉 力

あなただけおまけしとくと甘栗屋

松山市 郷田 みや

ジャンケンで決める秋刀魚の上か下

松原市 森松まつお

友達のとりでですよといなされる

鳥取市 奥田 由美

満ち足りた眠りのオマケ母の夢

堺市 羽田野洋介

かいつまんで言えばの後が長々と

寝屋川市 籠島 恵子

無視されていても黙礼しておこう

沖縄県 高良 秀光

四面楚歌妻の助言で鱗落ち

鳥取市 前田 楓花

マニキュアを塗った指でも草を抜く

唐津市 坂本 蜂朗

ただ耐えるしかない妻の機関銃

大阪市 谷口 義

少しづつランチ残しておひらきに

安来市 原 煩惱児

盆が来て迷うお墓か散骨か

河内長野市 木見谷孝代

猛暑惚けはぐしてくる秋の風

紀の川市 辻内 次根

生きている家は灯が点く午前五時

神戸市 富永 恭子

しば漬を買ったついでのでの三千院

羽曳野市 中川ひろ介

嵐の夜手を繋いでる舳い舟

岡山市 永見 心咲

行列の日傘は凶器かも知れぬ

大阪市 田浦 實

ポケモンGO人種宗教和で結ぶ

鳥取市 永原 昌鼓

ただ祈る孫に赤紙来ぬように

神戸市 能勢 利子

寅さんの町に昭和を買いに行く

神戸市 山崎 武彦

死んだ振りしてる昼間の北新地

大阪府 米澤 俣子

五輪すみスツと気抜けしたテレビ

鳥取市 池澤 大鯨

禁煙できず厨房の隅占拠する

大阪市 若本 安代

再会は互いの顔が解る内

河内長野市 梶原 弘光

石置けば川の流れもリズムカル

大阪市 磯島福貴子

あれこれと日がな一日探し物

山口市 青木 隆子

狭い家なぜに出て来ぬ探し物

松山市 柳田かおる

泥んこ保育入れてやりたい孫がいる

高砂市 松尾柳右子

なれない地ケアマネージャ来てくれる

東かがわ市 川崎ひかり

袖の下ルーツ辿ればおさい銭

鳥取市 夏目 一粋

生き甲斐を保つためには金がいる

日高市 根岸 方子

低金利元金うちに夫婦旅

堺市 遠山 唯教

ガス点検といつて電気を売りにくる

富田林市 中村 恵

一欠けて二欠けて誰もいなくなる

河内長野市 中島 一彌

夢の中でキスするかもと歯を磨く

岸和田市 雪本 珠子

今時はコンビニ老いの拠り所

大阪市 佐藤 忠昭

ひざ痛いビツケル持つて父母の墓

尼崎市 清水久美子

マドンナが鼻水飛ばす大くさめ

宇部市 平田 実男

まん丸い月が私を丸くする

和歌山市 北原 昭枝

まだまだと踏ん張っている土俵際

弘前市 高森 一吞

打ちこめるものを求めて終活へ

貝塚市 石田ひろ子

ゴミと思ひ拾えば動きだした蜘蛛

奈良県 谷川 憲

紙文化スマホが駆逐する車内

横浜市 川島 良子

頑張らなくていいよと秋の空笑う

河内長野市 森田 旅人

藤棚に涼風しばし腑を晒す

河内長野市 大島ともこ

情報の波に吞まれて塞がる目

河内長野市 富田 美義

終活はゴミの遺産を先ず整理

高槻市 上垣キヨミ

緊縮財政敬老の日が削られる

三田市 金川 宣子

ありがたや病知らずの鶴と亀

加西市 大羽 雄大

席順にやはりこだわり持っている

倉吉市 加門 萌子

テレビ消す勇気が無くて子守唄

奈良市 鴨田 昭紀

岩盤がもろい男の浮気性

三原市 山端なつみ

これ以上酷使するなとコンタクト

兵庫県 山口 高明

釈明は目を逸らさずになさるませ

唐津市 安田 忠子

川柳に浸り楽しい事ばかり

共選欄

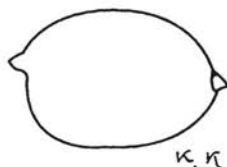
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 372名)



K. K.

「塩」 北野 哲男 選

炊きたてに手を赤くして塩むすび
日本人のこころと思う塩にぎり
塩むすび少し休める胃と財布
遠い日のリュックに母の塩むすび
塩効いた話聞きたい女性知事
マンネリの暮しに効かす塩胡椒
ライバルに塩を貰った負け戦
手塩にかけた部下が社長になろうとは
塩梅のよい位置に居るお腹の児
友だちの塩気の利いたご忠告
薄味も妻の愛だと我慢する
みそしょうゆ日本の味決める塩
盛り塩をきっちり守るおついたち
盛り塩の横で鳴いてる閑古鳥
新築へ神主御祓い清め塩

大阪市 宇都満知子
枚方市 海老池 洋
大阪市 原田すみ子
大阪市 若本 安代
大阪市 柴本ばつは
和歌山市 北原 昭枝
富田林市 山野 寿之
豊中市 藤井 則彦
貝塚市 石田ひろ子
橿原市 居谷真理子
高槻市 片山かずお
倉吉市 大羽 雄大
和歌山市 福本 英子
松原市 森松まつお
篠山市 二階 幸子

「塩」 安土 理恵 報

塩なめた昔話も風化する
塩漬けの株の断捨離踏み切れず
減塩は目くじら立ててまでしない
減塩の料理に脳が怒ってる
わかつてはいても塩鮭塩昆布
保存食たっぷり塩に愛を込め
赤穂の塩使い続ける伊予生まれ
粗塩を振って乗り切る倦怠期
生温い私をたまに塩で揉む
生きている汗も涙も塩辛い
この夏は私の肌も塩吹いた
減塩食だけでは生きていきません
皿コップキレイになった塩みがき
五十年妻の手の平塩辛い
甘くない甘塩という変な塩

八尾市 高杉 千歩
河内長野市 大島ともこ
日置市 前田 洋子
大阪市 古今堂蕉子
藤井寺市 鈴木いさお
鳥取市 平尾 菜美
寝屋川市 富山ルイ子
大阪市 平井美智子
明石市 穂谷 和郎
三田市 尾崎 一子
防府市 坂本 加代
岡山市 丹下 凱夫
倉吉市 山中 康子
奈良市 宇賀 史郎
尼崎市 藤井 宏造

地鎮祭天地四方に清め塩

唐津市 岩崎 實

塩漬けの株の断捨離踏み切れず

河内長野市 大島ともこ

塩漬けの株のほつべを叩いてる

大阪市 古今堂蕉子

塩漬けの恋に火がつくクラス会

大山市 金子美千代

目分量老母の確かな塩加減

島根県 伊藤 寿美

母さんにとっても似て来た塩加減

藤井寺市 高田美代子

塩断ちをしたが神様知らぬ顔

高槻市 原 洋志

塩鮓で農夫手酌の夜を愛す

出雲市 小白金房子

塩饅は赤穂の宝義士の町

鳥取市 加藤 茶人

ステーキに出来ぬ手塩にかけた牛

沖繩県 島尻 卓

塩漬けにしようノドンもテポドンも

松江市 石橋 芳山

塩撒いて貧乏神を追っばらう

鳥取市 土橋 登

食材の命運にぎる塩加減

豊橋市 藤田 千休

秋茄子の滴る紺を塩漬けに

大阪府 高木 道子

甘塩で育てて親が尻拭い

三田市 上垣キヨミ

関西は辛い関東はしょっぱい

大阪市 江島谷勝弘

ナメクジに塩人間に放射能

堺市 松永 庄三

山の塩と海の塩との味くらべ

和歌山市 古久保和子

地の塩になりたいものだ僅かでも

奈良市 阿部 紀子

憧れのハワイは塩もピンク色

東大阪市 北村 賢子

塩分が少し足りないお人好し

三原市 鴨田 昭紀

うす味に馴れてまもなく金婚式

米子市 成田 雨奇

落ちこんだ日の枝豆の塩加減

長岡京市 山田 葉子

おふくろはさすが絶妙塩加減

奈良県 長谷川崇明

塩だけでオカズはいらぬにぎりめし

大阪市 江島谷勝弘

ひとつまみ入りたい塩へ手を止める

豊中市 江見 見清

塩分は控え目塩飴は舐める

和歌山市 倉橋 悦子

減塩にも慣れてきました第二幕

和歌山市 土屋起世子

血圧へ塩には遠慮してもらおう

八尾市 村上ミツ子

ステーキが格別ピンクの岩塩で

西宮市 福島 弘子

盛り塩の横で鳴いてる閑古鳥

松原市 森松まつお

盛り塩の高さでヤル気見せている

三田市 堀 正和

世界一周土産とアンデス塩の瓶

西宮市 秋元 てる

数々のドラマ見てきた塩の道

堺市 澤井 敏治

盛り塩があるスナックがビルの中

堺市 矢倉 五月

塩が浸み人間らしくなつて来た

岸和田市 雪本 珠子

清め塩撒いて躊躇の策を練る

東大阪市 佐々木満作

声援に高々塩を撒くファイト

京都市 都倉 求芽

飾り塩鯛の尻尾が生きてくる

倉吉市 岡崎美知江

ライバルに塩を貰った負け戦

富田林市 山野 寿之

原発を売る商人に塩をまく

奈良市 大久保眞澄

十分に味見て敵へ送る塩

唐津市 仁部 四郎

ライバルへ塩送るほど無い余裕

大山市 金子美千代

お清めの塩は死者への冒瀆だ

堺市 村上 玄也

地の塩になりたいものだ僅かでも

奈良市 阿部 紀子

甘塩の鮓かあんたは意気地なし

河内長野市 穂口 正子

亡母の手の塩梅魔術目分量

ブルースはお砂糖ですか塩ですか

ごちそうを求めてたどる塩の道

隠し味欠かせないのが塩加減

母ちゃんの機嫌悪いな塩からい

わかつてはいても塩鮭塩昆布

毒気塩つ気減つてニュースがつまらない

塩アメが今年は特に美味かった

天に向け塩まく力士湧く歓声

粗塩から沁み出るにがりにも旨味

塩田の景色もう見ることはない

塩梅のいい嫁が居て日々楽し

分かりやすい求愛中の塩まねき

塩湖では私も浮くか試したい

茶断ち塩断ち母の捨て身に今感謝

見放されても母は塩断ち願かける

一塩の干物嬉しい旅の宿

子がふたり微妙に違う塩加減

短命県塩を仇のように言う

秀句

塩で歯を磨いたころが懐かしい

塩断ちをした母上は九十九髪

飾り塩鯛の尻尾が生きてくる

神戸市 山口 美穂

松江市 藤井 寿代

日高市 根岸 方子

八尾市 前田 紀雄

堺市 齋藤さくら

藤井寺市 鈴木いさお

羽曳野市 吉村久仁雄

三田市 宗福 清司

箕面市 寺井 柳童

池田市 栗田 久子

大阪市 藤田 武人

出雲市 伊藤 玲子

羽曳野市 中川ひろ介

三田市 幸田 厚子

西予市 黒田 茂代

大阪府 米澤 俣子

神戸市 富永 恭子

奈良市 山本 昌代

弘前市 福士 慕情

鳥取市 夏目 一粹

唐津市 山口 高明

倉吉市 岡崎美知江

塩舐めるたびに大きくなる男

逢いに行くマジックソルト振りかけて

境界線越えて来ないで塩バリ

見た目がだいじ焼魚なら化粧塩

子育ての仕上げに軽く塩をふる

短命県塩を仇のように言う

人間の臭味に塩を振っておく

塩まかれて生き残れたぞ見込みある

塩ふって男を一夜干してみる

少しずつ塩気を抜いて命ごい

ナルホドと思う塩分断つてから

塩とるか命とるか医者が攻め

築地市場傷口に塩タツプリと

塩壺に母の美学が生きている

ナメクジに塩人間に放射能

「まず塩で」なんて天麩羅屋の親父

塩抜きを十分されて好々爺

塩分がいまさらどうのここ黄泉路

塩は無限よあんなに海は広いもの

秀句

ひと振りの塩で死ぬ奴生きる奴

日本人のころと思う塩にぎり

何となく塩の甘さがわかる歳

富田林市 中村 恵

佐賀県 真島久美子

長岡京市 山田 葉子

男鹿市 伊藤のぶよし

東京都 川本真理子

弘前市 福士 慕情

和歌山市 古久保和子

四条畛市 吉岡 修

福井市 伊藤 良一

札幌市 小沢 淳

倉吉市 渋谷 重利

河内長野市 松岡 篤

堺市 内藤 憲彦

和歌山市 福井 菜摘

堺市 松永 庄三

弘前市 高瀬 霜石

大阪市 寺本 実

高槻市 原 洋志

枚方市 寺川 弘一

米子市 竹村紀の治

枚方市 海老池 洋

八尾市 宮崎シマ子

竹原川柳会創立六十周年

記念川柳大会に参加して

緒方 美津子

九月三日、八時半、新大阪駅集合。九時出発。三六名の熱気と、学生時代の遠足気分を乗せてバスは一路、広島県竹原市を目指す。バスの中ではカラオケが始まり、時ならぬ喉自慢大会のよう。

昼食は福山市の「香の月」が予約されており、待つこともなく美味しく頂きました。その後、バスは尾道市の千光寺へ走り、ロープウェイで展望台へ。

素晴らしい眺望を堪能。対岸の向島を見ながら生後ほどなく里子にだされたという路郎師に、思いを馳せました。



句碑を
探し急峻
な道を下
りながら
暑くてフ
ーフー言
いながら
も楽しい
時間でし
た。

俺に似よ 俺に似るなと子を思ひ

路郎

飲んでほし やめても欲しい酒をつぎ

葭乃

比翼の句碑にご夫妻の麗しい夫婦愛が刻まれており、胸が熱くなりました。

午後四時、宿泊先であり大会会場であるホテル大広苑に到着。前夜祭にはカラオケ大会、土井舞蔵さんのマジックを楽しみしばし談笑。竹原の銘酒が振舞われ、明日の大会のことは忘れていい時間を過ごしました。

大会当日、会場には青竹のオブジェが何本も飾られ、清々しい気持ちになりました。あいにくの曇り空でしたが続々と参加者が集い、大会の前から大いに盛り上がりました。

投句を済ませた私たちは披露までの時間、安芸の小京都と呼ばれる竹原の町を散策。テレビドラマ「マッサン」のモデルとなった竹鶴酒造、頼山陽の銅像、照蓮寺などを見学。古い町並みも保存されており、三々五々、しっとりとした佇まいの町歩きを楽しみました。この町には早歩きは似合わないなあと思いました。時間がゆっくり静かに流れてゆくようでした。

大会は事前投句、四八五名、当日二三名の参加とのこと。「深い」「宇宙」「窓」



の事前投句の部から披露が始まり、当日の「火」「美」「音楽」「未完」と続き、天人には豪華な賞品がありました。時に笑い声もあがり、佳句の心地よいリズムに酔って時間も忘れるほどでした。

あとでお聞きしましたら、賞品には竹原の銘酒「幻」も提供されたそうです。

竹原川柳会は、地域に根付き、地域の人に愛されているのだと、つくづく感じました。台風の予報もあり三時一五分にはバスの人となりました。

このバスツアーを企画・運営し、細やかな心配りをして下さった鶴田遠野副理事長はじめ、片山かずおさん、藤井宏造さん、お世話頂いた皆さまに深く感謝致します。また神姫バスの運転手さんにも安全運転を心掛けて頂き、快適な旅となりました。ありがとうございました。

会場を彩る竹や竹の里

美津子

「乾く」

(投句 224名)

藤井 則彦 選



泣き言をいわぬ母にも泪痕
 プライドがあつて心がまた乾く
 不義理したところ永久に干涸びる
 恋人が出来て乾燥肌潤む
 農政に振り回されて乾く土
 その涙乾けば僕が見えるはず
 電子音響いて日本語も乾く
 夫婦仲空気の乾き猫が見る
 生活の知恵干からびた全自動
 カサカサの心に沁みる書に出合う
 ワンルームマンション 砂漠1丁目
 言い勝つてところが乾く寂しい日
 ビカドンに乾いた草も木も人も
 世の中が乾いて見える休肝日
 乾ききった道で逃げ水追っている
 自爆テロあれは乾いた音なのか
 干涸びた背に鈴虫の澄んだ声
 真夏日に愛が乾いた口答え
 乾いたらまた読む星の王子さま
 くちびるの乾き具合で知る季節

男鹿市 伊藤のぶよし
 佐賀県 真島久美子
 池田市 上山 堅坊
 尼崎市 清水久美子
 倉吉市 渋谷 重利
 三田市 野口 晶子
 今治市 渡邊伊津志
 河内長野市 辻村 ヒロ
 高槻市 原 洋志
 大山市 金子美千代
 弘前市 高瀬 霜石
 豊中市 松尾美智代
 三原市 笹重 耕三
 枚方市 寺川 弘一
 奈良市 大久保真澄
 唐津市 仁部 四郎
 高槻市 初代 正彦
 奈良市 山本 昌代
 豊中市 水野 黒兎
 藤井寺市 太田扶美代

五十年月の砂漠を歩いてた
 乾いてる風呂敷ははの愛つつむ
 殺伐な世を見すぎてかドライアイ
 お互いに乾いてるから笑いましょ
 ポケモンGOに街がどんどん乾きだす
 コスモスに乾いた心癒される
 改革を叫ぶくちびるすぐ乾く
 ワイングラス底が乾いた日目の乱
 こんなにも乾いた心家裁出る
 人間不信ころの砂漠戻らない
 微罪あり爪のエナメル生乾き
 乾いた声で七日目の蟬が泣く

佳句

カラカラの喉は告白できずいる
 パソコンで打てば乾いた手紙文
 一つ屋根やモリ乾いて家族葬
 ギリギリのところをやつと君の声
 ひからびた通帳が待つ年金日
 人
 疑うと柔和な心が干からびる
 地
 都市砂漠ぶつかる肩に目が尖る
 天
 いさかきを恐れ蟬が乾いてる
 軸
 大つづみの乾いた音に返る我

大阪市 古今堂蕉子
 和歌山市 北原 昭枝
 八王子市 川名 洋子
 宝塚市 田中 章子
 堺市 澤井 敏治
 京都市 三宅 満子
 和歌山市 福井 菜摘
 八尾市 宮西 弥生
 大阪市 柴本ばつは
 札幌市 小沢 淳
 桜井市 安土 理恵
 横浜市 川島 良子
 弘前市 稲見 則彦
 横原市 居谷真理子
 那覇市 前川 真
 三田市 上田ひとみ
 橋本市 石田 隆彦
 三田市 尾崎 一子
 大阪市 原田すみ子
 高槻市 富田 美義

「羽 根」

(投句 217名)

大久保 眞 澄 選



飛べるほど募金しました赤い羽根
赤ちゃんを羽毛のようにママは抱く
よく焼けた羽根つき餃子ほどの恋
羽毛より軽い男がよくモテる
五線譜で羽根繕っている音符
父さんは羽を休めに行く会社
居酒屋で羽根を休める伝書鳩
羽根伸ばした後に地獄が待っていた
羽根むしる本音が見えるまでむしる
むしられた羽根のその後は思うまい
羽根のばす部屋をちよつぱり散らかして
家鴨の子たまに空とぶ夢を見る
日暮れるとむずむず羽根が生えてくる
情けない羽根が生えてももう飛べぬ
翔んでいるばあば じいじが逝ってから
うっかりと広げた羽根がためたためない
羽根もがれ怠惰に今日を生きのびる
還暦の羽根では飛べぬ喜寿の空
飛ぶ夢を時々見てる八十である
羽根のない天使が二人居る我が家

笠岡市 藤井 智史
豊中市 水野 黒兔
岡山市 永見 心咲
豊中市 藤田 千休
三原市 笠重 耕三
倉吉市 渋谷 重利
三原市 鴨田 昭紀
鳥取市 山下 凱柳
佐賀県 真島久美子
桜井市 安土 理恵
八尾市 村上ミツ子
唐津市 山口 高明
芦屋市 竹山千賀子
倉吉市 中村 毅
三田市 上垣キヨミ
和歌山市 武本 碧
箕面市 出口セツ子
米子市 生田 和之
大洲市 中居 善信
藤井寺市 太田扶美代

濡れた羽根庇い合ってる仲間です
この辺で畳むか伸ばし過ぎた羽根
羽根のないヒト科が宇宙飛び回る
けんめいに羽ばたいてみるもう少し
赤い羽根付けた紳士がゴミをポイ
直立不動美女に胸かす赤い羽根
金色に映えた五輪のパドの羽根
羽根つきがリオで出世の金メダル
そつと来て羽根をたたんだ秋茜
渡り鳥発つとき羽根をチエックする
年金の化身 諭吉に羽根が生え
年金の枠は承知の僕の羽根

佳 句

肩甲骨そろそろ羽根になるころだ
羽根生えた一万円の羽を抜く
五輪以後シャトルコックが売れている
子の羽根に撥水剤を塗ってやる
飛魚に嫉妬している深海魚

人

万札は羽根をたたんでやって来る

地

飛べるだけは残しておいたつうの羽根

天

三日目は伸ばした羽も草臥れる

軸

傘とお茶持つてヨタヨタ飛んでいる

長岡京市 山田 葉子
鳥取市 福西 茶子
高槻市 島田千鶴子
三田市 上田ひとみ
和歌山市 上田 紀子
奈良市 米田 恭昌
豊中市 藤井 則彦
つくば市 嶋本 喬
奈良市 山本 昌代
鳥取市 夏目 一粹
塩竈市 木田比呂朗
大阪市 原田すみ子
松江市 石橋 芳山
大阪市 古今堂蕉子
尼崎市 清水久美子
弘前市 高瀬 霜石
弘前市 福士 慕情
神戸市 近藤 勝正
橿原市 居谷真理子
唐津市 坂本 蜂朗

初歩教室

題一 スリル

山口 光久

川柳塔の前身は川柳雑誌ですが、大正十三年二月に創刊号が発刊されました。麻生路郎の死後、昭和四十年十月から川柳塔と名を改めました。

〔主幹六代〕

麻生 路郎(在任 大正二三年〜昭和四〇年)

俺に似よ俺に似るなと子を思い
寝転べば畳一帖ふさぐのみ
行く末はどうあらうとも火の如し

中島生々庵(在任 昭和四〇年〜昭和五七年)

浮き草は浮き草なりに花が咲き
うらおもてであつて都会の面白さ
可愛らしい目になつて来た酔うている

西尾 桑(在任 昭和五七年〜平成六年)

温泉や座り羅漢に寝る羅漢
人恋しひと煩わし波の音
牛の目に人間何をあわてとる

橘高 薫風(在任 平成六年〜平成二二年)

恋人の膝は檸檬のまるさかな
労働歌謡が歌えば凄からう
遠き人を北斗の杓で掬わんか

河内 天笑(在任 平成二二年〜平成二三年)

あんたかてうちかて阿呆で仲直り
ゆつくりとしとくなはれと放つとかれ
私たちの塔だ天まで伸ばさんか

小島 蘭幸(在任 平成二三年〜)

大好きな人と芒が原にいる
水平線を見ている迷い消えている
輝いているか傷だらけの鱗

〔添削〕

原 顔色を見ては言葉を選んでる 忠 貞

今月の題は「スリル」でした。九月の題が「色」でした。

原 吊橋はスリル満点疎む (田) 廣 子

下三になつています。廣子さんの句は十日と十五日に二通届いていました。

添 吊橋はスリル満点足疎む

次の二句は誤字です。

原 ジェットコースタースリル満天遊園地 (燭) 節 子

添 ジェットコースタースリル満点遊園地

原 足すくむスリル満天かづら橋 満寿恵

添 足すくむスリル満点かづら橋

原 新車更新スリル満点恐かった 清 司

新車更新？買い換えしたら。スリル満点に恐怖を感じるか、清々しい気分になるかでしょう。

添 車買い替えスリル満点清々し

原 われ九十スリル満点生きている (山) 久 子

「われ九十」がよくないです。スリルを感じるのには齢ではありません。

添 卒寿坂スリル感じて生きている

原 天空の散歩道足萎えさせる 明 子

空中高く歩道を造り、勇気を試す装置のことと理解しました。足が萎えるより、足が疎んでしまうと思います。

添 天空の歩道で足が疎んでる

次の二句は中八です。

原 賭け事はスリルがあるから深入りす 真 一

添 一瞬のスリルに嵌る勝負事

原 かずら橋へ戻らぬ覚悟の足を出す 和 子

添 かずら橋へ戻らぬ覚悟足を出す

原 吊橋を渡るスリルに身もゆれて (山) 弘 子

添 吊橋を渡るスリルに足疎む

原 どちらが勝つてもいいのにドキドキする 寧

添 勝負事胸がドキドキして見えてる

原 一瞬のスリルパチンコさんに御奉公 栄 子

添 一瞬のスリル求めてパチンコ屋

原 手作りの妖怪たちがおどろかす まさる

添お化け屋敷大の大人がキアキアと

原 知らなんだ活断層の上の墓地 (東)美智子

「墓地」が気になります。活断層の上です
から、住まいの方がより実感としてピンとく
るのではないのでしょうか。

添 活断層の上にわが家は建っている

原 金を出しスリル味わう義理は無い 真

添 金払いスリル味わうのも楽し

原 障害を乗り越えめだす金メダル こずえ

添 バラリンピックスリルを感じさせてくれ

原 充分にスリル味わい株やめる 旅人

添 乱高下スリル続きに株やめる

原 土壇場でブレーキかける勘働き 律子

添 土壇場でブレーキかける勘の冴え

原 転倒してスリル満点気を無くす ミヨノ

添 転倒しスリル味わうなんて無理

原 なんてやねんスリルの様な計報きく (高)道子

添 計報きくまるでスリルとサスペンス

原 若者は夢を背中に荒野行く (斉)宏子

添 若者がスリル求めて荒野行く

原 高速道路四つ葉マークに囲まれる (高)敬子

添 高速道路若葉マークに囲まれる

「少しの工夫で佳くなる句」

原 乗客の命預けるツアープス

添 乗客が命預けるツアープス

原 人生はスリル満点罰ゲーム

添 人生はスリルに満ちた罰ゲーム

原 家計簿のスリル楽しみ小銭貯め

添 家計簿のスリル楽しみ貯める銭

原 スリリングたまにあるから生きられる

添 スリリングたまにあるから出る元氣

原 妻の目をくぐるスリルの浮気虫

添 妻の目をくぐるスリルの浮気癖

原 かずら橋右に左にゆらゆらと

添 かずら橋右に左にゆらゆら

【入選句】

吊橋はスリル満点足竦む

網渡りの年金暮らしスリルなり

臆病がお化け屋敷の肝試し

お化け屋敷スリル満点涼をとる

スリル満点言う程じゃない旅パンフ

何故俺に味見をさせるこのキノコ

人生はスリルを持って楽しむ

そっと出し古い恋文読んでいる

孫が出るはらはらさせて胸なで

自信なく入試発表見るスリル

古い二人スリル求めてUSJ

年金で生きてる究極のスリル

老いの恋スリルはないが気は和む

死ぬまでにバンジージャンプしてみたい

里子

安子

秀光

由美

福貴子

廣子

温子

一彌

英男

孔一

修平

弥生

昭枝

開子

敏昭

勝治

前洋子

和之

なつみ

バンジージャンプ一度はやってみないけど
動物園餌やる孫の手の動き

どきどきとスリル満点見合いの日

保津川下り岩の急流わく悲鳴

まだ若い足場トントン登るだけ

下り坂アクセル離しまっしぐら

【佳句】

夏の夜ヒッチコックで涼をとる

奇数月我家の家計スリリング

サンドスキースリル満点暑い夏

スリラーにちよつと刺激をもらう午後

わが生命静かなスリルオベを待つ

【今月の推せん句】

スリルあるドラマでしばし暑気忘れ 青木 隆子

暑さ凌ぎにはいろいろでしょうがスリル

のあるドラマを見るのもその一つ。

覗きたいそり越えたい危険域 有海 静枝

駄目だと釘を刺されると反抗したくなる

もの。そこは危険だと標示があれば、覗い

てみたい。入りたいという心理。

ホラー本にいつそう冴えてくる深夜 大羽 雄大

ホラー小説を読んでいるとぐいぐい引き

込まれ、頭や目が冴えてくるものです。

【私の句】

今は昔スリル求めて旅をした

治子

洋一

紀美恵

のり子

(富)恵子

(山)純子

勝正

紀雄

風露

亜希子

喬

川柳塔鑑賞

同人吟 江見清

— 10月号から

活躍は遙かむかしという火箸

森山盛桜

火鉢の炭をつつきながらの団欒という情景も、昔は当り前だった。繋がった鉄の火箸で子供に灰に字を教える。郷愁。

挑戦をします今日からスマホです

江島谷勝弘

私も子供から強制されてスマホにしました。正直、苦勞をしています。挑戦する自分を褒めて上げましょう。

豆を煮ているのを忘れないように

山田葉子

とろ火で煮る時は昼間の空いた時間を使う。だから煮ていることを忘れがちになる。他の料理での注意も、この際纏めて川柳にされては如何でしょうか。

元気だと電話の声で決められる

吉田喜代子

元気でもない時でも、電話に嬉しくなつてカラ元気の声を張り上げているのかも。友の声は元気にさせる特効薬だ。

藁屋根の頃には星があふれてた

北野哲男

昔話の絵本を見ようです。家の灯りもつつましく星の灯りを引き立てている。

没頭のページが呉れる無重力

平成 好

無重力とは、読書に没頭できている様の最高の表現ではないでしょうか。作者の読書への情熱、執念には脱帽です。

墓参り気にはなるけど車椅子

増井ヨシ枝

車椅子でお墓の前まで行ける墓地は私は知りません。次回のお墓参りの時に和尚さんにお参りの仕方を尋ねてみたい。

グチャグチャになったメロンの愚痴を聞く

杉本義明

本当は持ち主の嘆きなのにメロンに愚痴を言わすとは、なんと負け惜しみの強いことか。川柳だから許される。

命綱信じる父が沖に出る

平尾菜美

私も命綱を信じています。それでもやっぱり心配がいっぱい。信じて出るしかない父への、祈るしかない願いと感謝。

ユーモアに重い話がまぜてある

藤成操江

ふつと笑ってしまった話も、後で思い返してみると身に应える警告だったりする。重い話をユーモアのオブラートで包む話術と、それを感じ取っている作者の感性。

老人会から赤飯届いたよ

山田耕治

老人会を欠席すると後でお赤飯が届く。年寄りの集まりなんか行くんか、と思っているのに、今更ながら仲間にされるのも情けないが、嬉しい赤飯だ。

手前味噌これにはまつて生きている

古今堂蕉子

歳をとると弱くなった自分を手前味噌でカバーしたくなる。気付いてはいるものの取り敢えず便利なので、まあいいかと利用してしまう自分がある。

ご機嫌が直るをはかる砂時計

後 藤 宏 之

ご機嫌も時を経ては直ると作者はタカを括っている。それも砂時計で測れる時間だ。何回もひっくり返すと、冗談はやめてと叱られる。

瘦せること出来るかテストしてみよう

松 本文子

痩せてみようと考えた人は多い。しかしテストとは。決意表明として遊び心満点の決意です。テストに成功すればテストだけで終わる。妙案です。

今は言える当然いるよ妖怪は

川 本 真理子

今の時代の妖怪はその形がはっきりと判る。人の形をしているから。昔は妖怪らしい形をしていたのに、現代の妖怪はズルイし、愛嬌もない。

疑ってから神様と距離が出来る

竹 治 ちかし

神様を疑うくらいだから余程自信があったのでしよう。その意気や良しと拍手をしたくなりました。距離が出来たことでまた一歩進めそうな気がします。何を疑ったのでしよう。気になります。

お茶しましょ言える相手が居てくれる

齋 藤 さくら

お相手とは、些細な事から一身上のこままでお話出来るお相手なのでしよう。

話をするだけで気も晴れる、時間潰しの友でもいい、ありがたい。

蛇行しています向き合いますいづれ

矢 倉 五月

人生に転機が来ると人は迷う。今は迷っていても、いつかは方向を決めなければならぬ時が来る。「いずれ」に現在の迷いの大きさと悩みの深さが垣間見られる。

物差しは自分伸縮をさせつつ

原 田 すみ子

どのように生きるかは他人様に決めて頂かなくても、私には長い経験という物差しがちゃんとあります。しかし、ここだけの話ですが、都合により臨機応変に尺度が変わりますが悪しからず。

ノーマークでしたあなたの震源地

加 川 靖 鬼

私の迂闊かあなたの約変か、それとも世間の事情か、人生には何が起きるやら。「しかしなあ」と人の好みお方は自分を責め、反省するのみとなります。

癖球を得意としてるへそ曲がり

吉 岡 修

癖球と判っていてもやられる。だからなお悔しい。遂には癖球を使う人の人格まで嫌になる。癖球をどう解釈するかはお互いの平素の関係で変わってくる。

ゆとりある暮らしの中にある差別

坂 裕 之

貧乏人は気前が良く、お金持ちはケチだと言われる。思いがけなく、また中途半端にゆとりが出来ると、際立たせようと差別意識が生まれてくる。人の感情は厄介だ。

線香花火あれば大人の愛でるもの

高 瀬 霜 石

大人の誰もが線香花火には、幼かった時の、人、土地や出来事と繋がる特別な感傷がある。もう少しと思うところで落ちるタイミングも絶妙。おまけに安い。

急いでも時間が貯まることはない

藤 井 則 彦

千切れ雲ちよつとくちびる尖らせた
山 本 昌 代
老いて尚ゴールの美学など口に
秋 元 てる

水煙抄鑑賞

— 10月号から

栃尾 奏子

中間色きらい原色派のわたし

柴本 ばつは

モノトーン私はここで呼吸する

真島 久美子

女はいつも女と戦っている。仕事も、恋愛も、たわいない井戸端でも。原色の羽を身に纏い、さあ今日も出陣。

一日を終え、私のためだけの私に戻ったら……。モノトーンの世界でゆつくりと深呼吸をしよう。

齢問わず女あやつる化粧品

小栢 こずえ

おっしゃる通り。今までどれだけの化粧品に翻弄されてきたことか。反省。

乗り換えの駅から雨になる気配

平井 美智子

駅とは人生の分岐点か。一本遅らせる？ 乗り換えなんて止めてしまう？ 色んな選

択肢の中、やはり乗り換えを決意する。まるでドラマのような一句。

思いやり嘘をつくのもありですか

巖田 かず枝

嘘はきつとつく方が辛い。義母は優しい嘘をつき続け、義父はその嘘を抱きしめて旅立った。正解も不正解もない。あったのは二人の愛。

人は皆物の命を頂いて

前川 善之

本当の断捨離の考え方だと思ふ。買ってから不要を探すのはやめ、本当に必要なものだけ。そして命を頂いているのだから、食べ切り、残さない。

手を合わせて「ごちそうさま」。

雲と遊ぶ痛みを少しずつ預け

神野 千恵子

病床の祖母を思い出す。お見舞いへ行くと、お迎えが来なくて今朝も目が覚めたからと笑い、日課の聖書を読んでいる。窓際のベッドだから、雲を眺めていれば一日飽きないと小さい私に言った。

天の声聞き逃すまい耳掃除

中島 一彌

神のお告げを受ける準備は万端だ。

また会える丸い地球だから会える

田中 ゆみ子

寂しがりやの人間のために、神様はきつと地球をまんまるにしたのだと思う。

次に会う日を信じ、前を向き歩こう。

よく光る蛍を胸に棲ませる

小林 若芽

ご存じ。蛍はきれいな川にしか生息できません。皆様の胸で蛍は生息可能ですか。目を逸らした方。心のデトックス。

三角がまるになるまで追いかける

東横 ますみ

汗掻いてかいて神さま振り向いた

吉道 あかね

そうだ。不可能と思えばそこで終わり。神様と目が合うまでネバーギブアップ。

幸せは二人で生きていることだ

津村 律子

実家の居間に高砂人形がある。ずっとダサイと思っていたが、近頃面立ちが祖母や父母と重なり、妙に美しい。

二人三脚幸せのお手本を見つけた。

時々はいい事も言っ酔っぱらい

中筋 弘充

だから今日は許してあげてチョーダイ。



追悼

嗚呼 高島 啓子さん

本 本 朱 夏

橘高薫風先生から私が引き継いだ毎日文化センター川柳講座へ啓子さんが来られたのは平成16年のことだったろうか。物静かで無駄なお喋りをしない、控え目な佇まい。京都にお住まいということも、啓子さんの

批判や風刺の精神もまた啓子さんの作品の特徴である。その川柳眼が結実したのが、第4回高田寄生木賞特選に輝いた次の作品だろう。

学校を覆う大きな病垂れ

霧囲気によく似合っていた。(後に本当は大坂のお生まれだとお聞きしたが)決して出しゃばったり、人前に立たず、時にそれを私はじれったく思ったものだったが、それらは私にはないもので啓子さんの長所だった。その講座で月に2回作品を見せて頂くようになって「おや」と思ったのは、物の見方が単純で平凡でないということだった。

啓子さんは昨年の秋の終りにすでに病魔に侵されており、病床のご主人さまを看護、今年の2月に見送られたことを後で知った。7月号に発表された作品も水のごとく淡々としている。決して乱れず運命を静かに甘受しておられたようだ。

湯豆腐の揺らぎていどの口答え
電話くらい掛けてきなさい千切れ雲

夫逝くおはようと言う人がない
ひとりぶんのレシピが少しずつ増える
牛乳を豆乳に変え余命かな

この2作品で私はたおやかな啓子さんの内に秘められた芯の強さと共に、清冽な泉をみたような気がした。

私が監修した『ことばの国の猫たち』には、啓子さんの作品が3句収録されている。
猫用の入口よその猫も来る
買猫は終身雇用正社員
私の隙間に忍び込んだ猫

川柳塔だけでなく啓子さんは京都の「草原」、青森の「触光」にも作品を発表されている。やさしい眼差しの中にも、鋭い社会

その句集がお気に入りだったそうで、その頁を開いて棺に納められたとお聞きした。

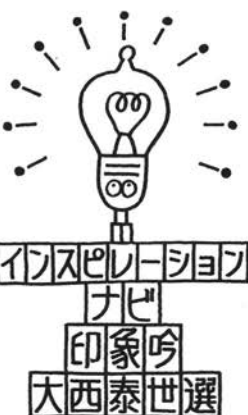
啓子さんが亡くなられたのは8月22日。ホスピスに入られて10日のことだった。
川柳塔9月号に最後の作品が掲載されている。7月15日までに投函されたものだろう。いのちの灯がまさに消えようという間際まで啓子さんは川柳と向き合っていたことに、私は感動している。

素手ですとまず見せておく裏表
朝刊の享年を見る癖がつく
猛暑なりはしゃぐテレビは消しておく
ニュースだけまだぶざけてはないテレビ

息子来て生きいきとする仏間
啓子さんが末期であること、ホスピスに入られたことを私が知ったのは8月19日夜のこと。寝耳に水だった。私は大急ぎで手紙を書いた。「啓子さん、ご主人さまにはまだしばらく待ってもらいなさい」と、半ば彼の世に引き込まれようとしている啓子さんに向かつて叫んでいた。(21日投函のこの手紙は結局、啓子さんの告別式の25日に配達されたという…) 啓子さんはご主人さま亡きあと、半年で後を追ってしまわれた。

私は退院後の体調不安もあって啓子さんのお通夜にも告別式にも参列できていない。竜胆の濃紫を思わせる啓子さんの静かな微笑を、なつかしく思い出している。合掌

平成二八年八月二二日没 享年七八。



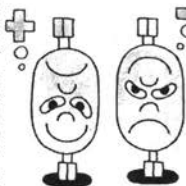
(投句223名)

次々とやって来た台風、直接の被害は無かったと胸を撫で下ろした方も多かったことでしょう。

しかし、それまでも

も高値が続いていた野菜などは台風や大雨、強風などの被害を受け、ますますの高値となつて食卓を直撃しています。

値段と相談しながら献立を考える大変さからちよつと離れて、ナビをこ一緒しませんか。



ズワイ蟹マナーモードで食べている

(評)蟹を食べるとき、思わず無口になつてしまう様子をマナーモードに例えるなんて愉快。

浄瑠璃の三昧が聞こえてきませんか
(評)聞こえてきませんか、と問われれば、

秋風に乗って聞こえてきましたよ。粋な三昧の音が…。

コンセントなんです人をつなげます

(評)人と人をつなぐコンセント、素敵です。身近な所から地球規模まで、いくつも欲しいです。

イチにイチ足してもやはりイチはイチ

(評)イチにイチ足せば何倍にもなつて効果が現れるはずですが、この場合、イチそのものの資質に問題アリかも。

家計簿をつけるとこんな顔になる

(評)黒字のときは目尻が下がったり、赤字になればそれがキツと上がったりしますよねえ。

定年の線は引けない農作業

(評)相手はお米や野菜という生き物です。手を抜けないのは勿論のこと、ハイここまでするなんて出来ません。

本音など見せない向きを変えるだけ

(評)ちよつと斜めにずらせたりするだけで随分と趣が違ってきます。相手からはこちらの手の内は分からないはず。

電源を入れると起上り小法師

(評)今どきのものらしいです、この起上

り小法師は。電源を入れないことには動いてくれないうのですからね。

唐辛子なめて怒っているのです

(評)自分で勝手になめた唐辛子でそんなに不機嫌になるなんて、知らない、と言いたくなつてしまします。

影武者が着々謀反する構え

(評)我が影のはずの影武者が、いつの間にか謀反を企むようになったなんて、コワイ話ですよええ。

引き算は苦手足し算だけに

五時からのぼくは正真正銘で

外交の同床異夢という握手

犯人は八十円のコロッケだ

並んでいるカープファンと虎ファン

滑りどめつけてこの世の地獄ゆく

あれこれと言う妻がいて恙無く

打つてよし投げて尚よし二刀流

趣味ひとつ掘れば掘るほど深くなる

羽曳野市

中川ひろ介

米子市

八木 千代

鳥取県

齊尾くにこ

唐津市

仁部 四郎

箕面市

大浦 初音

大阪府

畑中 節子

東京都

川本真理子

尼崎市

藤岡 りこ

大洲市

花岡 順子

松山市

宮尾みのり

藤井寺市

鈴木いさお

札幌市

三浦 強一

鳥取市

土橋 螢

河内長野市

黒岩 靖博

鳥取県

竹信 照彦

羽曳野市 徳山みつこ

にこにこいつも充電中ですの
富田林市 片岡知恵子

ゆつくりと白地図埋めて行く余生
下松市 有海 静江

高い無駄安全神話から廃却
神戸市 奥澤洋次郎

きっぱりと酒断ちましたあしからず
大阪市 江島谷勝弘

終焉はプラマイゼロでありたいな
尾道市 大本 和子

一株も持たぬ株価に気がもめる
高槻市 島田千鶴子

阿咩とはいかぬ仁王の照れ笑い
河内長野市 藤塚 克三

揭示板昇進組と都落ち
橿原市 居谷真理子

損得を考えていて出遅れる
札幌市 小沢 淳

反対のための反対くり返す
大阪市 大治 重信

それぞれがスマホに夢中皆静か
弘前市 高瀬 霜石

肝臓は無口土踏まずも無口
三田市 足立つな子

ギブアンドテイク負けておきます今回は
豊中市 水野 黒兎

逆立ちをしても無い袖振り難い
香芝市 大内 朝子

鈍感と敏感同じ屋根の下
唐津市 山口 高明

それはそうと二人並ぶとユニークね
奈良市 山本 昌代

降り止まぬ雨はないよと言われても
大阪市 高杉 力

福笑いに興じた遠い遠い春
堺市 坂上 淳司

逆さまにしてもやっぱり砂時計
大田市 中居 善信

四年後の予算泣いたり笑ったり
箕面市 内田志津子

運不運勝者必滅日々流転
大阪市 藤田 武人

半世紀以上迷って不発弾
尼崎市 清水久美子

家政婦が何を見たのかほくそ笑む
箕面市 廣島 巴子

笑いヨガやってみましょワツハツハ
沖繩県 高良 秀光

言葉が二つの意思にあやつられ
和歌山市 上田 紀子

どこまでも平行線で交わらず
島取市 岸本 宏章

投資家の顔は日毎に変化する
奈良市 宇賀 史郎

浮気ばれ落としどころを思案中
大阪市 津守 柳伸

一物があつて笑顔は崩せない
大阪市 津守 柳伸

悩んでも怒ってみても足りぬ金
河内長野市 穂口 正子

損得を離れたとこに友がいる
奈良県 谷川 憲

気苦勞な築地移転に手を染める
西脇市 七反田順子

尊敬しますこんな世に笑う君
奈良市 大久保眞澄

過去未来忘れ今だけ考える
笠岡市 藤井 智史

逆立ちをすると優しい顔になる
鳥取県 山下 節子

新婚と金婚にある誤差を知る
岡山市 永見 心咲

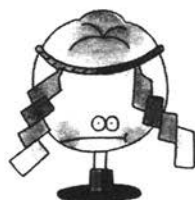
歌舞伎者ですが家計簿つけている
神戸市 山崎 武彦

S MAPを潰したメリーさんの貌
和歌山市 楠見 章子

同じもの食べて似てくるじいとはあ
大阪市 奥村 五月

改革に妥協許さぬ美人知事
五月

1月号発表 (11月15日締切)



(平本 勝彦 画)

柳箋に2句

『川柳雑誌』「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版
『麻生路郎読本』



A5版 514頁
頒 価 3,000円
(郵送料共)

目次

麻生路郎アルバム
麻生路郎作品「旅人」旅人その後の作品
麻生路郎文集・麻生路郎語録
麻生路郎物語（東野大八）
麻生路郎の人と作品
麻生路郎作品「福寿草」
麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
麻生路郎・葎乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201号

電話 06-6779-3490

川柳塔社

振替 〇〇九八〇—四—二九八四七九番

句会 燦 燦

九月句会を読む 岩崎 眞里子

台風はルール違反でやってくる

台風が耐えて男になつていく

台風が過ぎるまで猫抱いている

迷走・遅速に加えてUターン型まで、次々やって来る大型台風。耐えて打たれ強い人間になつていく…この場合は「男」ってことにおこう。猫も抱かずに頑張つていたんだから。

言い勝つてヒヤリ冷たい腋の下

鬱からの脱皮は目先変えるだけ

肝臓の形が徳利になつた

勝負も喧嘩もしなきゃいい。特に口喧嘩は、負けるが勝ちなのだ。林の中で空き缶が元気に根を延ばす…と覚えた鬱の文字が未だ書けない。目先を変えて脱皮しようと隣を見たら、徳利完司さんがいた。可笑しくて吹き出した途端、鬱が吹っ飛んだ。

児の病名裂いて捨てたいこのカルテ

落日の道に歪んだ影法師

ベランダに秋が正座をしる朝

神の手が欲しいと何度もあった。齢を重ねる程に涙もろく、我が子ならずとも胸が痛くなる。身も心もシャンとなる朝の冷気の中で、祈ることから始まる。元気で過ごせまうようにと…。

台風の中郵便物が届いてる

苦しくて歪む 嬉しくても歪む

病床のベンは命を走らせる

阪神大震災の時「一通でも届いて…」と、毎日葉書を書いた。それが避難所にも届いていて、郵便屋さんに感謝・感動した。今も災害の度に、苦しさの中で知ったあの嬉しさを思い出す。そして編集室には今日も、病床から命滴る投句が届く。

良子

洋

まつお

楓 楽

富美子

完司

ばっは

希久子

眞理子

万紗子

喜八郎

郁夫

みこせめ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

クラス会再会したが名が出ない
防空壕抱き合い以来会うなんて
マドンナがこんなになつていようとは
再会の希望相手はみなあの世
再会で愛の扉が開きます
巡り合えば手の届かないお人なり
賽銭を見た神様が無理するな
私には妻も子供もいてますし
L.L.がMを着たいと試着室
無理しよか大事とろうか悩む朝
無理しない主義です恋も仕事にも
語る夢無理もちよつぱり織り交ぜる
我が息子サインコサインとても無理
無理しても母は子のため命がけ
無理ですか地球平和な星にする

満寿恵 舞夢 いさお 公平 芳香 半銭 由一 勝弘 朝子 五月 美籠 大子 舞蹴 日の出 直子

無理言える友が三人いてくれる
竹を割る素敵な話聞きはれる
蒼天を飛行機雲が真つ二つ
列島の大地が割れる原発も
分けあつて命繋いだ8・15

部屋割りはアミダくじでと旅の宿
割り勘のルールで長いお付き合い
割り切れぬ気持ちはバツと忘れた
胸割つて話せばなんのことはない
胃カメラが探し続けている腫瘍
りんごむくネイルアートの娘の手元
川内伊方はらはらせる再稼働
病院へウイスキー置く見舞客
自転車でどいてどいてとけたたまし
はらはらとドキドキ恋の変化球
はらはらさせた次男に今はおんぶされ
はらはらと来年のため散る桜
はらはらとするほど妻は値切りよる

きやらぼく川柳会(鳥取)成田 雨奇報

母の日のぼたん笑顔で咲き誇る
簡単に覚えてはならぬ憲法は
梅雨空にねぐら求めて飛ぶツバメ
思い出す亡き夫思う十年前
川柳やる人いつも心は温暖化

一歩 廣子 安代 美世子 志津子 福貴子 保州 かりん 賢子 ゆみ子 里子 満知子 重信 シマ子 ぶりこ ばっは 昌紀 まつお

自分では厳しくチェックしてる酒
ミサイルの波の下ではお葬式
尻込みをしている僕を影が押す
知事さんも上手の手から水が漏れ
腹立てても仕方がないと親子です
紫陽花の褪せた姿も撮つておく
庭先に白い愉快な家が建つ
花見時亡父の鼓の冴えた音
鉛筆を削つて思う五七五
足重くいやとは云えぬ草繁る
誰だろう誰でもないで猫の声
筍のバラ寿し香るさんしょの芽
つややかな桃にと艶歌袋かけ
いつも笑つて話せば寿命白寿まで
年ごとにますます熟すおらの酒
不器用な夫の詫びは又ケーキ
まだ梅雨の入口なのに秋恋し
蛙鳴く声よ夜更けのひとり酒

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

悪知恵をたたき込まれたガキ大将
チョイ悪の面構えした好々爺
悪いやつほどよく笑い近づいてくる
目が悪く皆んな美人にみえてくる
国民も悪い陛下はお疲れだ

紀の治 桐子 恵子 正二 多美子 千代 登実枝 初枝 治代 日枝子 ひろこ 美草 美佐子 瑞枝 美智子 美穂 ゆき ゆたか 久芽代 玲坊 幹啓 重忠 野蒜

悪霊のお蔵いに要る酒肴料
悪人は善人面で町歩く

欲しい物有る時ババは拝まれる
人の背を拝んで済ます初詣

極楽に拝みたおして行つてやる
拍手の音もさわやか若い禰宜

拝んでも拝みきれない良い女房
心臓がストンと止まるよう拝む

親だけは拝みたおせる神さまだ
つけまつげ汗と涙で見失う

汗かきの汗は木綿のシャツが吸う
汗だくになつても田畑守らねば

汗かいておこう凍える冬が来る
人の為流した汗の爽やかさ

伏流水もこもこ踊る砂の舞
もこもこの湯けむりの中夢ゆらり

名作がもこもここと湧く枕
言い訳がAからZまで浮かぶ

押しボタン世界が終わるキノコ雲
紀の治

道子

悦子

重利

義人

公恵

清

紀美恵

三津子

和歌山三幸川柳会

武本

純子

碧

章子

寂子

道子

悦子

重利

義人

公恵

清

紀美恵

三津子

貴恵

照彦

美美子

完司

滋

龍枝

美知江

石花菜

芳光

くにこ

碧報

純子

碧

章子

寂子

トップから遠いが私マイベース
振り向けばだあれもいなくなるトップ

緩めない企業戦士のトップギア
就く方が就いてトップの座が光る

やつと得たトップの椅子が軋るでる
甲冑を揃えトップの座を守る

震災のトップニュースへ蟬の声
頂上に石積んで来る山開き

心には孤独な風が吹くトップ
玄関の靴にも夏休みが来た

決断が乱れないよう落し蓋
時どきは乱反射して蘇生する

反戦歌 晶子が詠んだ乱れ髪
決壊をしそう私の中のダム

乱筆を詫びてポストへ手を合わす
乱筆を詫びて返事を締め括る

そつとしておくにかぎるよ母の乱
乱れ髪趣くまに今日一日

乱世になればと傘を貼っている
乱調の曲が若者引きつける

ひと言を漏らしそこから妻の乱
夢だけは待たず迎えに行つてやる

待っているだけでは開かない扉
風変わる予感じっくり刻を待つ

月下美人今宵咲きますよと電話

明子

美羽

富香

みね

起世子

昇

幹子

義泰

昭枝

和子

明子

美羽

富香

みね

起世子

昇

幹子

義泰

昭枝

和子

八重子

ひろ子

義雄

知香

絹子

准一

幸子

悦子

次根

敏照

みつ江

ダン吉

保州

川端 一步

読み終えて心を満たす囲み記事
照明を落とした方が生きやすい

風よ吹け難民の子へ飢餓の子へ
たましいは髪の前まであり生きる

ほんものの鬼だやつぱりよく笑う
母さんの自慢あなたを産んだこと

丁寧に生きて命を使ひる
根を張つた大樹は苦勞語らない

黄昏と言つた八十路は夕映えじゃ
灯台が一つあの日のまま消えぬ

修

哲男

美知江

すみ子

正博

和子

瑞枝

重忠

三津子

妙子

選

古今堂 蕉子

風でした心掴めぬ人でした
すれすれの君のジョークが脇をつく

過去の罪並べて妻の訴状来る
おい影よ腰を曲げずについてこい

ゲラ刷りの生命線に朱を入れる
金欠は不治の病の家系です

落ちそうなアイスを孫に持たされる
そりやあまあ遊びの好きな蟻もいる

人数に入っていないかも私
まあいいかちよと若いし美人やし

選

妙子

三津子

重忠

瑞枝

和子

正博

すみ子

美知江

哲男

修

芳光

ふりこ

茶子

一聴

眞澄

哲男

耕治

まつお

知香

正和

宵待草なんとロマンのある呼び名
宵越しの悩みを捨てて待つあした
熊本産西瓜見る見る売り切れる
小玉西瓜ちょうどふたりで良いくらし
病室の西瓜きれいな嘘を聞く
丸ごとの西瓜が威張る冷蔵庫

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

ウインドーも真夏に似合うサングラス

老眼鏡私の強い味方です

原爆忌眼鏡はずして空を見る

迷路抜けや々と眼鏡が澄んでくる

美しい涙が見えた双眼鏡

人生の裏を見てきて眼鏡拭く

亡母恋し極楽覗く眼鏡欲し

海砂を採って魚が遠くなる

内面を磨こう今日も砂を吐く

風紋は風の吹きよで生きて来る

破壊した大仏郁夫の絵に残る

玉砂利を踏んで祈りの八・六忌

廃校の砂へドラマが埋めてある

砂を掴んでいたのは負けず嫌いです

十年後魚はすべて養殖か

魚偏老いの脳トレ眠くなる

水族館の鰻に危機感はない

よしこ あき子 隆昭 美枝子 智三 日出男 規代 笹舟 幸子 千代美 栄香 弘子 慶子 寛 半徳 京子 淑子 鬼焼 蘭幸 一徳 汎美 輝恵

お魚に産地証明いる世相
山奥の海鮮料理手が出ない
クレヨンで描いた骨のない魚
小休止まだまだ続く稚魚の群れ
ポケモンGOババがこっそり遊んでた
夜空咲くなぜか悲しい大花火
無器用にころがっている石一つ
まんまるい月を今宵は母と見る

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

褒められて薔薇は一気に咲きました
薪能いのち吹き込む囃子方
どうしたのきのうの窓が開けられぬ
加齢臭洗い流した露天風呂
猛暑日の昼は冷たい梅茶づけ
大型のネブタにヤンヤの拍手わく
飛び出した生まれふるさと自慢する
無罪です濡れ衣晴らす落ち林檎
裏窓に今日の予定が干してある
車窓から写しても絵になる棚田
折り紙の孫が私へ銀メダル
それぞれの器に生きて子らを褒め
天窓の月が見ていた空なみだ
中途半ばな囃子でいつも生きている
登山囃子だんだん山が笑い出す

敬子 宣之 昭紀 笑子 歩美 厚子 比呂子 史子 慕情 夕香 ひとし 重虎 小とみ 風来坊 一呑 則彦 のぶし 隆樹 花匠 黙人 柳子 芳生

母さんのポッケにいつも褒め言葉
わだかまり捨ててさっぱり秋の空
北の大地ネブタ囃子が跳ね狂う
この暑い夏を脱ぎ捨て一つ風呂
お日様がまだ頑張れと背中なぜ
定年後ローカル線を走ろうか
旧正の名残り嬉しいマッコ市
内科外科カルテの数を自慢する
肩の力抜けと化粧の石地藏
肅肅とできぬ総理の四面楚歌
人生は平等ですかあみだクジ
里山の茶毘は悲しき小糠雨
一帳羅覚悟を決めた夜が舞う
サイダーの泡が吹き出す夏祭り
句が浮かぶりんごが熟すよに浮かぶ

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

井蛙 京子 吞舟 きよし 初枝 龍馬 ふさゑ 花峯 氏加子 一花 霜石 洋子 和香子 美鈴 規子 洋々 金祥 野蒜 茂登子 無限 地佳平 茶人 節子

無味無臭みえぬウイルスには勝てぬ

性格はウイルスばりの手強さだ

ポール

多い目の空気で秋を待つベダル

公子

泣くじやない爆げと棺が揺れ

人生を簡ちよりに越すバーはない

一粋

お見舞のメロン空気を読んでいる

弘委智

貧乏神なぜかわたしが好きらしい

方言「簡ちよろ」は簡単な意味

好きな人小さな傘を用意する

実

つぶやきが燥ぐおんなと手をつなぐ

城北川柳会(大阪)

近藤

弱いけどそれでも私応援します

節子

簡ちよろでなかった帰農した誤算

百均の空気が合つてきた無念

正報

鯛雲空気が美味しい過疎に棲む

集一

燥いでも駄目よあんたの妻じやない

沖繩の土地は怒りの顔でいる

和夫

今日の感謝全て並べて折り終え

たもつ

蟹味噌を食べても効かぬボクの脳

尖閣で触発誘う船が居る

一步

土の香もしない野菜を今日も買う

美智子

台風と知らず風鈴また燥ぐ

いい笑顔君が好きだという空気

寛昭

調理器具土鍋一コで冬過ごす

榮子

政治家の本音はいつもオブラート

苦勞人居るだけで好い座の空気

義昭

人生の宿題見付けやり直す

博

なぜだろう亡夫ちつとも夢に出ぬ

残り五秒ひやひやさせたレスリング

北舟

大切なもの失つた出来ごころ

賢子

簡ちよるとなめてた妻が牙をむく

やる気言うだいじなものは失くさない

武彦

台風の被害に凍てりつく農夫

克己

通帳の残とせり合う余命表

診察券失う老母を叱れない

修

世渡りへ空気のよめる丸いひと

朝子

美人妻ウイルスにまで惚れ込まれ

パト見るとなぜかひやひやしてしまう

郁夫

終章のペンまだまだを追いかける

富子

二枚舌なぜか一枚見当たらず

はんやりとしているだけで日が暮れる

勝弘

愛想笑いわたし疲れ切ってます

理恵

なぜと言う疑問追及する科学

土臭い武骨な友の頼り甲斐

高志

習うよりまず失敗をしませんか

ダン吉

容赦なく鏡は老いをつきつける

少年が十指で開ける未来の窓

満洲夫

あふれ出る活力枯れるひまもない

ふりこ

平和でスジジとバアバと膝の猫

長い橋ひやひや渡る湖上駅

野鶴

わたしまだ生きるつもり医者通い

妙

はしゃいでも所詮は妻の掌の上だ

土入れて燃えた球児の夏終る

麗

串かつの屋台でまでも紳士面

完次

方言で燥ぐと里の父母浮かぶ

無になれと諭される萩の寺

志華子

伸び盛り脇の甘さに目をつむる

柁子

私になぜ冷たいの神仏

老いてなお夢失わずそこが好き

杵香

見本なら出来るが手本にはなれぬ

紀雄

オレオレの名の子はいない悲しからず

うちの孫何言い出すかわからない

千恵子

弁明の言葉さがしに疲れ果て

比呂志

うわさ話ウイルスよりも恐ろしい

ひまわりがお日様に媚び頭振る

あさ子

聞き役の位置で恋を習ってる

柳弘

ウイルスを泡盛のんで消してやる

一輪車吊り橋渡る再稼働

星雨

衣食住足りて何かに飢えている

和夫

今月も諭吉はしゃいで出て行った

重忠

和

まだましは一体誰と比べたの

和夫

真理子

衣食住足りて何かに飢えている

和

まだましは一体誰と比べたの

和夫

枯れること知らぬ根つこのたくましき

世の習いなどは知らずに母となる

はやる気を抑え抑えてまだ飛ばぬ

あーしんどこの先一緒に暮らすのか

親がまだ居る古里は温かった

枯れた木にもしや緑と水をやる

人生の節目で悩むまだとう

立ち枯れの一本松も意地がある

習うより教える方に要る根気

いらいらも枯れ声のジャズほっとさせ

枯れてる大地しのび寄り来る温暖化

立ち飲み屋脚がつかれて店を出る

疲れても走り続けた猫ひろし

まだまだと一升瓶の封を切る

激痛の疲れのとけたデスマスク

まだ生きる二足歩行を糧にして

枯れ草に子孫を残す意地がある

まだ間に合うドローンで彼女追いかける

ライバルに疲れた顔は見せられぬ

南大阪川柳会

津守

柳伸報

スーパリーの買物苦手ツケ効かん

計算が苦手な割に金を貯め

以心伝心敵も苦手を心得る

苦手でも人のお世話は引き受ける

惠美子

國治

甚之市

すみれ

倫

博一

史郎

將文

薫

敬子

賛郎

義男

崇明

盛隆

朝子

美智子

萌子

優

恭昌

忠昭

篤

柳伸

タカ子

天敵を放ち野菜は無農薬

天敵の蛇を睨んでいる蛙

襟垢が仕事の鬼を思わせる

捨てきれぬ手垢のついたコンサイス

故郷の海へ原発の垢を流すなよ

熱爛と熟睡が消す今日の垢

売れ残り手垢のついた値札見る

垢ぎれた母の皺の手宝物

一日の垢を清める日記帳

手垢付き次第に馴染む広辞苑

汗まみれ感謝してます作業服

政治の垢たっぶり溜める永田町

やかましい注意する君やかましい

一言いえば返って来る小言

活断層の上でどきどき生きている

無死満皇両目つぶって見えています

窯出しのこの一時がたまらない

正直な鏡どきどき丸写し

週刊誌火をつけ煽るスキャンダル

ご先祖も孫達も去る盆の後

やかましい軒夫婦でハーモニー

保育所の騒音ぐらゐ我慢せよ

メダルメダルとやかましいすぎる日本

怒鳴ってた父が恋しい盆の墓

やかましいお方だ寂しがりだろう

博

祥昭

修

恭昌

シマ子

和雄

弘子

更紗

国和

東風

なぎさ

たもつ

昌紀

ルイ子

あや子

栄子

克己

弘委智

直子

実

あさ子

一歩

勝弘

志華子

楓楽

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

よく採める国だ十三億の民

いさお

北舟

公子

円笑

弥生

泰夫

照子

美春

知栄

福子

篤子

哲子

紀乃

牛延

肇

美津子

葉子

弘之

ふりこ

英旺

朝子

宏子

欣之

スイーツを食べて談笑雨の午後

三回目誰も聞かない苦心談

ベタ記事の美談に心洗われる

飲談のグラスワインがよく喋る

びりびりと古傷痛む低気圧

ツアアの付けびりびり痛む日焼け肌

唇が乾くと本音言いきり

回顧談いつしか年代ずれてくる

神経が痛む小さな嘘について

御近所へちよつと相談戻らない

税関にびりびりしてるパスポート

女というクッション武器に生きてます

冗談の中に小骨を入れておく

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

洗濯物取り入れたたみ帰り待つ

通学路覇気がしたたり落ちている

鯛の啼いて変った風の向き

校門の「おはよう」字らの「ございます」

前触れなく里から姑が来てあわて

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

台風を洗車がわりにするベント

乾涸びた脳へビールが浸み渡り

台風禍日本列島浮き沈み

光久

かずお

保子

正彦

満子

忠子

則彦

求芽

千代

万紗子

洋志

文代

義昭

實

蜂朗

高明

四郎

節子

(飯まみ子)

遡行

三樹夫

台風の目になる異論ひっさげて

抜いた草乾かしてからエコ袋

働きが悪い爪がよく伸びる

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

三食に感謝グルメを戒める

嘘つけずホントの事も言えずいる

大いなる期待幻滅待っている

神様がいるなと思う生かされて

亡き母に出会えたような水鏡

言の葉が荒む大和が消えてゆく

老いの趣味延命効果ただ信じ

八十の我に役ある幸せよ

気を付けていても認知がしのび寄る

冷豆腐グルメの旅を終えて食べ

猛暑の席に熱いお茶を出しする

食べさせぬ訳にもならずメタボの子

吊り橋揺れる明日が揺れるわたくしも

非は非だと言えば男が上がるのに

冠のような帽子に負けそうだ

庭先の花火家族の輪をつくる

考えの無さを帽子に見透かされ

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

鍋つつく家族揃った夕ご飯

美千代

雅美

かつ子

陽子

和代

亜矢

章子

水樹

美恵子

和郎

和之

昭子

菜美

安子

みち子

陽子

葵

華蓮

遊子

三郎

公弘

大輪

ほか

おでかけの虫騒ぎだす秋になる

わたしの中の鬼がわたしを騒がせる

玄関の靴あっち向きこっち向き

ひまわりさんびっしり未来見すえる

あの涙どうした通夜だ法事だと

霧閉気の静けさあの人が来ない

妻よりも孫の手痒いとこを知る

闇の重さ掻き消す孫の手にする

千手観音孫の手なんか用がない

団栗もたまには池で遊びたい

団栗が転がり池に水がない

ポケットの中でどんぐり夢を見る

どんぐりの中の一人で居る気楽

どんぐりに逢いたくて行くハイキング

団栗の仲間まとめるドンがいる

父がいるだけでとても温かい

青空にとっても良い事予感する

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

男気を演じ続けるのは飽きた

月とスッポン無茶を承知のプロボーズ

スケジュール僕の足では無理でしょう

新都知事台風の目になりそうだ

飽きたのか飽きてないのか居る二人

この道でよかったのかとふと思う

小雪

あきこ

大輪

弘子

克子

富美子

愿

寿子

紀子

よしこ

准一

日出男

紀久子

保州

めぐみ

徑子

秀子

茶子

盛桜

茶子

和子

弘子

すみれ

綾子

無茶なこと知つてはいるがそつと言ひ

無茶苦茶に言うけど悪い人でない

鯉のほり竿の先では泳げない

新婚の嫁のいびきに飽きました

夭折の息子かとふと見上げた背

月見草咲いた昔をふと思う

ローン組み三日で飽きた芸術品

大災害に今ある命ふと思う

飽きたられた男が焼いている秋刀魚

台風に薬屋根はがれ泣いた日も

あの記憶ふと蘇り苦しい

夏野菜のダイエツトに飽きてきた

飽きるほど食べてみたいな松葉蟹

彼岸花ふと母の顔思い出す

幸せか平穩な日にふと思う

地震津波火山台風お静かに

台風に秋波を送る枯れたダム

はびきの市民川柳会(大阪)永田

損ばかり何時も理性が邪魔をする

絵日記からはみ出し続く空と海

逆上がりやと出来たと弾む声

お邪魔しますと靴を揃えた四才児

教養が邪魔するなんて言うわ

目の上のたんこぶが居て今がある

ゆり子

実満

蟹郎

文道

孔美子

八重

友美

満

小鹿

重忠

照彦

かおる

みさ子

京

鈴

拓庵

恒

章司報

美代子

ひろ介

いさお

ちづる

壽峰

アヤ子

ぶぶ漬けでお邪魔な客を追い払う

はみ出した自転車避けて歩いてる

握手する二人の横で邪魔をする

金銀銅涙の壺は満ち溢れ

眠れない蟬が邪魔する昼下がり

逆恨みしたわたくしの浅はかさ

邪魔されず自由に生きる今がいい

宿題をしてない夢見とび起きる

今と昔考え逆になってます

逆まつげ一本ボクに謀反する

愛猫が夫婦喧嘩の邪魔をする

レスリング最後で逆転金メダル

先送り山程積んである日本

はたる川柳同好会(大阪)水野

薄味になさいと主治医ご託宣

味しめる笑顔生み出すお盆玉

味しめて孫が寄り付くお盆玉

切れ味のよいカーブ投げ完封し

生き方に人それぞれの味がある

味かげん小皿にちよつと母おぼろ

老いた日々二人で探す旅が増え

炎天下信号待ちで陰探す

ボケモンより探してほしいうちの猫

見当たらぬやたら置き場所変えるから

かつ美

さくら

一文

美喜

千鶴子

高鷺

喜久子

フジ

雄太

みつこ

洋一

真一

章司

黒兎報

勝

郁子

信男

柳童

桂子

守啓

長一

奈津子

容子

久子

プレゼント探し小さな胸はずむ

こつこつと鳴る靴はいて食事会

こつこつと歩けばいつか目的地

車座に並んだリユック羊雲

ちぎれ雲一つひとつが友の顔

黒砂糖互いに入れて仲直り

川柳大阪

山崎

珠生報

こだけの話あるけどどうします

せがまれて孫には甘いジイとバア

せがまれて生前贈与サインする

新品にしてよとせがむボクの脳

せがんでも何も出ませんノーマネー

この辺でせがんでみよう秋はそこ

遺言を巧みにせがむ後妻業

本物のビールにしてよ誕生日

紅葉の色を絵の具で出してみる

紅葉を眺め気になる柿に栗

紅葉より真っ赤真っ赤にカーブ燃え

温暖化年々色褪せる紅葉

見栄を張りギリギリの色で咲いている

ギリギリの服を着てますしんどのわ

花金で浮かれ駆け込む終電車

正子

純子

黒兎

春代

順子

美佐子

勝弘

武臣

志津子

堅坊

紀雄

福貴子

まつお

温子

珠生

満知子

(鈴)いさお

芳香

俊雄

かよこ

美世子

傾いた夕日農夫の背を染める
熊本城脚一本で耐えている
傾いた夕日ストンと落ちて秋
傾いた家に天女が嫁に来た
傾聴者ボランティアには向かん僕
飛んで行く弾道ミサイル西東
世の中を狂わす政治家多すぎる
喧騒を忘れた都会盆休み

川柳塔まつえ吟社(鳥取)相見

柳歩報

克己 一步 朝子 和功 司 照月

生き生きと大きな夢を運びます
さすがだな好機を運ぶ鋭い勘
運ぶこと持ってあげるが持つてくれ
ランドセルががんばる気持ち運んでる
満員のバスで座席を譲られた
雑種です特別な主義ありません
特別に何も無いけど今でいい
特別に今朝のコーヒー旨いこと
九回裏見上げてアアホームラン
逆転の構図に開脚前転
人生は逆転劇と登り坂

ちえこ 左余 俊子 ひすい 昌枝 桂子 ゆき ひふみ 注湖 芳山 幸

和の中に居たい私に北風が
わたくしのストレス食べる彼が好き
無理無茶を平気で通すデカイ国
ストレスに胃や心臓をかじられる
厄介な人には折れて平和主義
平和だな犬がおしゃれをして歩く
山野草煎じ我流の健康茶
自由主義はびこり消える和の美德
和洋中一番好きなお味噌汁

葛子 幸安 敏子 雅女 一粹 一瑤 弘子 茶子 節子

秘めた恋戦中乙女ぬるくない

幸子

捕まえたつもりが穴があいていた

あきら

そよ風を天国と呼ぶ老の夏

かほろ

ぬるいまままで人生が終りそう

文子

逆転は今か今かと見るテレビ

久絵

解約の方は手続き煩わし

哲男

ぬるい風いやな気持ちに乗った

紗季

特別の鼻がボキンと折れました

美智子

血の滲む努力に神が金メダル

稠民

ぬるいけど何とも言えぬ心地良さ

妙子

逆転の珍味類つべたよく笑う

とも子

少年の希望の星よみがえれ

真由

やる気ない時ほどぬるい返事する

邦代

大逆転ライバル越して困ってる

草庵

元氣よく挨拶交わすランドセル

勇

ライバルがぬるい心を突いてくる

博子

八月のストレス癒やす小糠雨

草庵

挨拶のトーンが決める出発度

開子

ぬるめでもこの愛長く続きそう

瑞人

一輪の花が迎える無人駅

草庵

お喋りに心が晴れる自然業

幸子

ぬるい気をぜんぶまとめて味噌炒め

孝子

心地よいストレス感じする披露

完司

魅力した輝く演技リオ五輪

照代

うとうとして死んではならぬぬるい風呂

弘充

仲直りできぬ無言の背を見つめ

重忠

リオ終了東京までは生きてやる

美智子

ぬるま湯にさあ輪の外に飛び出そう

涼子

公演

公子

ブラザ川柳(大阪)

善輔

熱心にたくさん折る神迷う

輝山

美恵子

天翔

槐原

弘光報

少年の一途ボールを蹴っている

雪代

公演

美恵子

槐原

弘光報

熱心と笑顔両立させてみる

柳歩

公演

美恵子

槐原

弘光報

両親の苦心を運ぶ宅配便

柳歩

公演

美恵子

槐原

弘光報

公演

柳歩

公演

美恵子

槐原

弘光報

公演

柳歩

公演

美恵子

槐原

弘光報

常識を越えた頭脳がノーベル賞

お日様が沈むと夜長虫の声

誘われるうちが花よと追ひ出され

面影を偲んで盆の迎え火を

お願いよ叱らないでと虫がいい

秋風に誘われ友とグルメ旅

日生のおばちゃんんと御無沙汰に

夏休み孫に誘われ飛ぶ諭吉

亡父からの誘ひ断り母元氣

騙してません金が増えたと誘ただけ

義手義足晒して挑むバラ五輪

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

台風でハウスはがれた日の悲劇

台風的眼に飛び込んで動けない

台風も梨の食べ頃知っている

孫台風過ぎてしまつて味気ない

かみさんの台風ぐらいへっちゃらさ

台風が豪雨を連れて狂いだす

児の仕草たかがと見てはなりませぬ

救急車たかが五分を待つ長さ

くそじじいたかが孫だが許せない

失敗はたかがと軽い氣持から

たかが二本されど抜け毛だ秋がきた

政夫

久美子

五月

清乃

和代

正子

篤

悦夫

一彌

修

淳司

形見分け忙しいから行けません

たかが夏思わぬ酷暑疲れ果て

みそ汁とぬくい御飯のうまい国

相性のよい嫁が来て家繁昌

焼酎と相性が合う今日も会う

相性は夫唱婦隨でまだ続く

らしいという尻尾を付けて飛ぶ噂

漏れたらしい針の穴からあの噂

あやふやならしいの三字謎だらけ

誇らしいメダル世界も驚いた

三歳は憎まれ口もかわいらし

女らしいどこかに捨てた言葉です

あほらしい選挙合区はやめなさい

長柳会(大阪)

辻村

ヒ口報

たつぷりの思い出誘う遠花火

夢でいい諭吉たつぷり祇園茶屋

石頭融通きかぬうちの人

石頭融通きかぬうちの人

広告のおせちに焦るカレンダー

初盆は声を荒げて遺産分け

高い服お似合いですと試着室

大事な子甘く育てて裏切られ

常識も時代の流れ移り行く

孝代

星空を売り物にする山の宿

野蒜

祐子

石花菜

醉芙蓉

茂夫

妻子

完司

由紀子

次男

康子

玲子

瑞子

鬼一

大事にしる俺は年金産む機械

甘言に誘われはまる蟻地獄

女房へ向かつて投げた紙コップ

近海で起きるな国の一大事

図に乗つてルール無視すりや命取り

常識を超えるドラマも秘め夫婦

常識にミサイルを撃つ北のドン

常識がつまずき迷う多様な世

酔い心地とても無駄とは思えない

川柳塔さかい(大阪)

村上

玄也報

お茶ぐらい自分で入れて飲んで欲し

九ちゃんの星ちかちかと永さんを呼ぶ

良い星に生んでいただき慕参り

星ついて値段上がつて味落ちる

潔く燃えつきたのね流れ星

哀しいねそこまで言うかワイドショー

哀しみは喪服の袖に隠してる

また飲もな終の別れになろうとは

星まがい八尾発着の飛行燈

ミシランの星の向こうに飢餓の国

あの頃は星を見ながら夢も見た

人が人計る哀しい示談金

星空を売り物にする山の宿

直樹

ともこ

正博

隆彦

たけし

正美

淳司

辰男

和子

さくら

八千代

五月

永久

ゆみ子

清

ひろ子

敏治

妙子

誠一

月子

俣子

和夫

あほらしいと星が見ている夫婦愛
 厄介な人だが好きで見ています
 三ツ星よりもいつも身近な母の星
 カルテ見て笑顔がくもるデリケート
 ジャンプしてタツチ出来そうの星
 哀しみがじわり涙の栓を開け
 期末来て星取表に胃が痛む
 西空の星をアナタの星と決め
 霞むビル沿道冬のデイスブレイ
 満面の笑みで遺影は悲します
 中天の星父と決め母と決め
 厄介をかけて済まぬと姑寝つき
 厄介な目に遭うただけ強くなる
 見栄張って人は哀しい嘘をつく
 肩書は偉そうだけ電話番
 さすがプロ星の備考に二十年
 何事も杓子定規で小うるさい
 最後まで残って厄介背負い込む
 満員ではあちゃん男トイレ行き
 核実験の滓がじゃばんと日本海

高知川柳社

小川てるみ報

唯教 佳子 ヨシ枝 大造 澄空 素頓馬 憲 みつ江 みつこ 時雄 扶美代 シルク 若芽 好 憲彦 富夫 玄也 世紀子 健吾 天笑

子沢山ジャンプしているカッポー着 哲史
 風切ってジャンプ沙羅ちゃんいい笑顔 千鳥
 バラリンピック義足でジャンプする選手 圭二
 川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報
 赤色もほどほど混せて服選び 健二
 千鳥足月もゆらゆらついて来る 柳明
 とめ焼香刻みでやって愛煙家 修平
 ほどほどが解らぬいじめ止め刺す つな子
 たいそうな血筋じゃないが絶やせない 初音
 煙に巻くおとこが憎い腕の中 紀華
 賞味期限過ぎても齧る親のスネ 紀恵
 テレビでは皆美味いと言う不思議 雪菜
 絵本読み主人公にもなる自由 りこ
 負け続け六甲おろし唄えない 花門
 ドーナツのように丸くて味のある男 比ろ志
 三世代三日夜がいい旅路 正和
 加齢ですわかつているが心折れ 洋子
 名月を鯉が波紋で笑わせる 靖鬼
 満中陰遺影の兄が笑う泣く 祐康
 人生は演歌の中に浮き沈み ヨシエ
 かあさんに卒業なんてありません ひとみ
 生前よりも遺影になってよくしゃべり 純
 まだ続く終着駅の見えぬ旅 和子

ソプラノで演歌を歌う声楽家 宏造
 片思いどちらも年を取ってくる 耕治
 酒女雨と涙があり演歌 見清
 今のとこ閻魔私を忘れてる 哲男
 ほどほどで止めていつても悔いている かずお
 ほどほどの偏差値ですが美人です 歌留多
 続編はちがう私になるつもり 美籠
 西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報
 膝枕あなたのためにあけてある 順子
 情報の洪水がぶり溺れそう りこ
 過去形の恋がうごめく鰯雲 晶子
 仕方ない弱気の虫を飼っている 紀華
 好きじゃない付け入る隙のない男 盛夫
 手の内は読めているけど付け入れぬ 恭子
 セールスが息子に似ていて付け入れられ みよし
 お盆玉目指し孫来た夏休み 正和
 投資話付け入ってくるカタカナで 和宏
 御の字と思っけていても欲がでる 敦子
 大病もせずに元気で飲んでいる 勝弘
 年金を達者で貰いもう米寿 哲男
 歩ける日必ず来ると今日もりハ 千賀子
 妻は留守おでんにお酒御の字だ 宏造
 大掃除論吉見つかりやる気だす 宣子

きつとしたあのまなじりは決めている
 時によりきつと鬼にも仏にも
 コロンブスより原住民が先にいた
 わが余生どんぶり勘定して生きる
 お前もか巨峰の種が無くなった
 迷ったら森の空気を吸いにゆく
 障害をバネに生き抜くアスリート
 うろこ雲不気味に見える今朝の空
 大発見右は左になれませんか
 発見が治療へ続く扉開け
 恐竜の化石発見夢見る孫
 へそくりをさがし見付けた安堵感
 発見の旅と思えば日々楽し
 まだ涙出るからきつと生きられる
 ええとこがひとつあったらいいです
 きつと来るさけて通れぬ時が来る
 約束のきつと果さず友は逝き
 きつと泣くメダルの画面何回も
 煩惱の付け入る隙のない写経
 路地裏で猫と一緒に秋刀魚焼く

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦報

恥かしい態度をとった思い込み
 企業戦士の仮面をはずす終電車

じろう
 わこ
 茂
 哲子
 弘子
 淑子
 キヨミ
 みつ子
 美津子
 浩司
 利子
 武臣
 いわゑ
 千代
 ひとみ
 光子
 洋次郎
 邦男
 秋果
 靖夫
 満子
 堅坊

あれこれと相手に合わせている仮面
 乗り遅れ命運分ける墜落機
 バラ一輪ふと目が走る坪の庭
 寝たきりの足が大地を恋しがる
 残照へふと立ちどまり今日を消す
 口紅で夜叉と仏を分けてます
 家の中足手まといはお父さん
 諦めが良いと人生楽しめる
 歳重ねふと立ち止まる事多く
 喋ったら仮面の下がすけて見え
 仮面はずし私に還る仕舞風呂
 十五歳仕種に女ふと見える
 見てはならぬ仮面の下にある素顔
 運命を分けた女の肝っ玉
 揺れ動く心を癒す童歌
 分けること出来ず丸ごとあげました
 足腰を鍛え老後を謳歌する
 横顔にふつと和める妻の笑み
 ひたすらに歩き続けた岐路迷路
 仮面脱げばみんな優しい人の顔
 後期には中性になる夫婦です

八尾市民川柳会(大阪)土田 欣之報

贅肉をつまんで秤とにらめっこ

求芽
 肇
 勝弘
 (永)玲子
 歌留多
 美佐子
 健三
 則彦
 (若)玲子
 見清
 美智代
 黒兎
 久子
 正彦
 千鶴子
 瑠美子
 健二
 真理子
 ヨシエ
 武彦
 葉子
 朋子

喜怒哀楽地下で絡まる彼岸花
 三日月で野暮な男をまつ二つ
 トレモロの調べ奏でる秋の雨
 足許を庇い合う杖老いの坂
 水遊びスズメ奏でるカルテット
 贅肉も魅力の一つと語る妻
 女偏崩す私の中の女
 筆勢は確か急所を外さない
 いじめつ子程度知らずで怖くなる
 満天の星が奏でるノクターン
 仲の良い家族風まで譲り合う
 美しく奏でる人間の和音
 体内を吹き荒れる私の挽歌
 秋宵を虫と奏でるピアノリスト
 四半世紀七席巻カーブ燃ゆ
 大粒を転がす負けん気の小粒

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

寸借というから自腹きつたのに
 もう一寸鴨居高いと助かるな
 夕焼けに余情を添える童歌
 夕焼けて今朝の決意をもてあます
 背泳ぎで夕焼け雲を見た部活
 皆スマホ車窓夕焼け独り占め

常男
 慶子
 高鷺
 寿之
 加央里
 耀一
 森子
 仁
 安男
 壽峰
 千里
 かこ
 恵
 清
 紀雄
 欣之
 理恵
 舞夢
 捷也
 昭
 恭昌
 公平

悩みごと真つ赤な夕陽飲みこんだ

日の出

朝焼けは巖か夕焼けは感謝

すみ子

夕焼けの何処かに亡君はかくれんば

志華子

赤とんぼ夕焼け空を飛んだから

眞澄

夕焼けの絵になる燃えた水平線

照子

キンモクセイ弾けて秋の香を放つ

満作

彼岸花咲くと弾ける旅ごころ

桃花

爆買いもパブル弾けりや閑古鳥

和夫

姥ざかり喜寿のいのちを弾ませる

楓楽

おばあさんが弾け楕円形になる

義

弾けそうハートに溜めている一途

希久子

わだかまり解けて和音が弾けてる

弘子

仲間から弾かれ他所の空気知る

敬子

100メートルボルト弾けて3連覇

紀子

性善説信じて生きて来た轍

集一

高齢者エアコン効いたジム通い

げんえい

年金を増やす努力も空廻り

善之

メダルなどないが子がいる孫がいる

富子

じわじわと老いの怖さが身に沁みる

みつ子

尖閣にじわじわ伸びる赤い舌

浩二

じわじわと減るのお金も体力も

蕉子

六甲川柳会(兵庫)

市坪

武臣報

寝てみますもう一度見たい夢だから 千賀子

人妻を主張している薬指

盛夫

子育てで初めて気づく親の恩

忠貞

懐メロを聞くたび青春を引き寄せる

弘

舌鼓妻の料理にアンコール

正彦

アンコール衣裳新たに舞台踏み

英子

アンコール調子に乗って飽きられる

芳江

アンコール曲思い出たどる青春譜

加寿子

アンコール煽てにのつた一気飲み

敏夫

終戦日千人針を虫干しす

洋一

年ごとに増える薬に目が回る

逸郎

医者通い増えて薬が山をなす

浩司

着せるのも着るのも重い義理の恩

洋次郎

先生より親が出しやばる謝恩会

茂

背負われた師の温もりは忘れない

じろう

今さらは田舎へ住めぬ都会の蛾

道子

お人好し都会の渦に巻きこまれ

弘子

都会では空地になるとパーキング

博史

故郷をいつも気にしている都会

利子

派手な服衝動買いもまだオンナ

文香

大阪湾「つ」の字になった大都会

和宏

ピカピカのネオンに街はいつ眠る

和郎

都会つ子ビルの谷間で見える火花

美恵子

このご恩忘れませんとすぐ忘れ

美穂

喝采の嵐に幕が降ろせない

武彦

川柳ねやがわ(大阪)

籠島

恵子報

無給にもいとわぬ汗のボランテア

仁

廻る鮎天性の底力

壽峰

絵手紙の葉っぱ一枚おきどころ

かすみ

途中から割り込んでくる話好き

美江

逆境へ途中で折れず前を向く

賢子

脳味噌をのぞいてみたい北のドン

朝子

敬老と言つて檣山バスに乗せ

郁夫

残念だった思い出尾ひれつてくる

弘一

見つけたが幻の本赤い札

高志

僕に無いいつも立て板妻の口

弘委智

落し物二日続けてロスタイム

尚世

世渡りに避けて通れぬいやらしさ

忠央

ギブアップ惚れた道だが手に負えぬ

修

いやらしい目付きが獲物狙つてる

秀雄

足して二で割れば残念半分

柳弘

途中まで送つて未練増えただけ

博泉

反論もできないままの角砂糖

美籠

結婚前はまばゆいほどの妻でした

遠野

欲しいもの何にもないという嫌味

薫

念仏の途中坊さま目はお布施

あさ子

年金という国からのお給料

祥昭

真剣勝負途中の待った興醒める

武彦

残念の余り真直ぐ歩くカニ

結婚祝い百万にまだ足りてない

残念だが犬が歩幅を合わせてる

藍染に変える九月の鏡掛け

悔しさを残念会で盛りあげる

健康に注意と亡妻の手書きメモ

蚊のような虫さえ命のメカニズム

人間を渡り切れずにする挫折

かげろうは消えゆくものとしる初秋

川柳さんだ(兵庫)

田中 章子報

泣き声を聞けば乳房が張ってくる

子が宿る母のような娘の乳房

台風で人が減つてもする句会

台風に弄ばれて泣き寝入り

蒼天を残し台風去っていく

上陸は国賓級の報道で

人間の脆さおろおろ台風と雨

怖い者知らず百合子ハリケーン

台風のない爪何故か痕がある

台風の進路やきもきする案山子

サンブルに高値つきますオークション

蒲焼きの味を知らずに子が育つ

ラブレター焼いて青春止め刺す

洋

ルイ子

麗

茜

一

鈍甲

亜成

高鷲

恵子

キヨミ

一子

隆

加代子

ひとみ

つな子

ヨシエ

淑子

健彦

修平

博

好文

晃

焼きすぎて遺族が怒る骨拾い

終活にあれもこれもと手が焼ける

世話を焼く妻に感謝の金メダル

仲人が祝辞途中で絶句する

通帳とカードと妻が見当たらぬ

秋分の日からマネキン冬衣装

領収書余白で渡すおもてなし

万札は羽根をたたんでやって来る

キッチンで発達中の低気圧

たくさんいのちいただくイクラ丼

一年間を掛けた畑の行き届く

かもめーる二通来ただけ秋となる

川柳花の輪(大阪)

岡本

予報士が雲と格闘気象庁

雲なびく未来を誓った若かった

鼻唄のひとつも出ます昼の風呂

報道を気楽に観てる平和呆け

病室の窓に自由なはぐれ雲

台風の渦巻雲が龍のごと

気楽だなあ争うほどの遺産ない

気楽そうに見えるが俺は婿養子

国境を鷹はひらりと雲に飛ぶ

秋雲に夏の疲れを癒やす空

野 薫

雅 司

祐 康

雄太郎

花 門

哲 男

雅 尚

勝 正

耕 治

章 子

迪

正 和

薫報

やすの

勇太郎

敬 子

正太郎

みちる

陽

薫

昭 好

泰 子

笑 子

泣きついて借りたお金で雲がくれ

年毎に握るハンドル重くなり

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

暑い夜に涼を届ける虫の声

虫食ったキャベツが旨い無農薬

虫になり一生懸命作句する

秋夜長ウフ浮気の虫騒ぐ

彼と会い虫の鳴くよなプロポーズ

虫一匹助け地獄に備えとく

悪い虫付かない内に嫁に出す

虫の音がロマンを呼ぶよ秋の宵

バラリンピック泣き虫になる応援団

グラマーな美女に水虫うつされた

老老介護一つの鍵を握り合う

秘密事項一人知ってる鍵の穴

親友でも要のカギは持っている

じいちゃん鍵束持って放さない

人生の鍵をにぎった人に会う

鍵よカギ早く返事をしておくれ

メモに添えた冷たい鍵が置いてある

青春が今も浮いてる神田川

エレキより湯の町エレジーしみじみと

まつお

あや乃

克 茂

ちづる

一 歩

真 一

六 点

一 文

フジ子

いさお

絹 子

喜代子

光 男

信 二

高 鷲

美代子

雅 枝

雄 太

扶美代

瑠美子

みつこ

まつお

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 たちばな	16日(水) 14時締切 印象吟・夜(互選)・自由吟	立花公民館 (尼崎市塚口町3-39-7) 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸 和 田 川 柳 会	19日(土) 12時30分開場 指・攻める・渋い・リュック	岸和田市立福祉総合センター 南海電車「岸和田」駅より徒歩5分 〒596-0067 岸和田市南町9-17-818 藤井康信
和 歌 山 三 幸 柳 会	19日(土) 12時30分開場 ランク・飲む・家族	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川 柳 塔 みちのく	19日(土) 17時締切 労る・あつけない・詩人	弘前市松森町73「レストラン・セーブル」1F 0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 1F 0172-36-8605
川 柳 ねやがわ	20日(日) 14時締切 第40回 寝屋川市市民川柳大会 視・限界・裏切る・血筋・刻む・一転	寝屋川市市民会館 2F 1F 072-823-1221 京阪寝屋川市駅から京阪バス「太妻住宅」行で市民会館前下車 詳細は川柳塔誌11月号参照 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川 柳 藤 井 寺	20日(日) 14時締切 他人・券・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊 中 もくせい 川 柳 会	21日(月) 13時45分締切 古典・装う・もう・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曽根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
ほ たる 川 柳 同 好 会	22日(火) 13時30分締切 夜・つなぐ どないしょう(詠みこみ不可)	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川 柳 塔 すみよし	26日(土) 14時15分締切 我慢・攻める・やれやれ	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
はびきの 市 民 会 川 柳 会	27日(日) 14時締切 余裕・にこっ・トラブル	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東 徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川 柳 塔 わかやま 吟 社	27日(日) 10時30分開場 第24回 和歌山県川柳大会	場 所=和歌山県JAビル 11階 JR和歌山駅 表口から徒歩2分 詳細は川柳塔誌10月号42ページ参照
川 柳 ふうもん 吟 社	27日(日) 13時30分開場 刃こぼれ・ダメージ・どこへ行く	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	28日(月) 18時開場 棚・のがれる・甘い・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 会 塔 の 会	28日(月) 10時30分集合 吟 行 当日雑感・ボンコツ・やきもき・飯	集合場所:烏丸九太町ハートピア京都(月例会場)前 地下鉄「丸太町」駅⑤番出口エレベーター 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

11月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　　ら	3日(木) 14時締切 霜・片付け・休む	奈良市立中部公民館　4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
城北会 川柳会	5日(土) 14時締切 漏れる・相談・たっぷり 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線 千林大宮駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
富柳会	5日(土) 14時締切 狼・とにかく・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉吉会 川柳会	5日(土) 14時締切 柄・分かる・てっきり	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつ 吟　　社	5日(土) 13時30分締切 村・味方・迷信・揺れる	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
川柳 あまがさき	8日(火) 14時締切 叱る・音・やっど・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼
あかつき 川柳会	11日(金) 14時締切 鳴る・雲・無駄・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳塔 さ　　かい	11日(金) 13時開場 歩く・脳・折句・ぶどう	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	12日(土) 14時締切 翼・味・軽い	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
川柳塔 打　　吹	12日(土) 14時締切 影・生きる・ころころ	倉吉市上瀬町9 上瀬公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	13日(日) 14時締切 小火・とことん・構える・雑詠	八尾市洪川町・安中町集会所 1F JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
西宮北口 川柳会	14日(月) 14時締切 平凡・果す・わずらう・自由吟	西宮市立中央公民館 6F 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「ブレにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
川柳 さんだ	15日(火) 13時30分締切 方言・サイン・曲げる・どっしり 自由吟	JR「三田」駅前 キッピーモール6階 〒669-1545 三田市扶間が丘5-10-19 谷 祐康

柳界展望

天 位 両川 無限

果てしなく遠いオンリ
ーワンの道

★第43回東大阪市民川柳大会は、東大阪社会教育センターで132名の参加で開催。同人成績。

★第63八尾市民川柳大会は8月28日、八尾文化会館で11名の参加で開催。同人成績。

秀 句 新家 完司
私にはどれも似合わぬ
真善美

★富柳会第66回川柳大会は9月17日、富田林すばるホールで開催。同人成績。

秀 句 山野 寿之
産道を抜け人間の幕が
開く

★第10回岡山県川柳大会の同人成績。

天 位 新家 完司
点だけ飲めばでっかい丸になる

天 位 新家 完司
天 位 新家 完司
天 位 新家 完司

天 位 新家 完司
天 位 新家 完司
天 位 新家 完司

天 位 新家 完司
天 位 新家 完司
天 位 新家 完司

天 位 新家 完司
天 位 新家 完司
天 位 新家 完司

天 位 新家 完司
天 位 新家 完司
天 位 新家 完司

月14日、メセナホールで122名の参加で開催。

秀 句 伊達 郁夫
冷やっこ崩れた訳は話さない

▽柳界動向△
★時の川柳社主幹交代28年7月より平山繁夫↓矢沢和女さんに。

▽計 報△
■藤岡ヒデコさん(同人・府中市)は9月28日逝去。享年83。

■宮園射月芳さん(参与・貝塚市)は10月1日逝去。享年87。

▽お詫びして訂正△
▼9月号P1102段10行目、保州さん句。現実の↓現実。

▼10月号P110下段、各地十選の久保田千代選七句目、作者いさお↓いさむ。

▽新誌友紹介△
弘前市 ささきとみ江
紹介者 須郷 井蛙

大阪市 長高 俊雄
紹介者 古今堂蕉子

つり・同人総会最終確認
常任理事会 9月28日(金)

③同人名簿作成について
④定例確認事項

次回 10月28日(水)AM10時
分担について ②川柳塔ま

お詫び
12月号「一路集」の一題、当初「届く」が「川柳塔まつり」と重複のため「積む」に変更しましたところ、皆様にご迷惑おかけしました。深くお詫び申し上げます。

編集部

番傘川柳本社 新年おめでとうの会

日 時 平成29年1月9日(祝)

場 所 午前10時開場 出句締切 11時30分
ホテル大阪ベイタワー

(J.R.弁天町駅、地下鉄中央線弁天町駅下車)
〒552-0007 大阪市港区弁天1-2-1

TEL 06-6577-1111

第一部 式典

本社句会 13時～
14時30分

事前投句 「ひらく」 番傘川柳本社副幹事長 森中恵美子 選
(11月30日(水)必着)

宿 題 「ベット」 小島 蘭幸 選
「自由」 宮村 典子 選
「赤い」 福本 清美 選
「笑う」 阪本 高士 選

第三部 懇親宴 16時～17時30分(終了予定)
事前投句、宿題とも各題 1句 席題なし
出席者に限ります

◎ ◎ ◎ 事前投句ハガキに懇親宴の参加・不参加を明記の上、
本社事務所宛お送りください

会 費 2000円(弁当付き、掲載誌呈)
懇親宴 7000円

お問合せ・申込み 番傘川柳本社

〒530-0047 大阪市北区天満5-6-26

TEL 06-6361-2455

第14回 鳥取市鹿野町 ジュニア川柳大賞募集

★宿題と選者

「トマト」 新家 完司 選
「道」 木本 朱夏 選
「ひみつ」 石橋 芳山 選

締 切 11月18日(金)(当日消印有効)

★小学生・中学生に限る

★一人各題2句以内(未発表作品)

★所定の応募用紙(コピー可)に名前・住所・
学校名・学年を記入して投句してください。

★投句料は無料

投句先 〒689-0405 鳥取市鹿野町鹿野342
鳥取市教育委員会事務局
鹿野町分室「川柳係」

(封筒には「ジュニア川柳塔句」と朱書きのこと)

★優れた作品に対して、大賞・準賞・鹿野町
文化団体協議会長賞等を贈り、表彰します。

★大賞句は句木にし「鹿野町川柳街道」に建立
主 催 鳥取市・鳥取市教育委員会 他
後 援 川柳塔鹿野みか月

第37回 ときせん賞

締 切 平成29年1月31日(火) 消印有効

選 者 大野 風柳 森中恵美子
小島 蘭幸 徳永 政二
矢沢 和女

作 品 雑詠2句(未発表作品)

選句方法 無記名清記の上 選句1句ごとに
その合計点で順位決定

発 表 時の川柳誌 平成29年4月号
(ときせん賞1名・準ときせん賞2名
佳作7名)

応募方法 応募用紙または便箋に作品2句、
住所・氏名・電話・所属結社時の
川柳社の誌友、誌友外を記入

応募料 1000円(定額小為替・切手不可)
応募先 〒775-0019

加古川市野口町水足1160

岡田 篤 宛

時の川柳社

編集後記

★旅に出て迷いは深くなるばかり

薫風

★北から南から321名

もの方々がまづりにご参加くださった。ひさびさに交流の和を暖めてくださったことと思う。新同人を代表して沖繩から駆けつけた森山文切さん

(37歳)の力強い挨拶を紹介したい。「ここにおります19名、また本日参加できなかった新同人、それぞれが真剣に川柳に向き合い、同人としてお認めいただきました。同人としての責任を果たすべく、今後さらに川柳に打ち込んで参ります。組織の活性化には下からの突き上げが重要です。川柳塔社、ひいては川柳界全体の発展のために、新同人一同努力する所存です。未熟な点は多々あると思いますがどうか指導ご鞭撻賜りますよう、よろしく願います」。

新同人の皆さん、川柳塔にお力をお貸しください。期待しています。

★東京の孫から電話。「ユリイカが短歌特集をしているよ」と言う。早速書店に取り寄せてもらった。特集は「新しい短歌、ここにあります」。目次に並ぶ短歌の作家陣にほとんど馴染みがない。高校生のころ、短歌は先生について少しは習った。そう5年間ほど。石川啄木も若山牧水の作品も暗唱させられたものだ。新しい短歌、たぶん最先端の一首をユリイカから抜き出してみよう。

★「▼▼▼▼▼ココガ戦場?▼▼▼▼▼抗議シテヤル▼▼▼▼▼BOM B!」作者は萩原裕幸さん。この作品は湾岸戦争をモチーフとした短歌らしい。▼が爆弾のメタ

「希望の星」

人間や小さな生き物までこのようなく愛して、母や私や友人を川柳塔に導いて、いつも明りを灯して下さった三谷直男様のご逝去。八十二歳でした。三谷様は香港、台湾、イラン、南米、豪州等、企業戦士として活躍され、新聞、雑誌にも何度も紹介されました。退

ひとこと

戦後もビジネスアドバイザーとして、世界を相手に仕事をなさっておられました。日本の将来を案じ

られ政治家に発破をかける句が多かったけれど、本当は繊細な優しい心の持ち主で、人にも小さな生き物にも愛情を注ぎました。

「うちにしか来ない世渡り下手な猫」「国際線ハエが一匹思案顔」など、心暖まる作品も。熊本県山鹿市の小さな温泉町に住まわれて十数年、子供からお年寄りまで夢や希望を与えて下さった。多くの入から愛された山鹿の重鎮、希望の星を失って心に穴が開いたように寂しい。

(柳田 白沙)

フアー(隠喩)になつて
いるそうだ。明らかに意
識して定型を崩している
作品も多く、読んでいて
私は疲れたが、若者の心
を捉える何かがあるのだ
ろう。心地よい牧水の調
べは今も心の渇きを癒や
してくる。(朱夏)

○富山市議会で議長を含む9人が辞職し、不正請求額は3300万円に上るといふ。領収書の金額が改ざんや白紙の領収書に広報紙の印刷代として請求。私的な飲食やゴルフ、またブルーにして選挙資金に当てたという。
○第2の報酬と揶揄される不正が明るみに出る。富山市議会で議員報酬を月10万円引き上げ70万円とする条例を可決しているが、この不祥事なかろうか。(まつお)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(1月号)」

地名

市都
道府
道
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

檸檬抄投句用紙

「価値」(11月15日締切)

1月号発表

安土 理恵 選 — 共選 — 北野 哲男 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
県道
府雅
号

地名

市都
県道
府雅
号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 —	 		年 年
	月から半年 月から一年 5000円 9800円 } 該当の方に○をつけて下さい			

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980-4-298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

あなたの川柳ライフに 楽しく作句力がつく 川柳塔を！

生涯を川柳の向上と普及に尽くした麻生路郎は、大正十三年に月刊「川柳雑誌」を発刊いたしました。昭和四十年七月、路郎亡き後は同人制をとり「川柳塔」と改題し、現在に到っています。「川柳塔」を発刊している川柳塔社は、平成二十六年に創立九十年を迎えた歴史ある川柳結社です。

月刊誌「川柳塔」の特徴の一つは、投句できるコーナーがたくさんあることです。誌友（誌代半年以上前納者）が自由に投句できるのは「水煙抄」「愛染帖」「檸檬抄」「一路集」「初歩教室」などがあります。

また、木津川計先生の「川柳讃歌」及び同人による作品鑑賞やエッセーなど、作句の参考と刺激になる「読み物」も充実しています。

川柳に興味を持ってこれから取り組もうと思っておられる皆さん、また、すでに地域句会などに入会しておられる皆さんにとっても、この「川柳塔」は、必ず良きアドバイザーとなって川柳ライフを実り豊かなものにしてくれるでしょう。

この機会に是非仲間になってください。そして、限りなく深い川柳の道を一緒に歩んで行きましょう。川柳塔社一同、ここよりお待ちしております。

◎見本誌ご希望の方は川柳塔社事務所までにお申し込みください。

川
柳
塔
社

個人用

年賀広告 原稿台紙

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1/9頁 1/6頁 1/3頁 2/3頁 1/2頁 1頁

(ご希望の大きさを○で囲んでください。)

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

姓・雅号	住所	電話
	〒	()
		()

川柳など掲載希望事項

--

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201

川柳塔社

作品募集

1月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
水煙抄 (8句) 西出楓選
愛染帖 (2句) 新家完司選
檸檬抄「価値」 (2句) 北野哲男共選
安土理恵選
インスレーションナヒ (2句) 大西泰世選
一路集「古い」 吉岡泰選
「人 氣」 杉尾奏子選
初歩教室「仲間」 (3句) 山口光久担当

2月号

檸檬抄「チクチク」
一路集「防 ぐ」「変 身」
初歩教室「人 形」

本社 11 月 句 会

とき 11月7日(月) 13時開場・13時40分締切
— 開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし「季語に見る日本人の感性」
兼題「橋」
席題「打 席」
「脱 ぐ」
「ボ ン」
「未 熟」
鈴木 いさお 選
小谷 小雪 選
米田 恭昌 選
片山 かずお 選
木本 朱夏 選
小島 蘭幸 選
会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

本社 12 月 句 会

7日(水) 午後1時から

兼題「ちぎる」「どンドン」「真」
「気 分」「見 物」

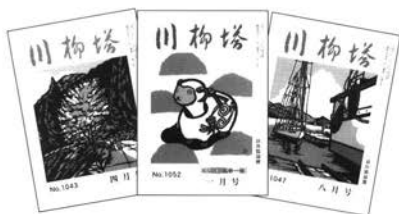
第35年度 夜市川柳募集

第6回「きっぱり」 たむらあきこ 選
ハガキに3句 11月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美 研 アー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

定価 八百円 (送料86円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)
二〇一六年(平成二十八年)十一月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話 〇六六七七九三三九〇番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス senryutou.net/html/index02.html

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しつかりと残る、深いコク。
料理をより美味しくする
ゴマを作りたい、真つすぐな
想いから生まれた逸品。
それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと
無く引き出した、オニザキの
自信作をお届けします。

株式会社 カニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>